

愛知県 鳥類 生息調査

1967-2016

50年の記録



発刊にあたって

愛知県では、昭和42年（1967年）から県内における野生鳥類の生息状況の実態を把握し、鳥類保護行政の基礎資料を得るため、日本野鳥の会愛知県支部と協力して、鳥類生息調査を実施してまいりましたが、この度、調査開始から50周年を迎えるため、これを記念して「愛知県鳥類生息調査（1967-2016）-50年の記録-」を発刊することといたしました。



調査開始当時は、調査地が6地点でしたが、その後、平成4年（1992年）までに調査地を22地点に充実させ、各地点で毎月調査を行い、確認された野鳥の種類・羽数、季節変化、分布を長期間にわたって把握してきました。

この記録誌は、半世紀にわたり積み重ねてきた膨大かつ貴重なデータを整理・分析して作成したものです。都市近郊、里山、水辺及び山林といった環境の各調査地点において、特徴的な野鳥を選定し、それぞれの経年的な変化を視覚的に分かりやすく図示しております。また、野鳥は環境変化の影響を受けやすいため、その増減は自然環境の変化を私たちに伝えるメッセージ（指標）であると捉え、できる限り地域の自然環境の変化についても考察をいたしました。

この記録誌が、多くの方々に、この地域の野鳥のこと、そして野鳥を取り巻く自然環境のこと、人と自然の関わりについて、知っていただく一助になれば幸いです。

さらに、本県では、平成25年（2013年）3月に「あいち生物多様性戦略2020」を策定し、「人と自然が共生するあいち」の実現に向けて、多様な主体の連携による生物多様性の保全活動を推進しています。この取組を進める上で、私たちの身近な存在で生物多様性の大切な要素である野鳥の生息状況を把握し、その保全に目を向けていくことは大変に重要でありますので、こうした面でも御活用をいただければと存じます。

最後になりますが、こうした貴重な記録誌ができましたのは、日本野鳥の会愛知県支部の御理解、御協力と、本調査に携わっていただいた歴代の調査員の方々、執筆者の方々の御尽力の賜物であり、深く感謝申し上げる次第です。

平成30年3月

愛知県環境部長 菅沼 綾子

目次

| | |
|----------------------------|-----|
| 鳥類生息調査 50 年に当たって | 1 |
| 調査地 MAP | 2 |
| 愛知県鳥類生息調査について | 3 |
| 調査地共通の解析 (スズメ) | 6 |
| 調査地共通の解析 (ハシボソガラス、ハシブトガラス) | 16 |
| 各調査地ごとの解析 | |
| 1 平和公園 | 26 |
| 2 平針 | 30 |
| 3 大山 | 34 |
| 4 扇子山 | 38 |
| 5 東大演習林 | 42 |
| 6 岩屋堂 | 46 |
| 7 鶉の山 | 50 |
| 8 鍋田 | 54 |
| 9 矢作川河口 | 58 |
| 10 木曾川葛木 | 64 |
| 11 木曾川玉ノ井 | 68 |
| 12 佐布里池 | 72 |
| 13 汐川河口 | 76 |
| 14 庄内川河口 | 80 |
| 15 茶臼山 | 84 |
| 16 闇苅 | 88 |
| 17 段戸裏谷 | 92 |
| 18 鍛冶屋敷 | 96 |
| 19 香嵐溪 | 100 |
| 20 粟代 | 104 |
| 21 県民の森 | 108 |
| 22 古山 | 112 |
| 愛知県内と段戸裏谷におけるソウシチョウの現状 | 118 |
| 愛知県におけるウグイスの繁殖分布拡大 | 122 |
| 愛知県におけるキビタキの繁殖分布拡大 | 130 |
| あとがき | 134 |
| 付録 愛知県鳥類目録 (2018 年 2 月現在) | 135 |



鳥類生息調査 50年に当たって

小笠原 昭夫

カワウが群棲する知多半島の“鶉の山”へ私が通い始めたのは、1960年の春でした。前年の伊勢湾台風による営巣木の被害は甚大でしたが、明治以前から受け継がれてきた肥料としての糞の需用が激減し、村人による保護が手薄になったことも深刻でした。カワウを護りたい…。その一念から、私は足繁く通って、繁殖調査に取り組みました。

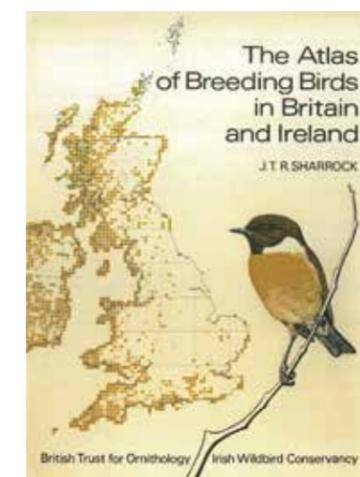
1962年に南知多道路の建設計画が発表され、その道路がカワウの繁殖地の直近を通ることから、繁殖地衰亡の危機は一層高まり、私を自然保護の先進国アメリカの幾つかの野生生物保護区を訪ねて、保全の方策を学ぶことへと駆り立てました。

1967年秋から愛知県の鳥類生息調査が始まり、私は鶉の山の担当になりました。県内に多数の調査地を設け、決められた調査員が毎月1回、種ごとの個体数を数えるという調査です。「生態学の基礎」という本の中で、著者オーダムは「何がいたかではなく、何が何個体いたか、を数えるところから生態学は始まる」と述べていますが、それに添う調査でした。これを積み重ねていくと、いろいろなことが解ってきます。一年分の調査結果からは鳥たちのおよその生息状況が、並行して行われた他地域の結果と合わせると、広域での季節ごとの分布状況が、更に何年も続けることにより、分布の変化や個体数の変動などが解ります。

当時入手したイギリスの資料(写真)には目を眩りました。国内全域を10km四方の区画に分け(総区画数3,862)、1968～72年に各区画内に生息した全鳥種の繁殖状況を、丸の大きさで大(繁殖確実)、中(繁殖の可能性大)、小(繁殖期・繁殖可能な環境に生息)の3段階に分けて図示しているのです。アオサギなどは1928年からの全国での営巣数がグラフで示され、さすが博物学の伝統ある国ならではの…と感服しました。

愛知県の鳥類調査が始まって半世紀、調査地の一部変更はありましたが、これまでの調査結果を見せていただいたところ、多くの種の動態や、2種のカラスの(おそらく)生ごみ漁りに関連した分布変化等、興味深い内容が読み取れました。

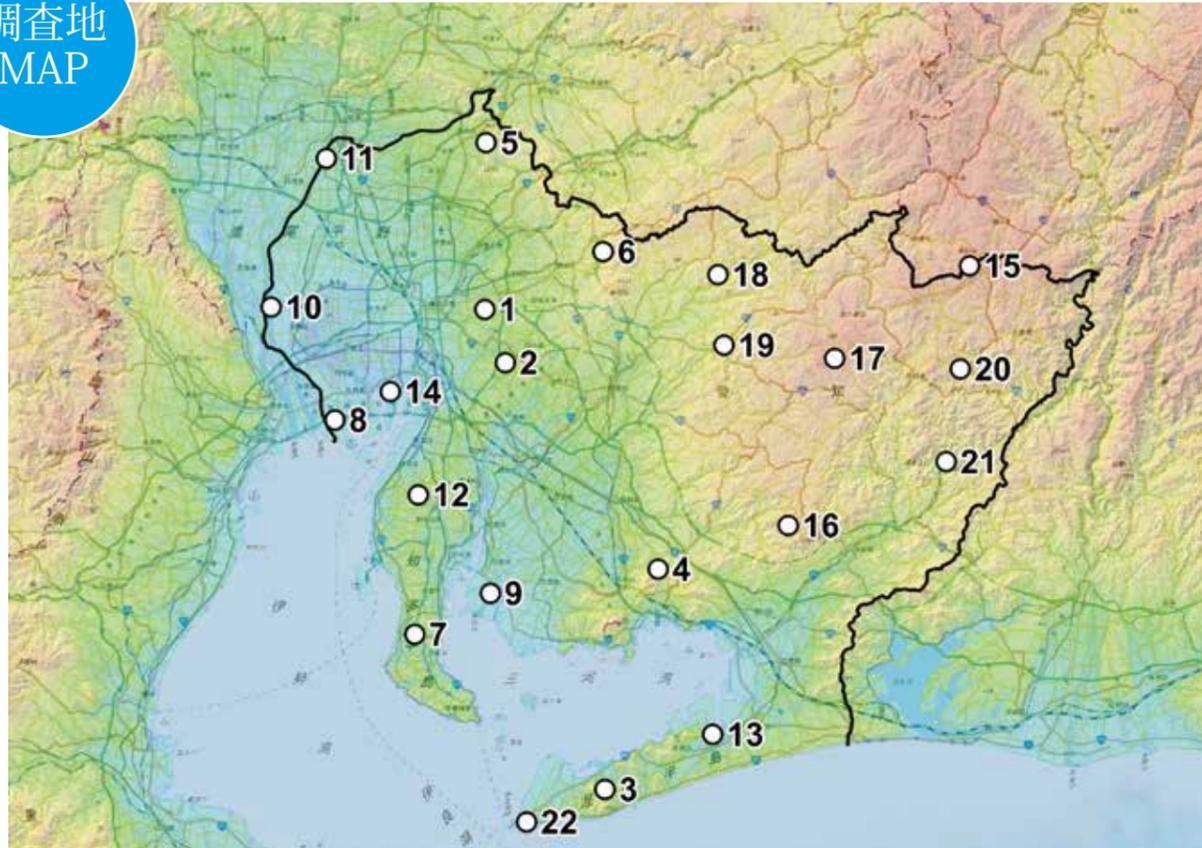
この調査を、できれば繁殖項目も加えて、続けて欲しいと思います。更には全国で統一された調査が定期的に行われることを期待します。自然環境の保全に役立つ貴重な資料が蓄積されることを、心から願っています。



J.T.R. シャロックス：イギリス諸島における鳥類の繁殖地図帳(1977, T. & A.D. Poyser Ltd)の表紙カバー。この表紙絵はノビタキ(日本産と同種)のイギリスでの繁殖分布を例示。本文には詳しい説明が付されている。



調査地
MAP



- | | |
|------------------------------|------------------|
| ① 平和公園 (名古屋市千種区) | ⑫ 佐布里池 (知多市) |
| ② 平針 (名古屋市天白区) | ⑬ 汐川河口 (豊橋市、田原市) |
| ③ 大山 (田原市) | ⑭ 庄内川河口 (名古屋市港区) |
| ④ 扇子山 (岡崎市) | ⑮ 茶臼山 (北設楽郡豊根村) |
| ⑤ 東大演習林 ^(※) (犬山市) | ⑯ 闇苅 (岡崎市) |
| ⑥ 岩屋堂 (瀬戸市) | ⑰ 段戸裏谷 (北設楽郡設楽町) |
| ⑦ 鶉の山 (知多郡美浜町) | ⑱ 鍛冶屋敷 (豊田市) |
| ⑧ 鍋田 (弥富市) | ⑲ 香嵐溪 (豊田市) |
| ⑨ 矢作川河口 (碧南市、西尾市) | ⑳ 粟代 (北設楽郡東栄町) |
| ⑩ 木曾川葛木 (愛西市) | ㉑ 県民の森 (新城市) |
| ⑪ 木曾川玉ノ井 (一宮市) | ㉒ 古山 (田原市) |

※東京大学愛知演習林は2011年6月より「生態水文学研究所」に名称変更されました。

1 調査期間

(1) 調査の始まり

愛知県鳥類生息調査は、1967年度に林野庁が自然保全の基礎調査の一つとして、各都道府県に数カ所の調査地点を指定し、財団法人日本鳥類保護連盟に委託して鳥類生息調査を開始したことがきっかけとなっている。この時、愛知県では6地点が指定された。当時、愛知県としても基礎的な資料を得るために鳥類の生息状況を把握する必要があるとして、1968年度には林野庁が指定した調査地点に2地点追加した8地点で県独自の調査を開始した。この調査は愛知県が日本野鳥の会愛知県支部(調査開始時は名古屋支部)へ委託した。

(2) 調査地の移り変わり

1967年度から開始されたこの調査は、当初は6地点からスタートしているが、このうち、平和公園(名古屋市千種区)、大山(田原市:当時の調査地は小塩津)、鶉の山(知多郡美浜町)、県民の森(新城市)については、現在まで継続して調査が行われている。その後、1968年度に平針(名古屋市天白区)、1970年度に鍋田(弥富市)、1972年度に東大演習林(犬山市)、矢作川河口(碧南市、西尾市)、木曾川玉ノ井(一宮市)、段戸裏谷(北設楽郡設楽町)を調査地点として追加した。1974年度には佐布里池(知多市)、汐川河口(豊橋市、田原市)、香嵐溪(豊田市)を、1975年度には岩屋堂(瀬戸市)を追加した。

さらに、1983年度には、県内全域の鳥類生息状況を効率的に把握するため、調査地点の再配置を行った。この際、国土地理院発行の5万分の1地図を22メッシュ(15km四方)に区切り、1メッシュ内に1調査地点を原則として、調査地の配置を変更し、20カ所の調査地点を設定した。その結果、熊張(長久手市)、明見(岡崎市)、乳岩川(新城市)、三好池(みよし市)、猿投山(瀬戸市、豊田市)、新城保全林(新城市)の調査を終了し、扇子山(岡崎市)、木曾川葛木(愛西市)、茶臼山(北設楽郡豊根村)、闇苅(岡崎市)、鍛冶屋敷(豊田市)、粟代(北設楽郡東栄町)を追加するかたちとなった。

1992年度には、藤前干潟の状況を把握するために庄内川河口(名古屋市港区)を、サシバの渡り地点として重要な古山(田原市)をそれぞれ追加し、合計22地点となった。これら22地点については、現在も継続して調査を行っている。

1967年度から調査を継続している地点では50年、一番最近調査地点となった庄内川河口と古山でも25年継続して調査されていることになり、その間に変化した自然環境について、鳥類の種類や確認数の変化で知ることができる貴重な記録となっている。

なお、調査地ごとの詳細については、各調査員からの報告をご覧ください。

2 調査方法

調査は毎月1回行う。

水辺を除く調査地の調査は、ラインセンサス法を基本とした。調査地内に延長3kmの調査定線を設け、この調査定線上を時速1.5km程度の速さで歩き、調査定線の左右それぞれ25m以内に見聞する鳥類のすべてを記録した。なお、調査定線については、基本は3kmであるが、調査地によっては3km以上の定線を調査している。

水辺の調査地では、延長1km、幅500mの区域内に見聞する鳥類のすべてを記録した。

また、調査定線上に定点を設定することで、より多くの種類の鳥類が確認できるような工夫をしている調査地もある。

昨今「スズメが減っている」とよく言われる。50年の結果を地勢的に似ている調査地を比較しながら考察してみた。

1. 都市近郊：平和公園、平針

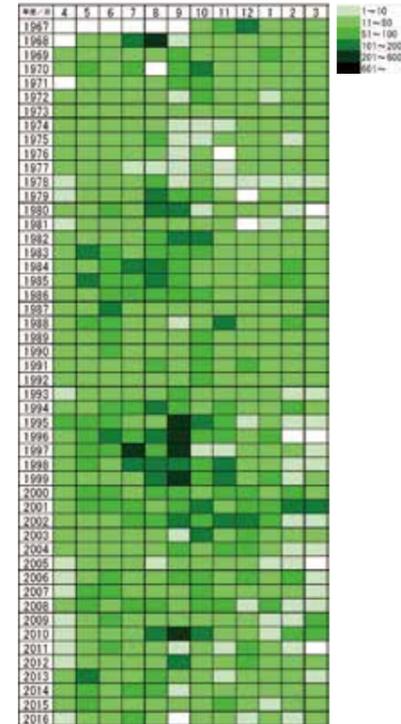
平和公園、平針周辺は住宅地に囲まれた緑地である。平和公園は公園緑地として保全されているため緑地面積が大きく減少することはなかったが、平針は開発により大きく減っている。

平和公園は調査当初から一年を通してよく見られているが1979年から1985年頃をピークとするまで増え続け、その後1994年までは多少の増減を繰り返しながら減少している。1995年から1999年をピークとするまで増加し、その後は増減を繰り返しながら減少傾向にある。直近2016年は57羽が最大となっているが、調査当初から大きく減少しているわけではない。一年を通してみれば9月が最大になる傾向がある。

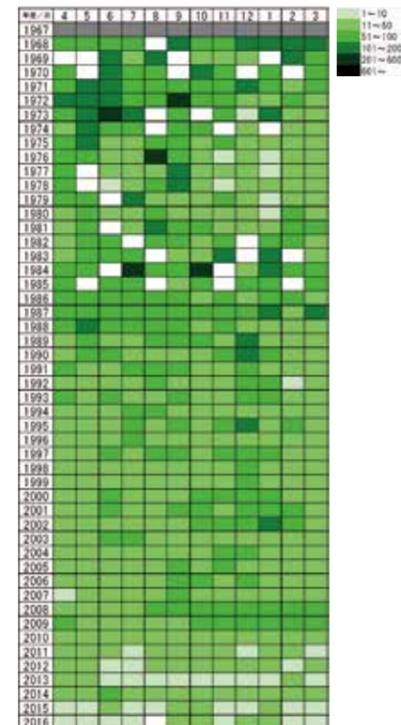
平針は調査開始より一年を通して多く見られており、1972、1973、1976年には最大200羽を超える数を観察する月もあった。その後は徐々に数を減らし、1984年頃に一時的に増えるが、2009年までは概ね年間600羽前後で推移している。しかし、その後急激に数を減らし、直近2年では最大でも20羽しか確認されていない。調査当時の里山的な環境がなくなり宅地開発による新興住宅がせまり、スズメの営巣とその後の生息する環境ともなくなりつつあるためと考えられる。



1. 平和公園



2. 平針



2. 里山：扇子山、岩屋堂、東大演習林

扇子山は1983年の調査以来、数は多くはないが観察されている。1996年、2002年、2003年では通年見られ、やや数が増えているが、直近の10年では主に春夏の繁殖期には見られるが冬季は見られない傾向が続いている。

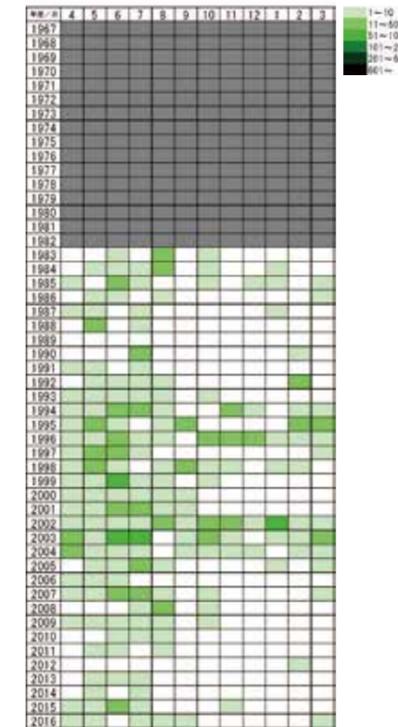
岩屋堂は扇子山と傾向が似ていて数は少ないが、1983年前後をピークにその後は見られることの方が少なくなり、直近10年はほとんど見られなくなってしまった。

東大演習林は地勢として里山に分類されるが、先の扇子山、岩屋堂とは状況が異なる。

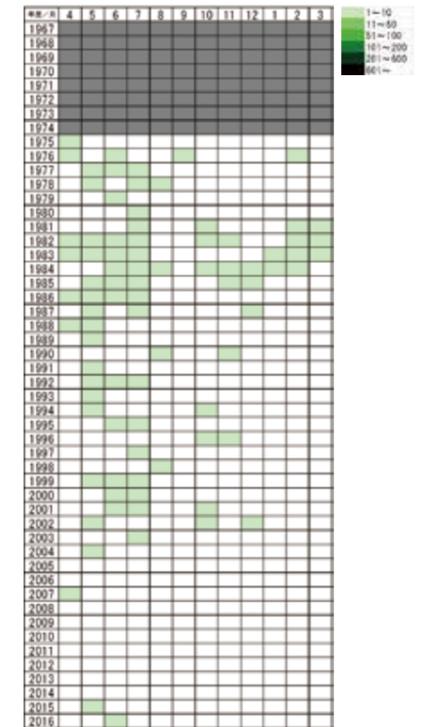
1972年の調査以来数は増加し、1996年～2003年に200羽を超えることが多くなり一つのピークとなっている。その後減少傾向になるが概ね調査当初と同じぐらいつり、大きく減少しているわけではない。



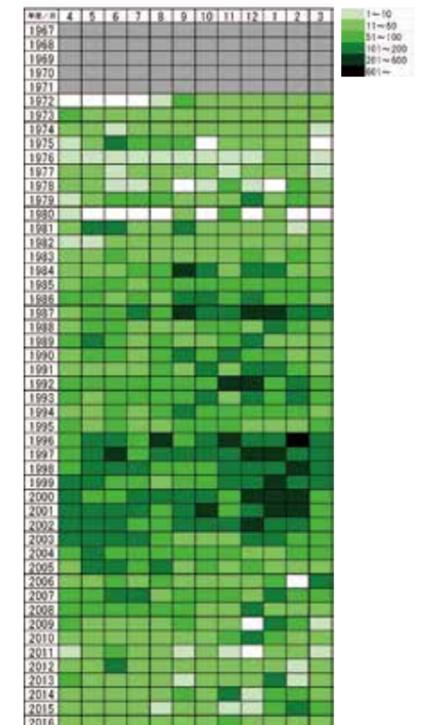
4. 扇子山



6. 岩屋堂



5. 東大演習林



3. 水辺1：鶺の山、佐布里池

鶺の山は美浜町、佐布里池は知多市にあるため池であり、どちらも知多半島にあり比較的増減の傾向も似ている。

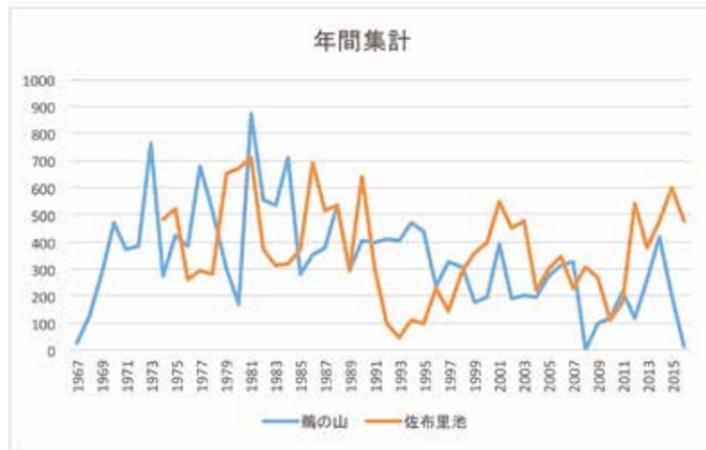
鶺の山は調査当初から一年を通して20～40羽前後が確認されていて、1981年から1984年頃が最大となるピークを形成するが、その後、徐々に数を減らしつつあり、直近の2016年には年間11羽しか確認されていない。これが一時的なものか分からない。

また、2008年には1羽も観察されておらず、2009年から2012年の秋冬にも観察されていないが、何か特有の事象があったかもしれない。年間では9月が最大となる傾向があり2000年頃までは、その傾向がよく出ている。

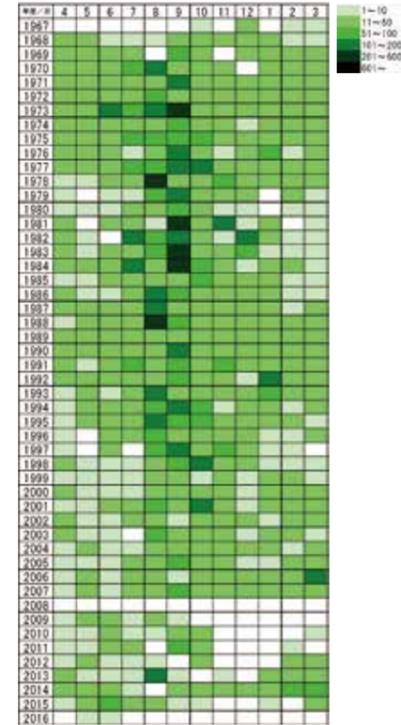
佐布里池は調査当初より多く見られている。1991年までは大きく増減を繰り返しながら年間平均500羽程度を保っていたが、1993年を最小に急激に数を減らしている。その後、2002、2003年まで増え、また2009年まで減少し近年まで増加傾向にある。

このように大きな増減を繰り返してはいるが、調査当初より数は減っていない。

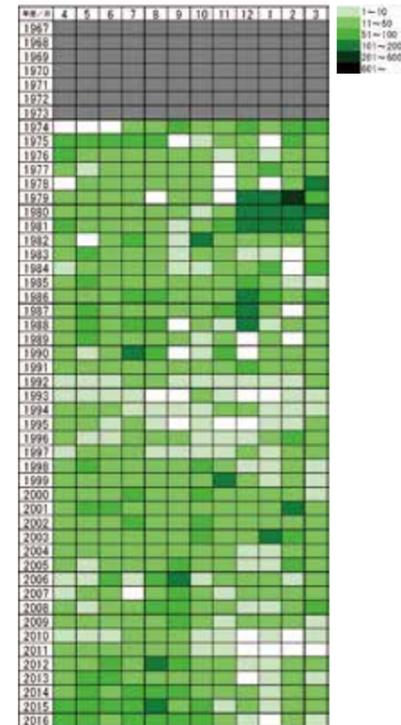
年間の推移では、当初は冬季に増える傾向であったが、近年は春夏に増える傾向である。



7. 鶺の山



12. 佐布里池



4. 水辺2：鍋田、汐川河口

鍋田と汐川河口はスズメの増減を見るうえでは鍋田と汐川の後背地とも田畑を中心とする耕作地であり、傾向も似ている。

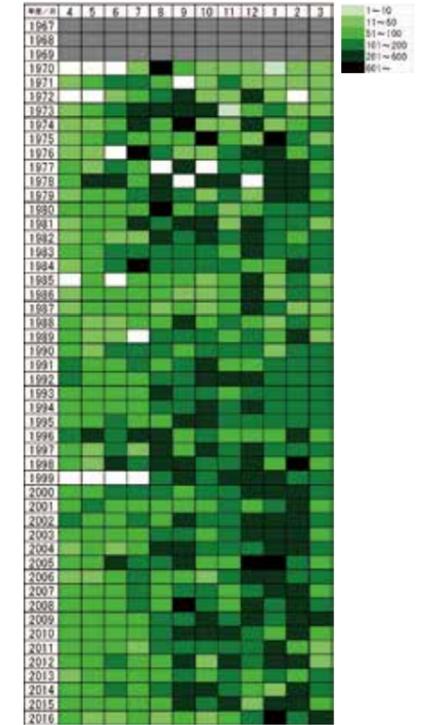
鍋田は一年の傾向としては、12月、1月をピークとする傾向にある。最大は1976年7月に3076羽を記録し、その後は年間の集計で2000羽前後を推移し現在に至っており、当初より減少しているわけではない。また、近年伊勢湾岸自動車道の擁壁の水抜き穴で繁殖しているのをよく見かける。

汐川河口では、干潟だけでなく後背地も調査対象となっており、範囲も広いので野鳥の数も多い。特にスズメの数は他の調査地と比較して桁違いに多い。

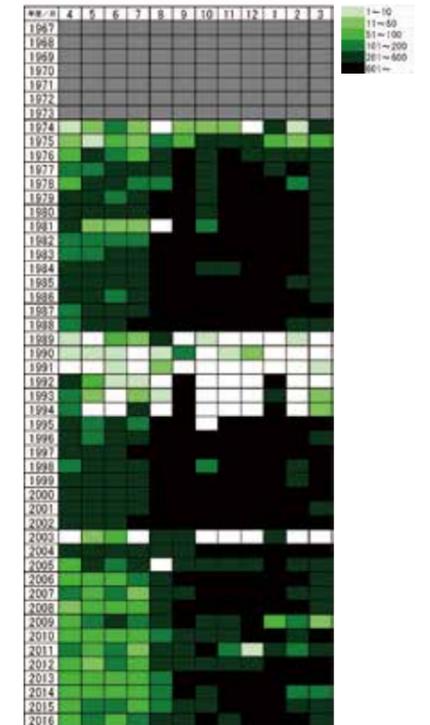
傾向としては調査当初より1987年までは増加傾向にあり、1989年から1994年には急激に数を減らし、翌年の1995年から2002年にはまた最大年間2万羽弱となるまで増え、2005年以降は6000羽前後で推移し、現在に至っている。



8. 鍋田



13. 汐川河口



5. 水辺3：矢作川河口、庄内川河口

矢作川は碧南市と西尾市を跨ぎ三河湾に注ぐ河川で、この河口より約6kmまでを調査している。庄内川は名古屋市を流れ名古屋港に注ぐ河川で、河口は藤前干潟となっている。

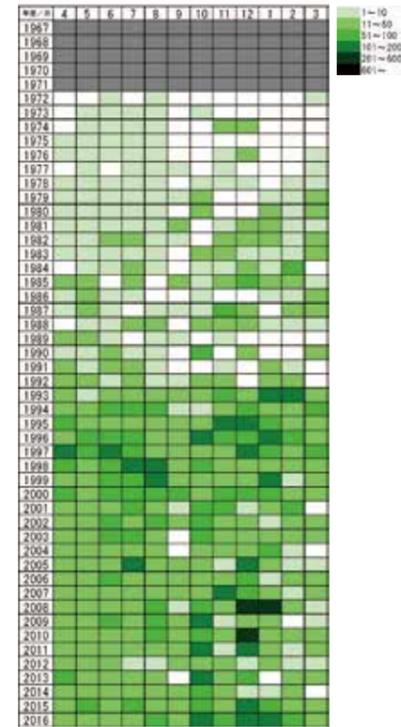
矢作川河口は調査を始めた1972年頃は春夏に10羽以下が見られる程度の種であったが、その後、徐々に秋冬にも見られるようになり数も増え始めた。特に1992年頃からその傾向がより強まり1997年がピークとなるまで急激に増加している。その後2006年まで減少している。2007年以降は、200羽から1000羽の間を推移し現在に至っている。一年の推移をみると1992年、2000年頃は春と秋に増える2つあったピークが近年は秋だけの1こぶになっている。図を見れば明らかであるように調査当初より増加している。

庄内川河口では1992年の調査当初から多く見られていたが、1997年を最大とする増減を繰り返しながら減少しつつあり、調査当初よりかなり減少している。

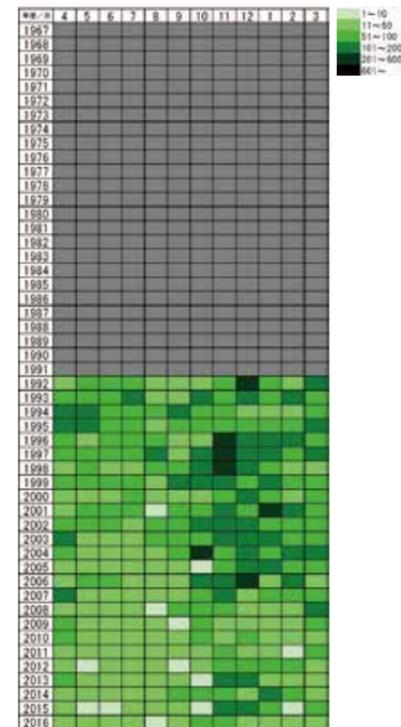
一年の推移では秋季が多く、繁殖期の春夏は減少する傾向がある。近年はその最大最小の振幅が小さくなっており、その傾向が弱まりつつある。



9. 矢作川河口



14. 庄内川河口



6. 水辺4：木曾川葛木、木曾川玉ノ井

この2つの調査地は、同じ木曾川沿いにあり、葛木は河口より16kmから20km、玉ノ井は40kmから42km程の位置にある。葛木は堤防から俯瞰する形で堤内外を調査するが、玉ノ井は堤外の河川敷を調査する。スズメの確認状況も大きく違う。

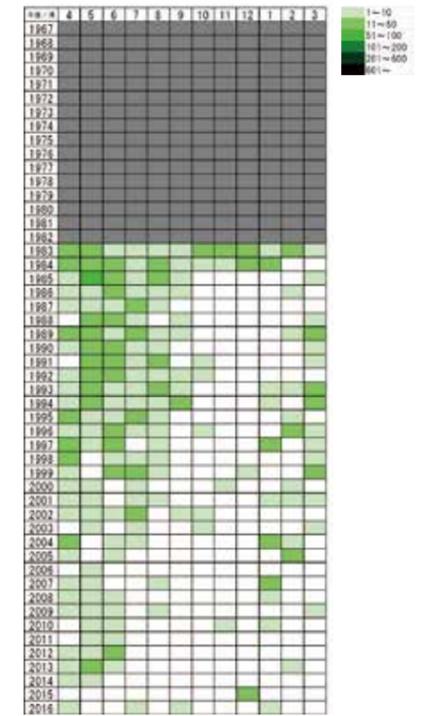
木曾川葛木は、調査当初こそ一年を通してで見られたが、その後は主に春夏に見られ、秋冬には見られない傾向にある。

1985年5月の84羽を最大に、その後は減少し見られる回数も減って近年は特に少ない。

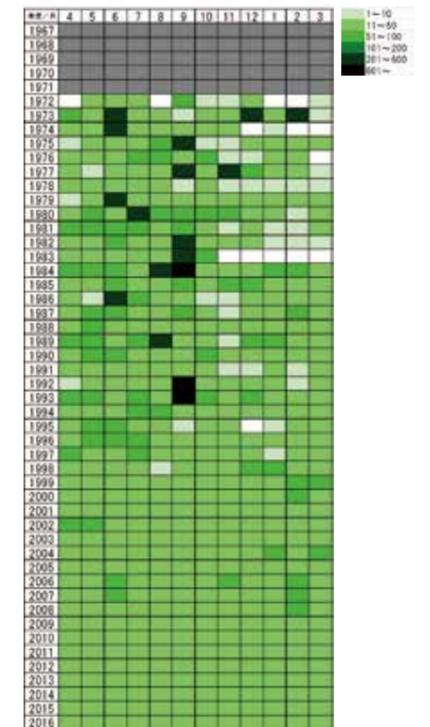
木曾川玉ノ井は、調査当初から一年を通して比較的多く見られている。1993年頃までは一年の中でも最大最小の振り幅が大きいですが、その後は変動が少なく当初よりは減少しているが、近年は安定している。



10. 木曾川葛木



11. 木曾川玉ノ井



7. 耕地・水辺 5：大山（耕地）、古山（水辺）

大山、古山とも旧渥美町（現田原市）の調査地であり、大山は、ほ場整備のすんだ山間の耕作地を中心にあつみ大山トンネルの入り口付近までを、古山は太平洋側を走る国道42号から伊良湖港、国道256号を経てほ場整備の済んだ耕作地を周るルートである。

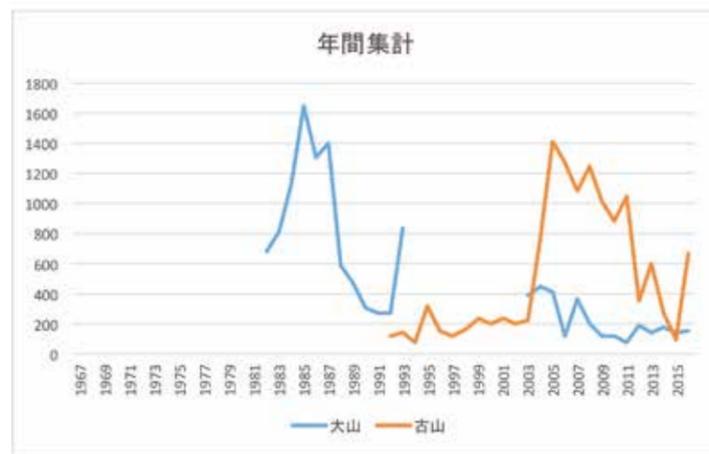
大山は、1994年から2002年の未調査期間があるため連続性が保たれていない。

1982年から1993年の変移をみると当初から1985年をピークに増加し、その後急激に数を減らしている。

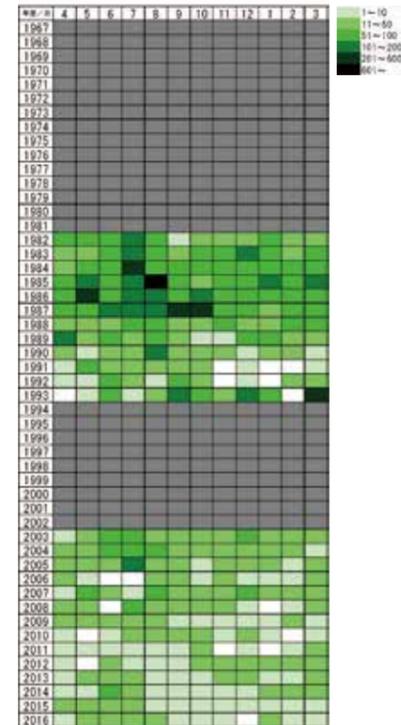
2003年の調査再開時は、前期より年間を通じてかなり数が減っている。その後、直近まで減少傾向にある。

古山は、1992年の調査当初より2003年まで少しずつ増えていく傾向であったが、2004年から急激に数を増やし、最大時は2005年に年間1400羽近くになっている。その後2015年までは多少の増減を繰り返しながら減少し、2016年はやや回復傾向にあるようである。調査当初に比べれば近年の方が数は多い。

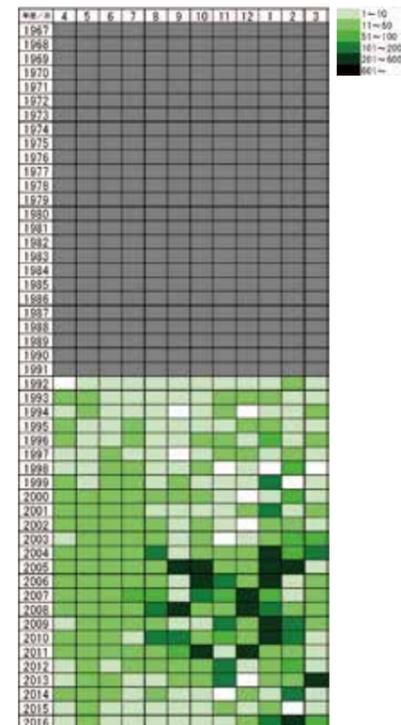
年間の推移をみると秋冬季に増え、繁殖期には減る傾向がある。



3. 大山



22. 古山



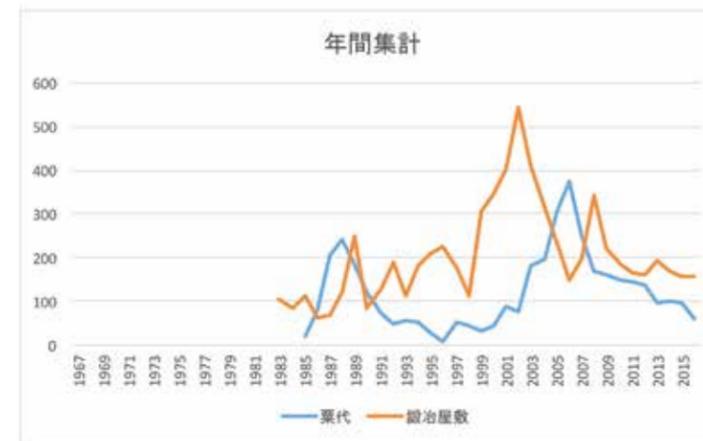
8. 山林 1：粟代、鍛冶屋敷

粟代は、北設楽郡東栄町の調査地であり、鍛冶屋敷は、旧東加茂郡（現豊田市）にある調査地である。どちらも山間の河川、県道を主とした地勢で標高の違いはあるが増減は同じような傾向がある。

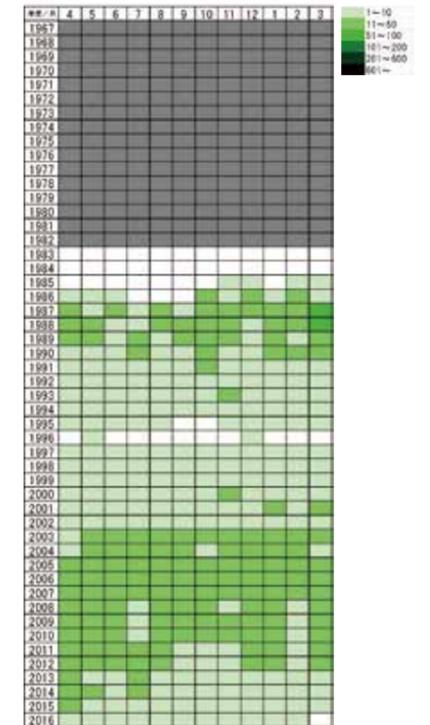
粟代は、調査当初は見られなかったが、その3年目（1985年）以降に見られるようになり、1987年から1989年をピークとして1996年が最小となるまで減少した。その後、また増加傾向に転じて、2006年を2度目のピークとして、その後は減少しつつ現在に至っている。しかし、調査当初より大きく減少しているわけではない。また、季節による変化が少ないのが特徴である。

鍛冶屋敷は、調査当初より増減を繰り返しながら増加し、2002年をピークとして減少に転じるが、増加時と同じように増減しながら減少して現在に至っている。現時点では、当初よりは増えているが、今後減っていく可能性がある。

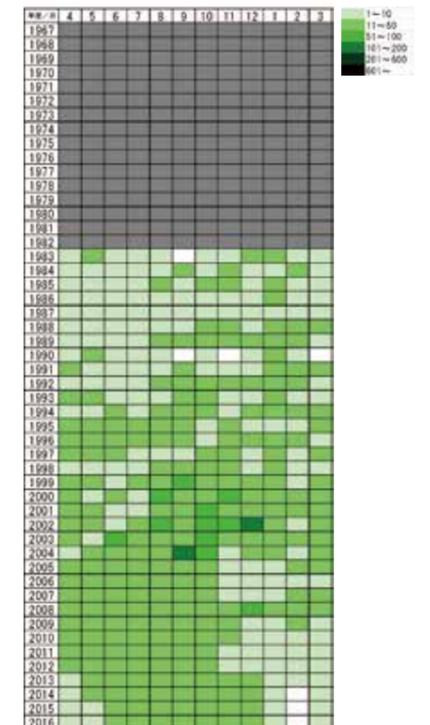
また、当初は春季より冬季に多い傾向にあるが、月日を経つにつれ、徐々に夏季を経て春季が多くなっていく傾向がある。直近4年を見ると、また春季から夏季、秋季へシフトしていくように見える。



20. 粟代



18. 鍛冶屋敷



9. 山林 2：香嵐溪、県民の森

香嵐溪は、豊田市足助町、県民の森は旧鳳来町（現新城市）にある調査地である。どちらも観光地やレクリエーション施設であるため、程よく森林の環境が維持されている。

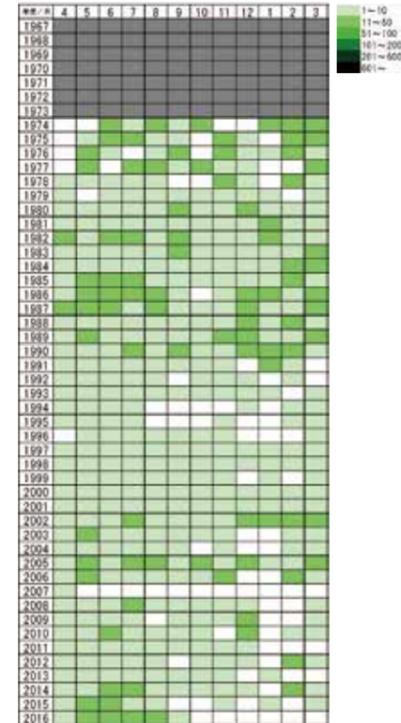
香嵐溪は、多くても1度に30羽程度であるがほぼ通年みられ、調査当初より大きな増減がない。グラフでは振り幅が大きいように見えるが、図表の通りあまり差がない。

その中でも1986年、2002年に2つのピークがあり、その間の1991年から2001年頃はやや数を減らしている。その後2007年に最小となり、現在まで数を増やしつつある。1年を通して見られるが秋冬に多くなる傾向であり、顕著ではない。直近2年を見ると冬季に減る傾向になりつつある。

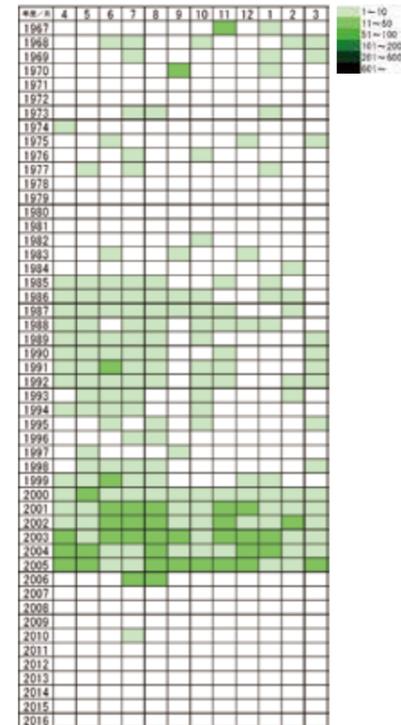
県民の森は調査当初の1967年から1984年までの18年間は年5羽程度見られる程度の種であったが、それ以降1994年までは数は少ないが比較的好くみられるようになった。その後、一時的に数を減らし、2000年から増え2005年をピークとするまで増加し、その後急激に減らし、直近の10年はほとんど見られなくなってしまった。



19. 香嵐溪



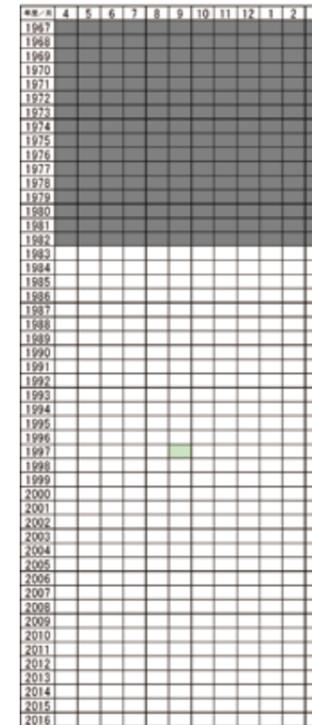
21. 県民の森



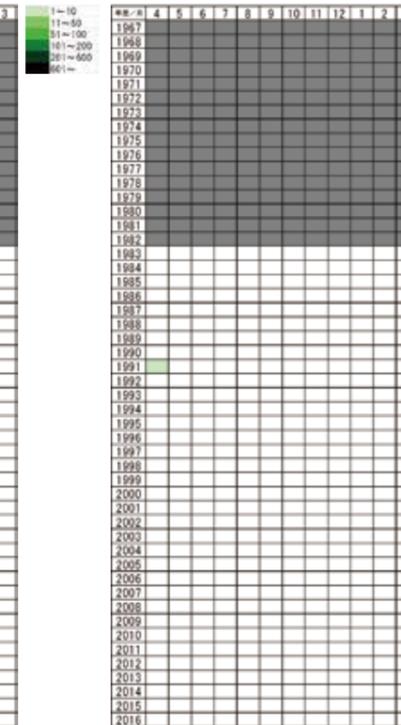
10. 山林 3：茶臼山、闇苎、段戸裏谷

どの調査地も過去にそれぞれ1度見られた程度で、スズメの繁殖及び生息する環境ではないと言える。

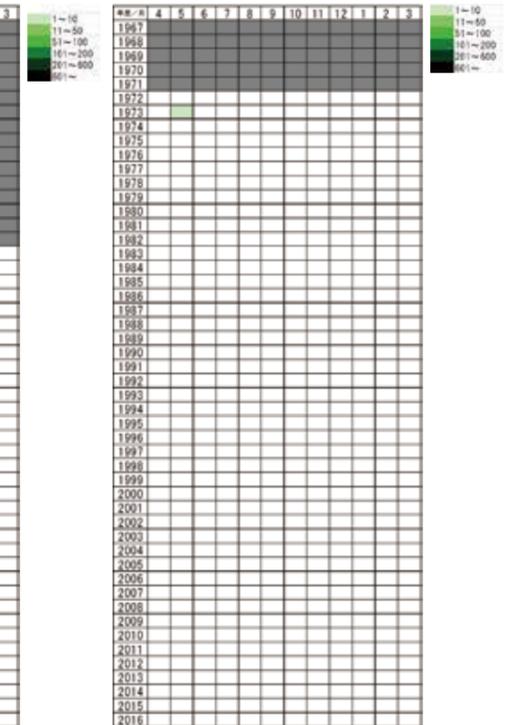
15. 茶臼山



16. 闇苎



17. 段戸裏谷



まとめ

50年の調査結果から、調査地（22地点）をその環境の遷移により都市近郊、里山、水辺、山林に分けて、スズメの推移について考察した。今回の解析では増減の幅の大きさや季節による増減などが明らかになった。また、減る傾向にある地点、増加傾向にある地点と調査地毎に特徴があることが明らかになった。

つまり、今回の長期間に渡る調査の解析結果からみると、スズメが減っているとは一概に言えないことが判明した。この調査結果に地勢、調査地毎の詳細な土地利用、植生の遷移、繁殖の状況等を含めると、さらに詳細な解析が可能である。

また、他の種との関係を調べると新たな発見がある可能性もあり、今後の解析に期待したい。

（新實 豊）

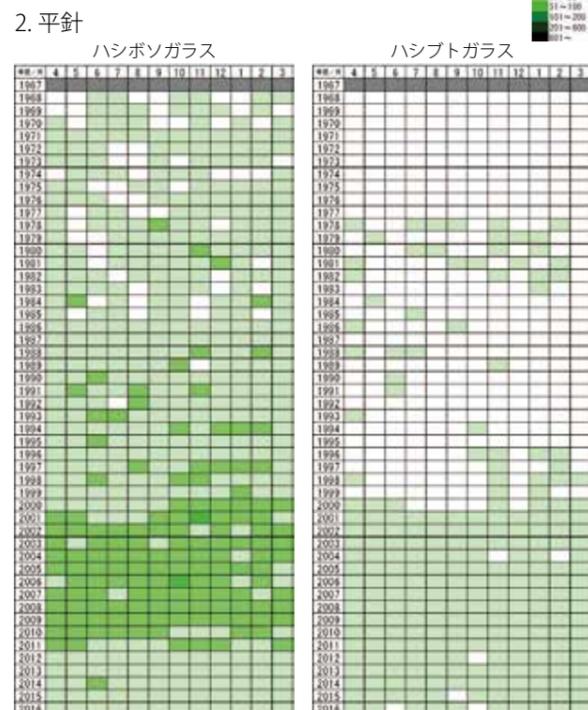
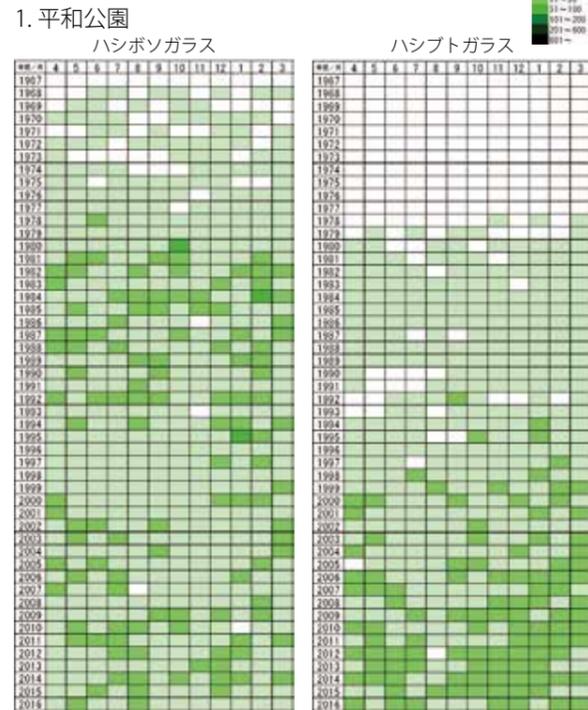
数ある野鳥の中でも、良くも悪くも最もなじみが深いと言えるカラス（ハシブトガラス、ハシボソガラス）について、50年の調査結果を地勢別に考察する。

ハシボソガラスは体長が50cmほど、細いクチバシで、「ガーガー」と濁った鳴き声の特徴のカラスで、河川敷や農耕地などの開けた環境に生息し、食性は雑食ではあるが植物質を好む傾向にある。一方、ハシブトガラスは体長が56cmほどとハシボソガラスよりやや大きく、縦に太いクチバシで、「カーカー」と比較的澄んだ鳴き声の特徴のカラスで、元来は山間部などの森林を生息地とし、ハシボソガラスと同じく雑食であるが肉食性が強い。

日本において、以前はハシボソガラスは人里、ハシブトガラスは森林と住み分けされていたが、ハシブトガラスが都市部に進出して個体数を増やし、一方、ハシボソガラスはそれに押されて個体数が漸減していると言われている。

1. 都市近郊：平和公園、平針

ハシボソガラスは1980年代から、ハシブトガラスは1990年代から、どちらも10羽未満から60羽程度と数が増えているが、それ以降は大きな増加は見られない。周辺の都市化によって、生ゴミなどのエサを採る機会が増えて増加したものの、カラス対策も同時に行われたため、それ以降の増加は抑えられたものと思われる。平針においてハシボソガラスの数が2011年以降、10羽～30羽から10羽未満へと急に減っているが、宅地化によって周辺の森林や耕地がなくなったため、ハシブトガラスに比べ種子や果実などの植物質のエサを採る傾向の強いハシボソガラスにとってエサを採る場所が減ったことが原因と思われる。



2. 耕地：大山、鍋田

大山は、1994年～2002年の間に調査が中断されていて連続性が保たれていないが、ハシボソガラスは中断前で最大149羽と再開後で最大115羽と大きな減少が見られない。

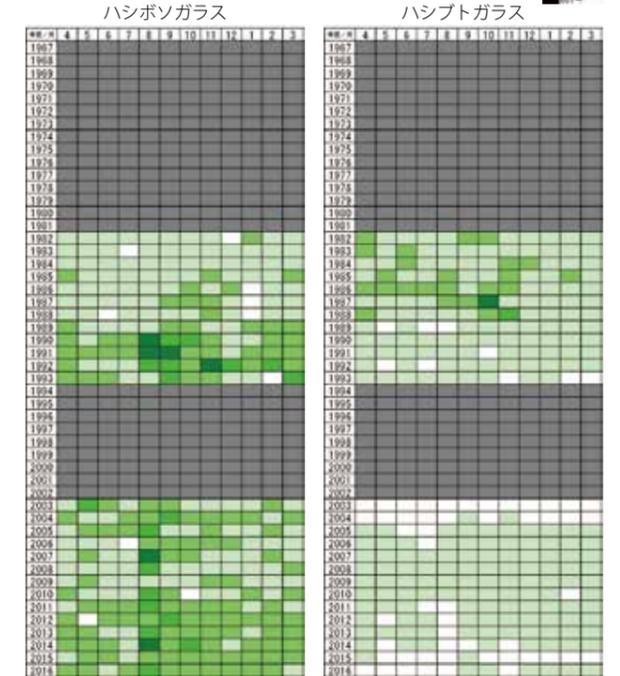
一方、ハシブトガラスは中断前は最大で134羽であったものが、再開後は最大でも10羽と大きく数が減少している。

ハシブトガラスの減少の原因は不明であるが、ハシボソガラスにとっては耕地としての環境は大きく変わっていないため数の変化もあまりないものと思われる。

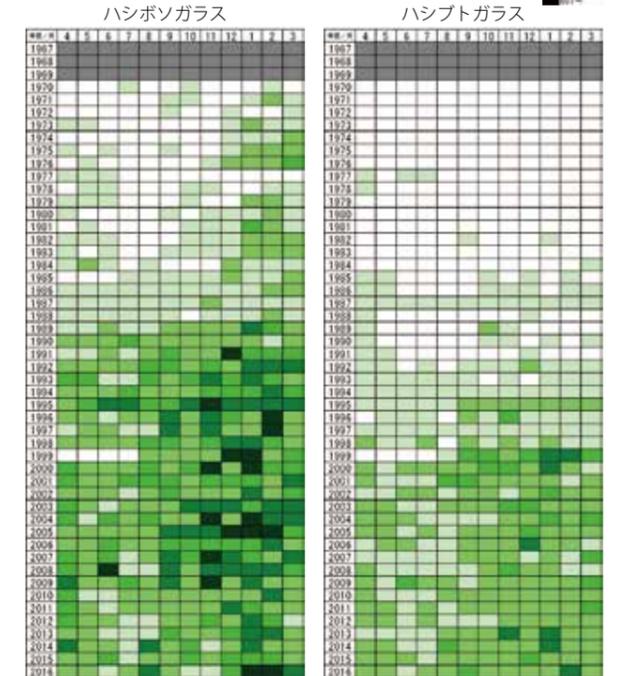
鍋田は水辺に分類されているが干拓地としてほとんどが田畑になっているため、実際は耕地に近い調査地である。ここは1990年前後を境に、ハシボソガラスが最大50羽前後、ハシブトガラスが最大12羽だったものが、1990年以降にはハシボソガラスが最大で339羽、ハシブトガラスが最大163羽と増加している。

近年、湾岸の開発により餌場となる耕地や草地在減少し、替わってエサとなる生ゴミが確保できる宅地が増えていないにもかかわらず、それ以降は現在に至るまで数が減る様子がない。原因として考えられるのは、同じく1990年頃より増加している弥富野鳥園を営巣地にしているカワウの増加である。カラスがカワウの巣から卵を盗んで食べることは良く知られており、確証はないがカワウの営巣地を食糧源として、個体数の増加と維持を凶っている可能性がある。

3. 大山



8. 鍋田



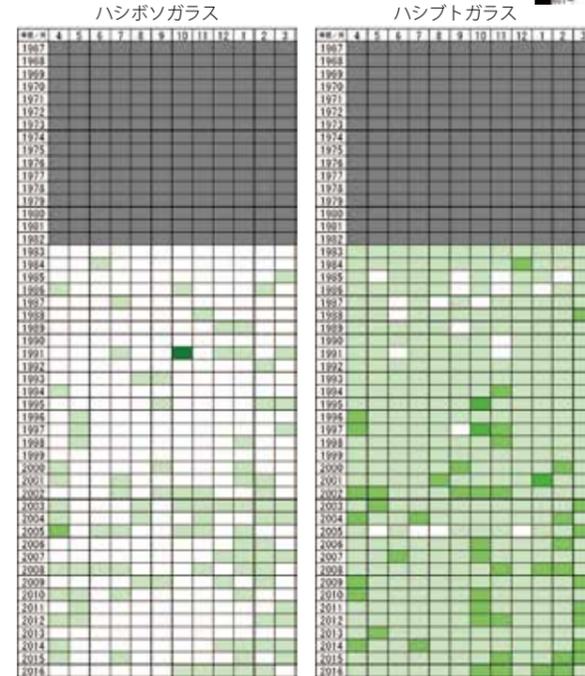
3. 里山：扇子山、東大演習林、岩屋堂

生息数の傾向が3か所でどれも違うのが興味深い。扇子山はハシボソガラスが1991年10月に150羽が確認された以外はほぼ0羽～1羽で多くとも10羽程度に対してハシブトガラスは最大が1997年10月の77羽で、他の月でも10羽前後の数が確認されているなど、ハシブトガラスの方が明らかに多い。

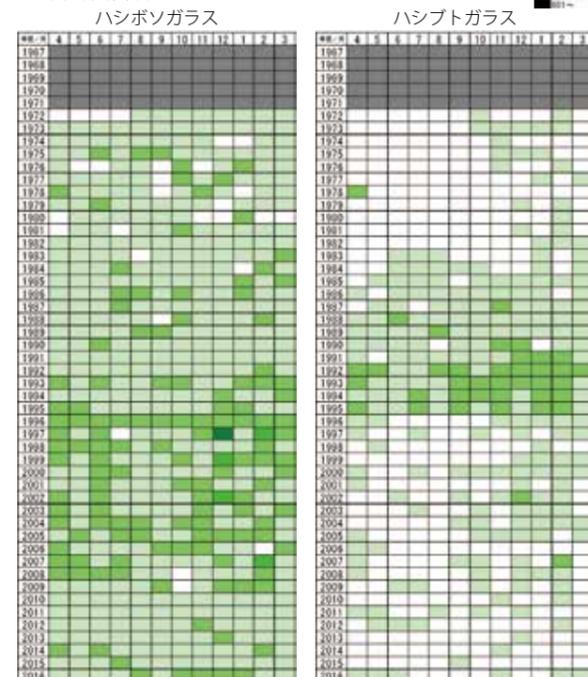
一方、東大演習林は、ハシボソガラスが1997年12月に最大143羽、他の月でも10羽～30羽程度の数が確認されている。ハシブトガラスは1980年～1990年代に10羽～30羽程度いたのが、それ以降は10羽未満で0羽の月が多いなどハシボソガラスの方が明らかに多い。

そして岩屋堂は、ハシボソガラスが2006年9月に最大11羽、ハシブトガラスが1993年10月に最大12羽以外はほぼ1羽か多くとも10羽未満と、どちらも数が少ない。これらの結果は、同じ里山でも樹木などの植生や、耕地の有無などの環境の違いが大きな要因になっているものと思われる。

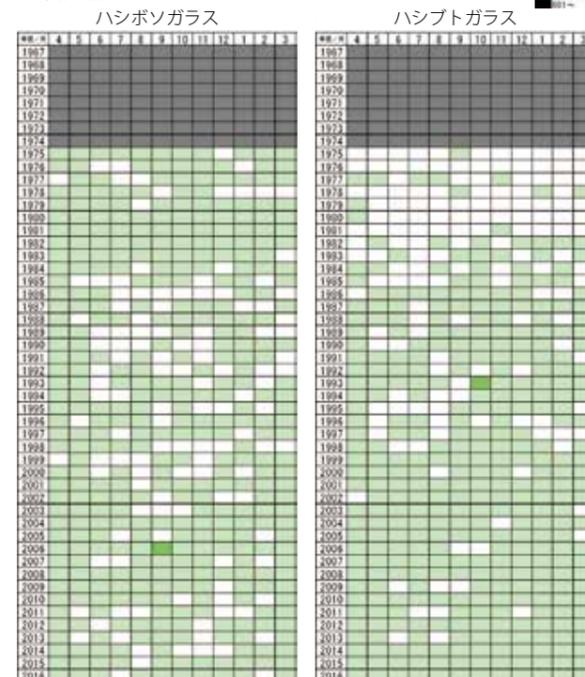
4. 扇子山



5. 東大演習林



6. 岩屋堂



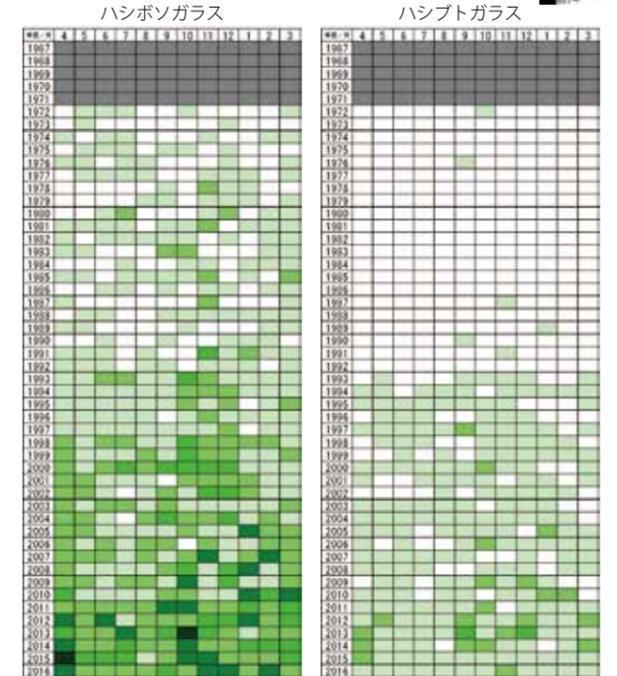
4. 水辺（河口）：矢作川河口、汐川河口、庄内川河口

矢作川河口は、1990年代を境にハシボソガラスが最大25羽から最大267羽に、ハシブトガラスが最大2羽から最大76羽と増加の傾向がある。増加の原因はわからないが、同時期にシロチドリやコアジサシの生息数の減少が始まっているので、その原因の一要因として営巣地の卵や雛を捕食するカラスの増加がかかわっている可能性がある。

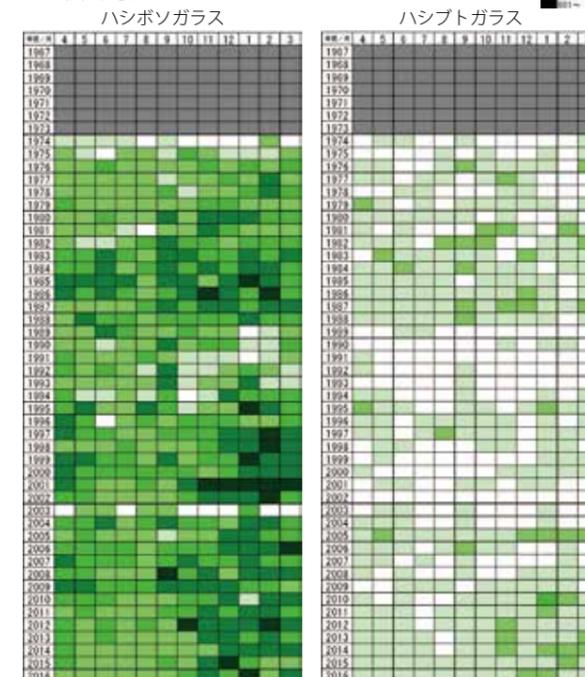
汐川河口は、年毎に波があるもののハシボソガラスが毎年最大200羽～300羽、ハシブトガラスが毎年最大20羽前後であり変化が見られない。これは、1972年より干潟が保全されており、堤防工事などがあるものの干潟としての環境にほとんど変化がないことが原因と思われる。

庄内川河口はハシボソガラスが2004年あたりを境に最大でも20羽程度だったものが50羽～100羽に、ハシブトガラスは10羽以下だったものが20羽前後の月が見られるなどやや増加している。2004年あたりから庄内川河口で増えている鳥として猛禽のミサゴがあり、カラスはミサゴが捕らえた魚を横取りすることから、ミサゴの増加によりエサが得られる機会が増えたことがカラスの増加の原因と考えられる。

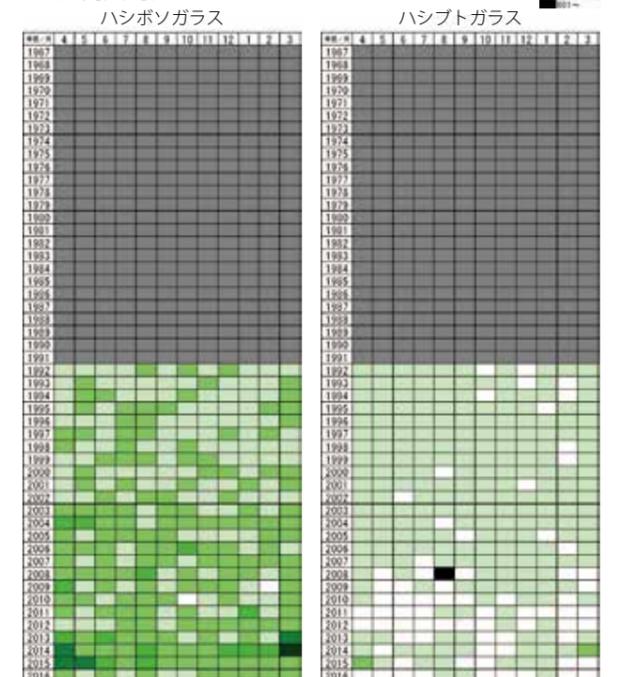
9. 矢作川河口



13. 汐川河口



14. 庄内川河口



5. 水辺（河川）：木曾川葛木、木曾川玉ノ井

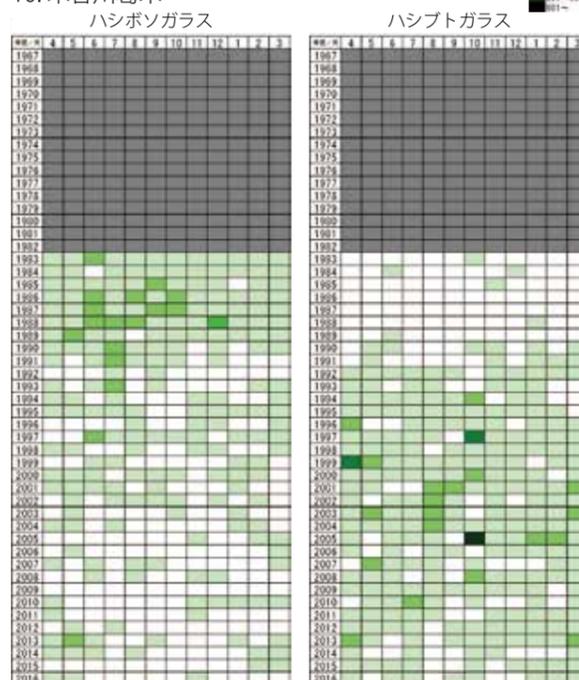
木曾川葛木は、ハシボソガラスが1988年12月に最大の58羽が確認されて以降は減少の傾向にあり、2016年には最大で9羽となった。ハシブトガラスは調査開始時の1980年代は1～2羽程度だったものが、2005年10月には541羽が確認されるまで増加し、そこからまた減少に転じて2016年では最大10羽程度になっている。ただハシボソガラスもハシブトガラスも数が多い月は極めて限られており、それ以外の月はほぼ10羽未満である。これは、エサとなるゴミが得られる公園や駐車場がないため、岩屋堂と同じくカラスの生息には好ましい場所ではないのかもしれない。

上流寄りの木曾川玉ノ井は、ハシボソガラスが1972年に最大11羽で、2016年は最大30羽、ハシブトガラスは1972年に最大2羽、2016年は最大30羽とどちらも増加している。これは、調査地周辺が公園や駐車場として整備され、ゴミが増えたのが原因と思われる。

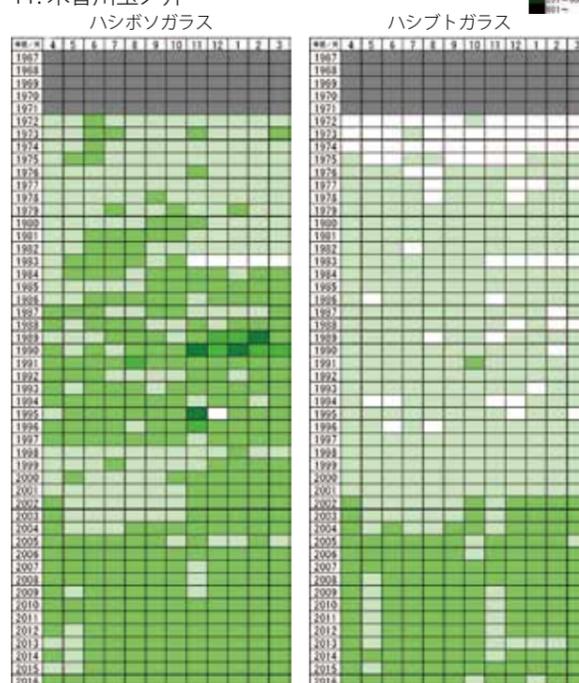


木曾川玉ノ井調査地風景

10. 木曾川葛木



11. 木曾川玉ノ井



6. 水辺（池）：鶴の山、佐布里池

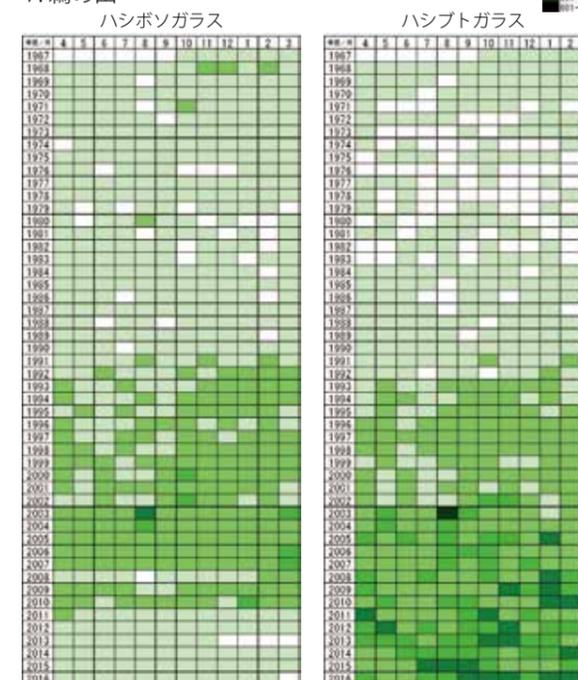
鶴の山は、ハシボソガラスが1967年の調査開始時点で最大6羽であったものが、1991年から2011年の間に20～40羽程度まで増加し、2011年以降はまた減少に転じて2016年は最大で5羽となっている。一方、ハシブトガラスは1967年の調査開始時点で最大8羽であったものがそのまま増加し、2016年の時点でも最大150羽と現在も増加の傾向にある。ハシボソガラスが減少した2011年前後でカワウの生息数も減少しており、鍋田と同様にハシボソガラスの数がカワウの生息数と関連がある可能性がある。ただハシブトガラスは増加の傾向を維持したままなのでハシブトガラスの方はカワウの生息数とあまり関連はないのかもしれない。

佐布里池では、ハシボソガラスは1992年12月、1995年1月に152羽、1998年8月に157羽、2011年3月に365羽が確認された以外は全期間を通じて10羽前後の確認しかなく、あまり多くなく増加しているとも言いがたい。一方ハシブトガラスは1974年の調査開始時に1羽だったものが2016年では最大33羽と、途中で波があるものの全体的に増加の傾向にある。2000年あたりから天敵でもあるオオタカの数が増えているが、カラスの数にはあまり影響を与えていないようである。

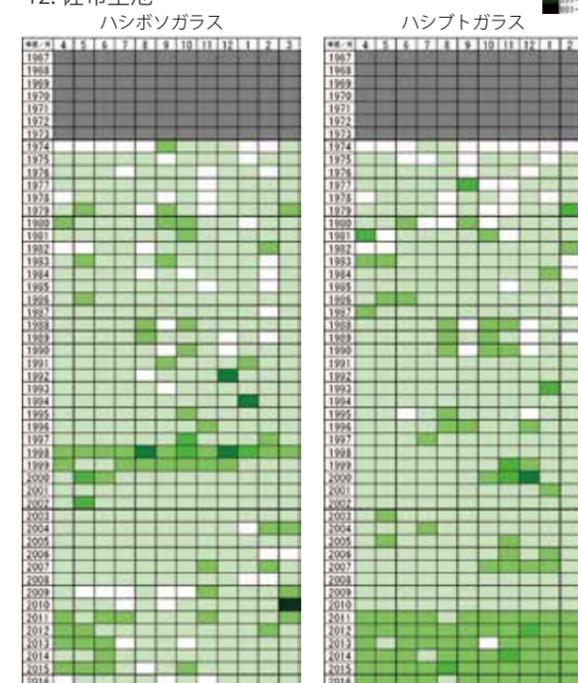


佐布里池調査地風景

7. 鶴の山



12. 佐布里池

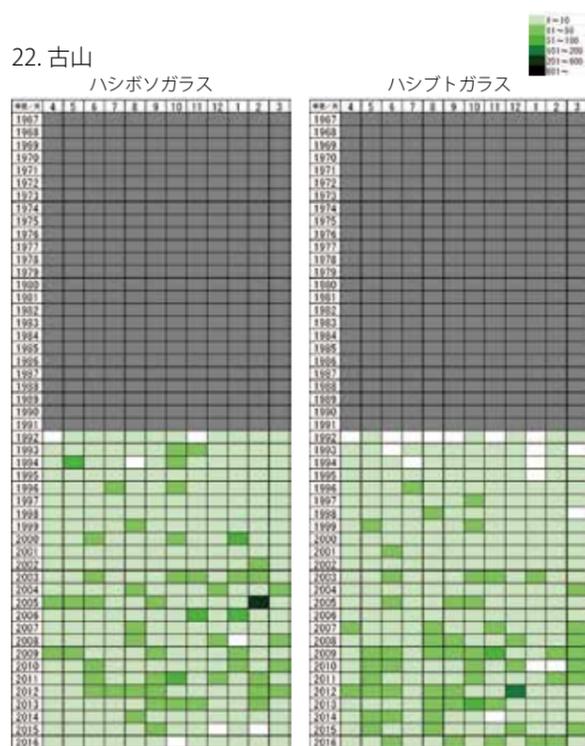


7. 水辺（海岸）：古山

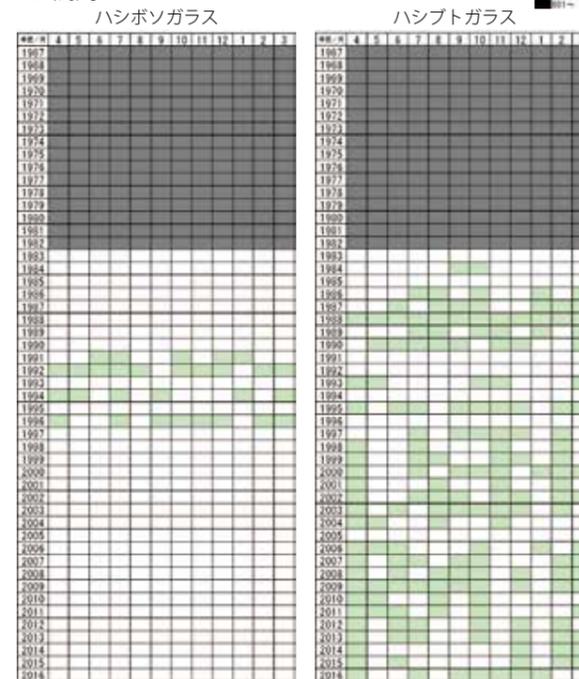
ハシボソガラスは2006年2月に確認された307羽が最大で、まれに50羽くらい、それ以外は10羽前後で年毎の変動はあるものの全体的に減少や増加と受け取れる変動は見られない。一方、ハシブトガラスは、2007年度あたりから20羽以上が確認される月が増えており、やや増加の傾向にあるが原因はよくわからない。



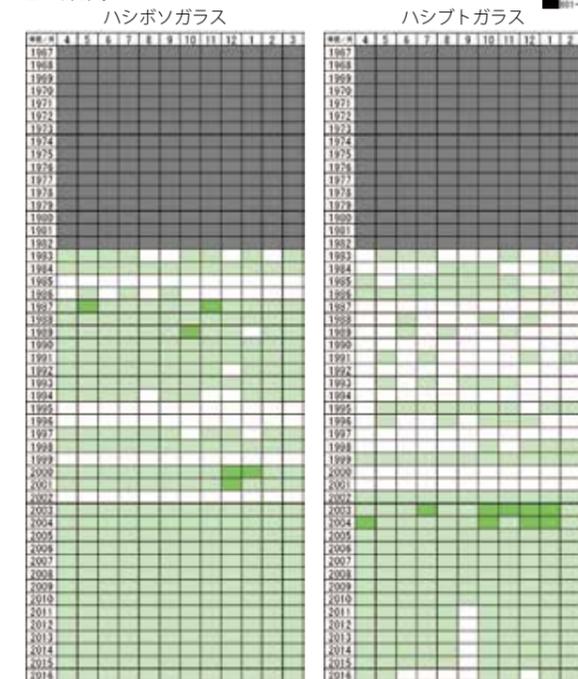
古山調査地風景



16. 閻苺

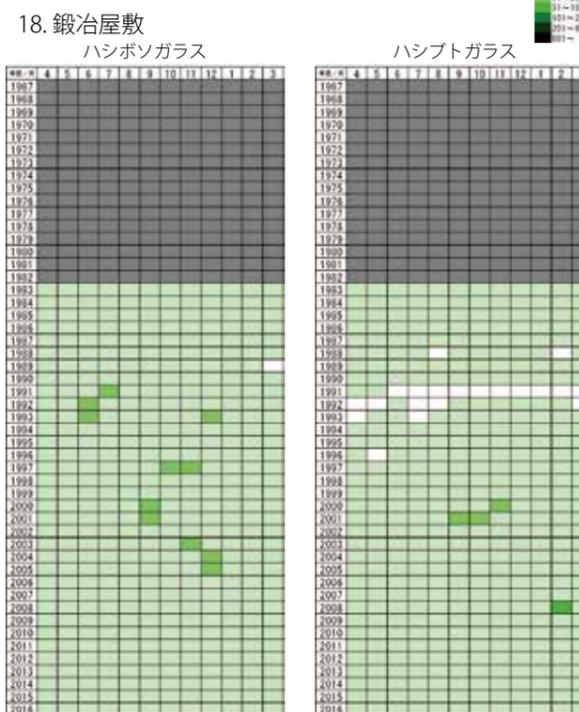
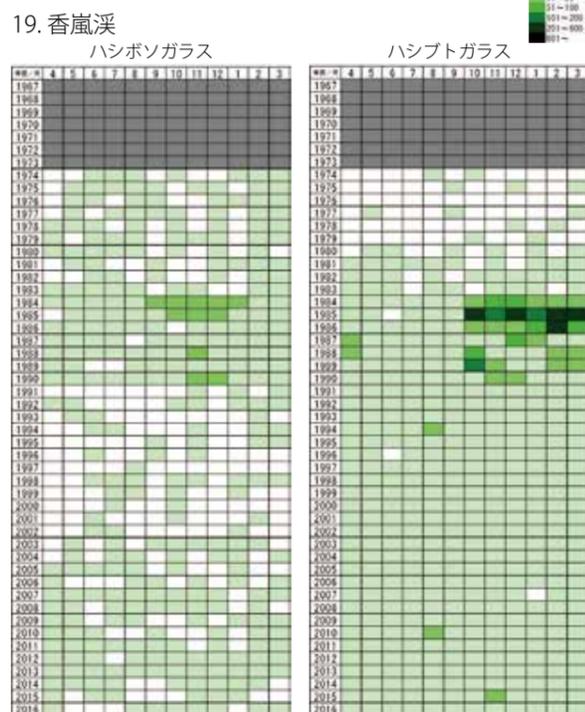


20. 栗代



8. 山林（川沿い）：香嵐溪、閻苺、栗代、鍛冶屋敷

河川の上流部や溪流沿いが調査ルートとなるこれらの調査地では、ハシボソガラス、ハシブトガラスの観察数はほぼ全期間で10羽未満で10羽以上の数が見られる回数は非常に少ない。ハシボソガラスとハシブトガラスの数の比率も、鍛冶屋敷と栗代はほぼ同程度、香嵐溪はハシボソガラスの方がやや少なめで、閻苺ではハシボソガラスは1991～1996年の間に数羽が見られただけで以降は全く確認されていない。そのため、全体としてハシブトガラスの方が数が多いようである。また、香嵐溪では1984年から1990年の秋から冬にかけてハシボソガラスが最大30羽、ハシブトガラスが400羽と急激に数が増加し、それ以外の月は元の10羽未満の状態に戻っている。何が原因でその期間だけ数が増加していたのか興味深いところである。



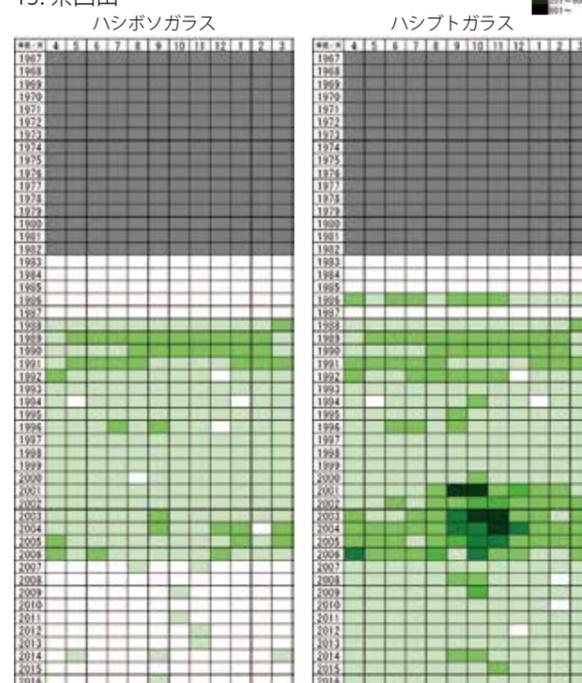
鍛冶屋敷調査地風景



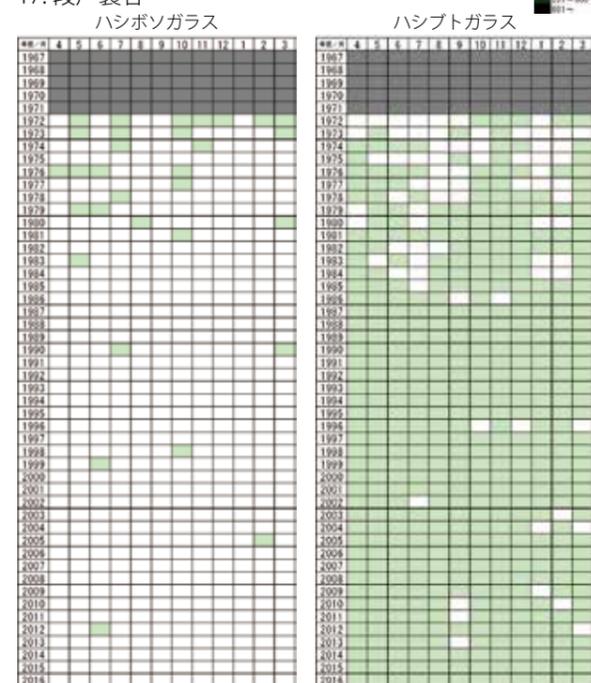
香嵐溪調査地風景

9. 山林(森林)：茶臼山、段戸裏谷、県民の森
山道が調査ルートとなるこれらの調査地においても、8の山林(川治い)調査地と同様にほぼ全期間を通じてハシボソガラス、ハシブトガラスともに10羽未満で10羽以上が見られる回数は非常に少ないという結果となっている。ハシボソガラスとハシブトガラスの数の比率については、確認数0羽の月がハシボソガラスの方が多く、最新の2016年においては2羽確認された程度で、こちらもハシブトガラスの方が多くなっている。また茶臼山において、香嵐溪と同様に2000年から2006年の間に最大250羽に急激に増加してまた元に戻っている時期が見られる。

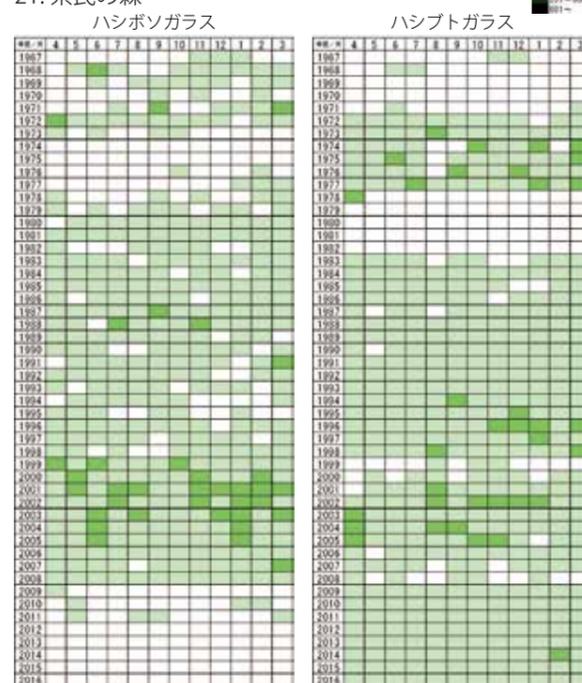
15. 茶臼山



17. 段戸裏谷



21. 県民の森



まとめ

2016年度の最大確認数を基にハシボソガラス、ハシブトガラスの調査地別の生息数を比較すると、ハシボソガラスの方が多い調査地が8ヶ所(平針、大山、鍋田、東大演習林、岩屋堂、矢作川河口、汐川河口、庄内川河口)、ハシブトガラスの方が多い調査地は13ヶ所(平和公園、扇子山、鶴の山、木曾川葛木、佐布里池、古山、茶臼山、闇苺、段戸裏谷、鍛冶屋敷、香嵐溪、栗代、県民の森)、同数が1ヶ所(木曾川玉ノ井)と、ハシブトガラスの方が多く見られる調査地の方がやや多い。開始年にずれがあるのでやや不正確になるが調査開始時点では、ハシボソガラスの方が多い調査地は17ヶ所(平和公園、平針、東大演習林、岩屋堂、鍋田、矢作川河口、木曾川葛木、木曾川玉ノ井、佐布里池、古山、汐川河口、庄内川河口、闇苺、段戸裏谷、鍛冶屋敷、香嵐溪、県民の森)、ハシブトガラスの方が多い調査地は4ヶ所(大山、扇子山、鶴の山、茶臼山)、同数が1ヶ所(栗代)であり、50年間でハシブトガラスとハシボソガラスの分布が逆転している。

一方、各調査地の最大確認羽数を合計すると2016年度ではハシボソガラスが909羽、ハシブトガラスは515羽なのに対し、調査開始時点ではハシボソガラス141羽、ハシブトガラスが122羽であることから、50年間で数においてはハシボソガラスがハシブトガラスに対して2倍近い差をつける結果となっている。日本国内ではハシブトガラスが増加し、ハシボソガラスは漸減していると言われていたが、50年間の調査結果を見る限り愛知県内の分布範囲ではハシブトガラスが優勢になっているものの、生息数ではいまだにハシボソガラスが優勢であるということになる。ただ、都市部の調査地が平和公園と平針の2ヶ所だけなので、主に都市部で数を増やしていると言われていたハシブトガラスの数が十分に把握されていない可能性があり、実際は数においてもハシブトガラスが上回っていることも考えられる。

(秋山 幸之朗)



ハシボソガラス



ハシブトガラス



1 平和公園 (へいわこうえん) — 都市近郊 —



1 調査地について

名古屋市の東部丘陵地帯に位置する「平和公園」は、面積約 147ha の墓地公園で、その南には東山公園があり、動物園・植物園から“天白溪”の森へと続き、市街地の一画にまとまった面積を持つ緑地帯を作り出している。

西端に猫ヶ洞池（面積約 6.5ha）を有する北部地区（面積約 97ha）は、桜の園やメタセコイア広場等の公園緑地に囲まれ、文字通り墓地公園を形成しているが、通称“市民の森”と呼ばれる二次林の広がる南部地区（面積約 50ha）は、希少な湿地性の動植物の存するハンノキ湿地や、溜池、水田、畑地等、多様な環

境が広がっている。

また、東山動物園で飼育されているコアラの餌となるユーカリ林が公園内の数か所に点在している。

北部地区の猫ヶ洞池は、名古屋市内に残る溜池のひとつで、現在は農業用溜池としての使命は終えているものの、市内を流れる山崎川の源流であり、雨水調整池としての役割も果たしている。岸辺の南側は、階段状の釣り場として整備されたものの、北側にはまだ自然護岸が維持されており、少ないながらもヨシ原も残されている。

このヨシ原を残すべく、2008 年より、

「日本野鳥の会愛知県支部」、「なごや東山の森づくりの会」等により、ヨシ刈り、ゴミ拾い等のヨシ原再生活動が年 1 回のペースで行われている。

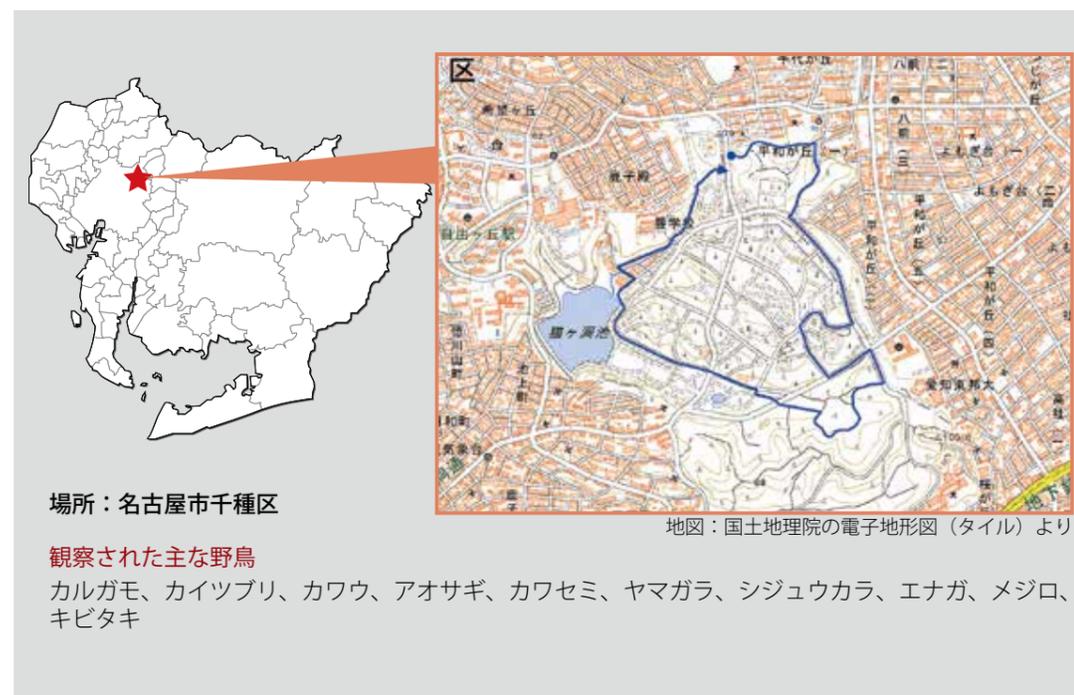
南部地区に広がる樹林は、戦後、薪炭林として利用すべく自然林を伐採して形成された二次林で、アカマツ等の常緑針葉樹、ソヨゴ、ヒサカキ等の常緑広葉樹、コナラ、アベマキ、ヌルデ、ヤマウルシ、ネジキ、ハンノキ、コバノミツバツツジ等の落葉広葉樹が混在し、特に、“市民の森”は落葉広葉樹が多く、里山の雑木林としての景観を、現在なお保っている。

一時期、乾燥化が進んでいたハンノキ湿地は、「なごや東山の森づくりの会」により、周りの湧水を引きこむなどして、溜池として再生され、湿地特有の希少な動植物の生息場所としての役割を保っている。

また、戦後長らく耕作が続けられていた“市民の森”南側に東西に続く谷筋の湿地帯は、耕作地の買い上げ後、一部が芝地とされた以外は、多くが笹やクズ等に覆われたままとなっていたが、現在は、溜池や水路、水田、畑地等が造成され、やはり「なごや東山の森づくりの会」の手により、稲作や畑地の耕作、湿地やヨシ原の整備等が行われている。

起伏のある地形に加え、以上のように多様な環境に恵まれ、東海地方特有の種や希少種も含めた多様な動植物が残り、通算 176 種（及び、外来種・野生化した飼育鳥 8 種 2017 年 3 月現在）、年に 70～80 種ほどの野鳥が確認されている。

現在、平和公園北部地区から東山公園南部地区までの約 410ha が、“なごや東山の森”として、市民と行政が協働で守り育てていく“森”と位置付けられている。



場所：名古屋市千種区

観察された主な野鳥

カルガモ、カイツブリ、カワウ、アオサギ、カワセミ、ヤマガラ、シジュウカラ、エナガ、メジロ、キビタキ

地図：国土地理院の電子地形図（タイル）より



2 平和公園における特徴的な変化

メジロ、シジュウカラ

メジロ、シジュウカラ、両種は、ほぼ同じような推移を辿っている。

1980年代初め頃までは、当地での繁殖例が確認されることはあってもごく稀で、ほぼ冬鳥に分類される年間の観察個体数の推移であったが、その後、個体数が増加するとともに、繁殖する個体数も増加した。1980年代半ばには、完全に留鳥化して、その後も増加が続き、現在は、平和公園を代表する種となっている。

エナガとハシブトガラス

エナガも少し留鳥化する時期が早かったものの前記2種とほぼ同じような経過を辿って生息状況が変化してきたが、メジロ、シジュウカラが、その後、生息数が安定したのに対し、エナガは、1990年代半ば以降、若干数を減らしている。この数の減少に少なからず関係していると思われるのが、ハシブトガラスの存在である。

1980年代初め頃までは、名古屋市千種区周辺には、ほとんどハシブトガラスが生息しておらず、カラスと言えば、ハシボソガラスを指すと思って差し支えないような状態で、平和公園の調査でも1978年11月に2羽記録されるまでは、一度も記録がない。

それが1990年代に入ると次第に数が増加しだし、早くも1992年9月には、初めて12羽と2桁の記録が見られた。

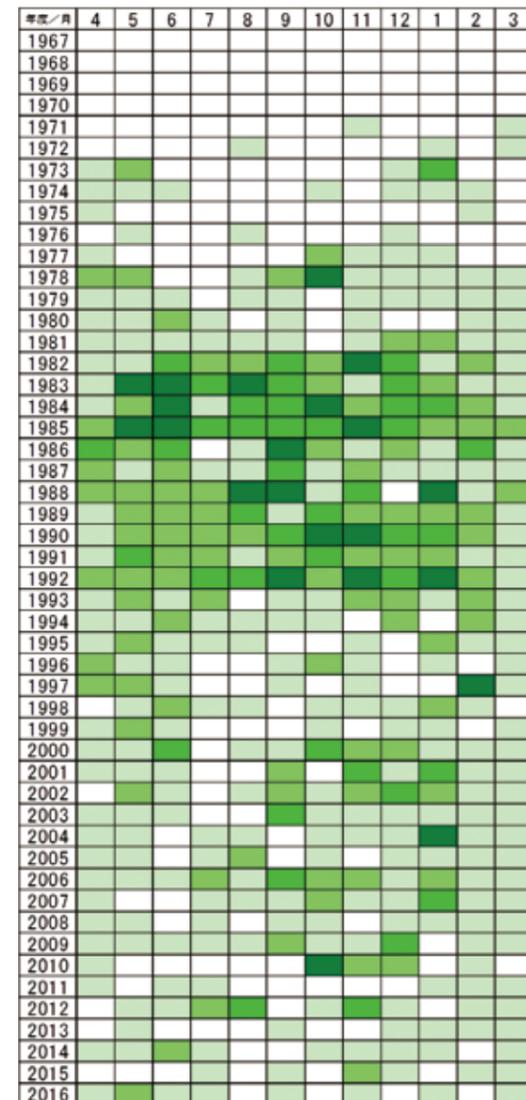
エナガの数が減少したのは、それより1~2年後のことで、この間ハシボソガラスの生息数はほぼ変化が見えないため、カラス全体の生息数が増加したことが、エナガの生息数に影響を与えている

可能性は高いと思われる。

コゲラ

1985年秋、筆者が探鳥中コゲラを見つけた時は、かなり驚いた。当地では初

エナガ



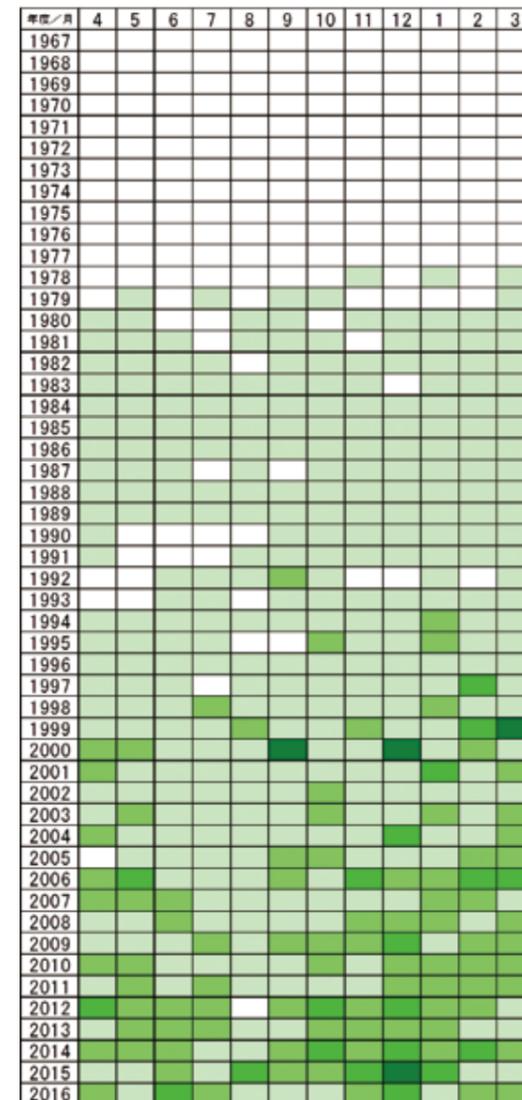
記録であり、お隣の東山動植物園でも過去に2度記録があったのみである。

ところが、早くも1987年からは留鳥化し、間もなく当地での繁殖も確認した。その後、名古屋市内各所でも普通に観察

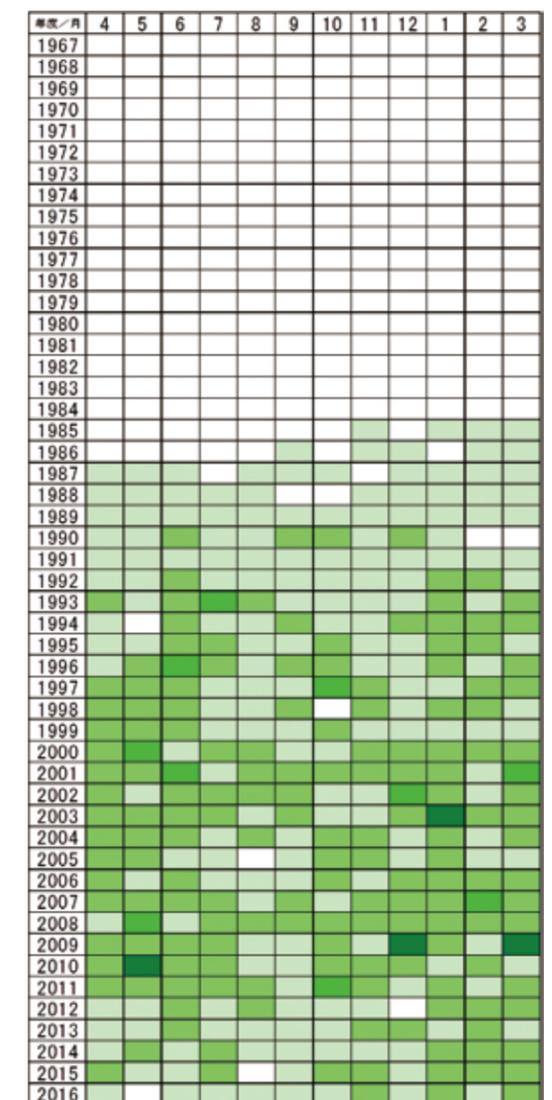
出来るようになり、現在は、市街地のちょっとした公園等でも観察できる都市鳥のひとつに数えられている。

(木野 浩一)

ハシブトガラス



コゲラ





2 平針 (ひらばり)

— 都市近郊 —



1 調査地について

調査地「平針」は、名古屋市天白区に在する荒池緑地を中心に名古屋市の南東部に位置し、日進市の丘陵地に隣接している。名古屋市の農業センター、県の運転免許試験場、平針住宅団地、荒池や大堤池等が点在している。

荒池緑地の植生はコナラやアベマキなど落葉広葉樹林が大部分を占め、竹林が混在する緑地であるが、近年竹林の拡大があり雑木林が少なくなっている。また、小田赤池線の道路開通から11年となり自動車の通行量が増え周辺の宅地開発が急速に進み、緑地の面積は10年前に比

べ30%ほどになっている。

繁殖する鳥の種類は20種を数えているが、農地や雑木林、耕地などのヒバリやホオジロの繁殖地がなくなったことで、姿を消している。

年間を通じ冬期の野鳥は種類・数が増えている。細口池はオオジュリンがねぐらに利用している。オオバンはどこでも増えている。大堤池にはオカヨシガモを間近で観察でき、荒池ではオシドリやミコアイサが増えている。

一方、カラスやムクドリが急増し、地元嫌われている。

小田赤池線の道路開通により自動車の交通量が増えたことで、当地では普通種であったキジやコジュケイ、ホオジロ、ヒバリ等は今ではほぼ姿を見ることができなくなっている。

平針小学校の野鳥部の子供達と毎月1回の観察会で野鳥の種類と数の調査を続けている。冬期には餌台の整備をして春には繁殖のための巣箱を掛けることで、シジュウカラ、ヤマガラ等の繁殖が観察されている。巣箱は毎年5個新設し、2～3個繁殖に利用されている。

調査地のルートは、細口池からスタートして大堤池を廻り、針名神社を通り抜け、農業センターの西側外周から荒池緑地、荒池へ向かって運転免許試験場から細口池へと一回りしている。

細口池は、平針住宅団地の真ん中に位置し、周囲300mのジョギングコースになっており、桜に囲まれた整備の行き届いた小さな池である。

池の中は葦とヒメガマが生い茂り、バンとオオヨシキリが繁殖しており、巣作りから子育てまで間近に見られる。

珍しいところでは、春のコヨシキリ、冬のおオジュリンがねぐら、餌場としており、クイナやヒクイナ等も住み着くことがある。

大堤池は、針名神社の西に位置し周囲200mの小さな池であるがカイツブリやバンが繁殖しており、冬期には各種のカモが見られる。

特にオカヨシガモ、ホシハジロの捕食の仕方などが楽しく観察できる。他にコガモ、マガモ、ヒドリガモ、ハシビロガモ、オオバン、バンが間近に見られる。

針名神社には、比較的大きな木が茂り、杉の大木にはハシブトガラスが繁殖している。一方、神社の周辺にあるコナラにはハシボソガラスが巣作りしている。

そのほか、コゲラやカワラヒワ、メジロ、ヒヨドリ等が繁殖しており、平針小



場所：名古屋市天白区

地図：国土地理院の電子地形図（タイル）より

観察された主な野鳥

オシドリ、オカヨシガモ、ヒドリガモ、マガモ、ハシビロガモ、コガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、ミコアイサ、カイツブリ、ハジロカイツブリ、クイナ、ヒクイナ、バン、オオバン、カワセミ、コゲラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヤマガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、メジロ、オオヨシキリ、コヨシキリ、ムクドリ、シロハラ、ルリビタキ、ジョウビタキ、カワラヒワ、カシラダカ、アオジ、オオジュリン



学校野鳥部の子供達で作る巣箱には、シジュウカラやヤマガラが利用して子育てしている。

農業センター周囲の雑木林は野鳥の休息地となっていて、アオジ、カシラダカ、ジョウビタキ、ルリビタキ、シロハラ等、冬期には各種の野鳥が見られる。古くには養蚕が行われており、現在も桑の木が点在しており、ムクドリの餌場となっている。

荒池には、カワセミ2～3つがい繁殖していて餌取りや餌運びを間近で見られる。近年、オシドリが越冬地として200羽前後集まる他、マガモ、ハシビロガモ、コガモ、キンクロハジロ、ホシハジロ、ミコアイサ、ハジロカイツブリ等の冬鳥観察の宝庫となっている。

2 平針における特徴的な変化

30年前の資料（地図）と比較すると、平成17年の小田赤池線の道路開通から緑地帯が激減し、雑木林や農耕地が住宅地となり、ヒバリ、ホオジロ、キジ等の繁殖地がなくなり、近年、姿を見ることが出来なくなった。

一方、冬期には、各種カモ類は増加傾向にあり、大堤池ではオオバン、オカヨシガモ等が比較的、近距離で見られるようになった。

荒池では、オシドリの群れが見られ、ミコアイサやハシビロガモ等も見られるようになった。

オシドリ

1998年までは全く見られなかったオシドリであるが、1999年から少しずつ見られるようになり、2016年では冬の

全期間で見られるようになっている。

カワセミ

2016年では、2～3つがい繁殖しているカワセミであるが、1年を通じて見

オシドリ



| 年次/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |

られるようになったのは1990年後半あたりからであり、それ以前はあまり見られない鳥だった。

カワセミ



| 年次/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |

メジロ

メジロは2016年ではほぼ1年を通じてみることが出来る鳥となっているが、そうなのは1990年代後半からであり、それ以前は主に秋～冬にかけて見られる鳥だった。（古澤 穎一）

メジロ



| 年次/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |



3 大山 (おおやま)

— 耕地 —



1 調査地について

渥美半島の大山(渥美山塊)にオオルリ、キビタキ、ハチクマやオオタカが生息することに気づいたのは1986年のことである(参考文献1及び2)。

本野鳥生息調査で、調査地を「大山」に変更すると同時にオオルリや里山の猛禽類が観察されたことは、これらの野鳥(主に夏鳥を指す)が以前から生息していたことを物語っている。このことは近くに住む住民からの聞き取りとも一致している。

大山は1970年代まではアカマツ林が優占していたが、80年代以降松枯れ及びその後の植生遷移の進行によりコナ

ラ、クロバイ等の広葉樹が優占してきた。このことは動物食性小鳥類(夏鳥)には好適な環境となってきた一方、ハチクマ、オオタカ、サシバなど里山猛禽類の営巣適地や営巣木を失わせ、その減少の一因ともなっている。実際「渥美半島大山での猛禽類繁殖に関わる調査記録から」(参考文献2)では1986年以降2008年まではサシバ、オオタカ、ハチクマのいずれか、もしくは複数種の繁殖成功の確認・成功の可能性が確認されているが、2009年以降は繁殖を試みた可能性ありに留まっている。

参考文献1には大山(渥美山塊)で

1989年から1999年に観察された種と日にちが鮎川上流、清田池、泉福寺、椈と4カ所に分けてリストアップされている。このうち椈が現大山調査地とほぼ一致している。

そこには、ミサゴ、ハチクマ、オオタカ、ツミ、ノスリ、サシバ、ハヤブサの7種の猛禽類が記録されている。この調査期間中の1992年にオオタカとサシバ、1994年にハチクマの繁殖が初めて確認された。

小鳥類ではカッコウ科でジュウイチ、ツツドリ、ホトトギスが記録されておりホトトギスについては繁殖が確実となっている。

カワセミやアリスイも比較的良く見られたが、最近では出会うことがなくなった。アオゲラ、アカゲラ、コゲラは微妙に増加している印象を持っている。1990年5月にはサンショウクイの記録もある。

ウグイス科のヤブサメの記録があるが近年は確認していなかった。高齢化による調査者の聞き取り能力の劣化ではとの指摘を受け、40代の女性と一緒に調査したところ、彼女はヤブサメを確認することができた。

ヒタキ科ではアカハラ、コルリ、キビタキ、オオルリが、カササギヒタキ科ではサンコウチョウが記録されている。サンコウチョウは顕著な増加傾向が見られ、4カ所以外の大山の麓、平地の神社、畑に隣接する山林にまで進出している。

参考文献

1. 大羽康利(2004) 渥美山塊の野鳥、蟲譜 VOL.43 NO.1 三河生物同好会
2. 大羽康利(2012) 渥美半島大山(渥美山塊)での猛禽類繁殖調査に関わる調査記録から、蟲譜 VOL.50 NO.2 三河生物同好会





2 大山における特徴的な変化

ヤマガラとシジュウカラ

ヤマガラとシジュウカラとは、その出現は2000年頃まではシジュウカラの方が多かった。ヤマガラは1990年頃まで、まれに観察されるに過ぎなかった。それより以前はシジュウカラも含めて、渥美半島には生息していないであろうと思われていた程である。両種共に植物の果実を食するが、アカマツの優占する渥美半島の山々には広葉樹の果実は少なかった。昆虫類も少なくヤマガラやシジュウカラの生息する余地がなかったのであろう。

アカマツと広葉樹の混交林化が進むにつれて餌となる昆虫も増加し、より昆虫を多く食べるヤマガラが増加したものとされる。最近ではシジュウカラを観察するのは繁殖期には少なくなりつつある。

ウグイスとホトトギス

60年ほど前、ウグイスは渥美半島では完全に春の鳥であった。冬にはジャツツジャツと地鳴きをしていたが、学校の卒業式の頃に囀り出す鳥であった。

既に述べたように山林の広葉樹林化が進み、昆虫類が増えるに従って、餌となる昆虫も増え、食物連鎖によってそれを食するウグイスも増えたのである。一頃は6月にウグイスの囀りを聞くと、「今頃鳴くあほなウグイスが。」と揶揄されたりしたが、現在では8月にも囀りを聞くほどまでになり、その生息密度は渥美半島ではほぼ飽和状態に達していると思われる。

ホトトギスもやはり2000年頃までは渡り途中のものを除いて、観察されることは少なかった。トラツグミ、ヨタカ

の鳴き声が聞かれたりした。よく知られているようにホトトギスはウグイスに託卵する。そのウグイスが飽和状態になるほど増えたのであるから、託卵するホトト

ヤマガラ



1~4
5~10

| 年度/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |

ギスが目をつけられない。加えて5~6月の渥美の山林は毛虫で一杯になる。ハイカーは「5月の渥美の山は、毛虫が一杯で入れん。」と語るほどである。

託卵相手のウグイスと幼鳥を育てる餌(毛虫類)に恵まれればホトトギスも増加する。最近では里の神社や畑の周辺でもその鳴き声を聞くようになっている。

(大羽 康利)

ウグイス



1~10
11~20
21~30

| 年度/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |

ホトトギス



1~4
5~10

| 年度/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |



4 扇子山 (せんすやま) — 里山 —



1 調査地について

調査地「扇子山」は、岡崎市の市街地から南南東へ約 11km、蒲郡市に隣接する岡崎東部鳥獣保護区内にある。岡崎市桑谷町地内にある桑谷キャンプ場の駐車場を起点とし、坂口池を経て山頂まで設けられている自然歩道往復約 9km を調査区域としている。

標高はおよそ 130～430m で、キャンプ場付近は農耕地・ため池・沢などバラエティに富んだ里山環境であるが、林相はスギ・ヒノキの植林がほとんどで単調である。それに対し、山頂部周辺は広葉樹を主体とした雑木林が広がっている区域もあり、自然観察で散策するにはもって

こいのエリアである。

9～10月にかけては、サシバ・ハチクマを中心としたタカ類の渡りルートになっているので、訪れるバードウォッチャーも多く、「西三河のホークマウンテン」とも呼ばれている。当地での調査は、1983年から 35 年間続けられてきた。初年度から清水敏弘が継続して実施しており、現在（2017 年 11 月）までのところ 14 目 36 科 104 種を記録している。

調査を開始して 5 年目あたりから、旧桑谷山荘から西へ延びる林道（車両通行用）が造成され、竜ヶ谷池につながったた

め、調査区域の自然環境が一変した。山が削られ樹木が伐採されて、自然歩道の一部が跡形もなく消滅した区間もある。したがって、やむなく調査ルートを変更せざるを得ない状況にも追い込まれた。

こうした経緯もあり、調査が 10 年経過したのを契機に 1993 年からは下山コースを変更した。具体的には、坂口池に流れ込む沢の西側尾根を越えた谷筋を帰路ルートとし現在に至っている。また、2005 年頃には坂口池源流部の東側尾根に、高圧線鉄塔が建設され、電力の供給が始まった。この工事でも鉄塔建設現場周辺の山林は広い面積にわたって伐採され、工事用車両が通る林道も造成されるなどしている。電力供給という市民生活の基盤となることとはいえ、扇子山山系に残ったその傷跡は消えることはない。当時、この現場近くの沢では 6 月にホタルの発生が確認されていた。

2 扇子山における特徴的な変化

本調査地は、里山の自然環境が残るエリアであるが、35 年の年月が経過して最も大きく変化しているのは、森全体の樹木の生長と山系全体の植生遷移である。調査開始当時、植林して間もない高さ 1m 弱のスギ・ヒノキ林は、今では直径 25cm を超え、調査ルートの中腹から見えた坂口池はまったく視界から消えてしまっている。当然、広葉樹の雑木林も樹高が伸び、森林としての重厚感が増大してきており、それに伴って鳥相も変化している。

ウグイスとホトトギス

繁殖期 4～8 月の 5 か月間について、ウグイスとホトトギスの「期間総個体数」を比較したグラフが図 1 である。これを見ると、1983 年から 35 年間でウグイスは平均約 20 羽から 100 羽と約 5 倍に増加している。また、ホトトギスも平均 2

場所：岡崎市

地図：国土地理院の電子地形図（タイル）より

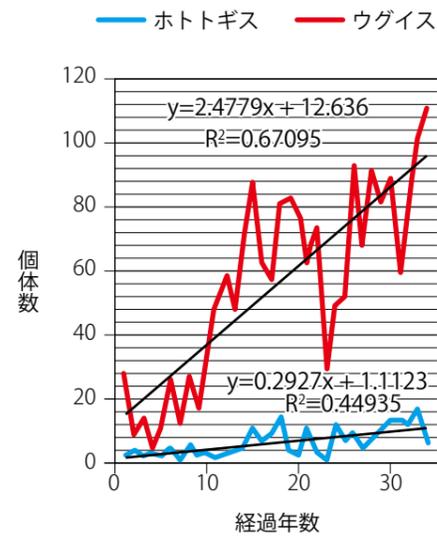
観察された主な野鳥

春夏：ホトトギス、サンショウクイ、サンコウチョウ、ヤブサメ、センダイムシクイ、クロツグミ、キビタキ、オオルリ 秋冬：ミソサザイ、シロハラ、ルリビタキ、ジョウビタキ、マヒワ、ウソ、アオジ、クロジ 通年：コゲラ、アオゲラ、ハシブトガラス、ヤマガラ、シジウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、メジロ、ホオジロ 春秋の渡り：ハチクマ、ツミ、サシバ、ノスリ



羽から 12 羽と 6 倍に増えている。両種は「托卵・被托卵」の関係にあり、托卵される側のウグイスの増加に伴い、托卵鳥のホトトギスの生息数が増えている。

図1 ウグイスとホトトギスの関係



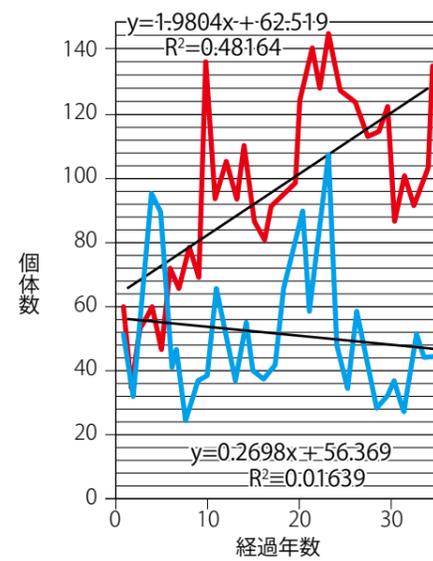
これは扇子山山系が低木林から混交林に遷移し、ウグイスにとって好適な生息環境になってきたことが最も大きな原因と考えられる。両種の生息数増加は森林全体の生長と密接な関係があるといえる。

ヤマガラとシジュウカラ

両種についても、図2にみられるように、顕著な生息数の変化が認められる。ヤマガラはシイ・カシ類を主とする暖帯林を好み、扇子山山系では優占種の一つである。調査開始後 35 年間で両種の「年間総個体数」を比較すると、ヤマガラは平均約 60 羽から 130 羽に増えているのに対し、シジュウカラは平均約 60 羽から 50 羽に減少している。これは山系の暖帯林群落がより深くなってきたことで、ヤマガラの生息には適した環境になったが、明るい温帯

林を好むシジュウカラにとっては、棲みにくい環境になっていることが推測される。

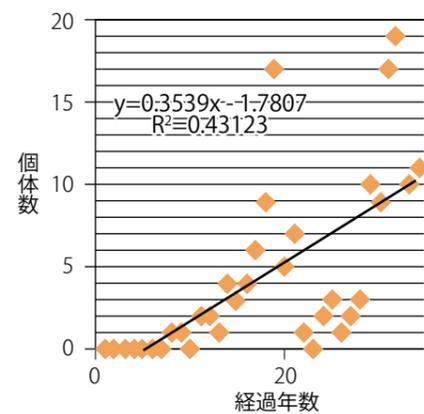
図2 シジュウカラとヤマガラの関係



クロツグミ

クロツグミは、落葉広葉樹林からスギ、ヒノキなどの針葉樹林まで幅広く分布する夏鳥である。扇子山ではこうした林相が年々充実し、本種の生息数増加の大きな要因になっている。

図3 クロツグミの個体数変化



これらの結果から考察すると、県の鳥類生息調査において生息数のカウントはもちろんであるが、今後は数年おきに調査地の植生環境も併せて調べていくことが望まれる。例えば、里山・山地であれば、

国の「モニタリング1000」で実施しているような「植生概況調査」を導入することで、林相の定性的・定量的把握ができ、鳥相の変化をより科学的に分析できるのではないだろうか。

(清水 敏弘)

ウグイス



| |
|-------|
| 1~10 |
| 11~20 |
| 21~30 |
| 31~50 |

ホトトギス



| |
|------|
| 1~4 |
| 5~10 |

| 年度/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |

| 年度/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |



5 東大演習林 (とうだいえんしゅうりん) - 里山 -



1 調査地について

調査地「東大演習林」は、名古屋市の北約 35km、入鹿池の北西約 2kmの尾張丘陵地帯にあり、犬山公園小牧線の西町橋を起点として、新郷瀬川を合戦橋まで行き、東へ集落を横切り県道にでる。大黒下池、大黒上池を通り犬山カントリー倶楽部を過ぎ、明治池、大畔池を通り、犬山病院前より犬山里山学センターの前を通り今井小学校までの約 7kmが調査ルートである。

調査は 1972 年から現在まで奥長幸治、各務久子、今岡利保の 3 名が引き継いで実施してきた。

調査区内は典型的な「里山」である。山、ため池、河川、水田、畑、果樹園、竹林、雑

木林と人が手を入れてきた土地利用の多様な風景がそのまま多様な動植物が生息・生育する自然環境を形成してきた。

近年の調査ルートの自然環境の変化は、幸いなことに都市化に伴う住宅地の造成、工場の進出等の人工的な開発事業はあまり見受けられないが、洪水・台風等の自然災害による環境の変化や太陽光発電施設の建設が調査地域内の山・耕作放棄地等で行われており良好な生息環境を減少させているのではないかと危惧される。また、都市部から近い里山という環境からか樹林帯にはゴミの不法投棄が見受けられる。

調査ルート上で観察された野鳥は 90 種

程確認されている。

ルート上の野鳥の生息環境を大きく 3 つのエリアに分けてみる事が出来る。

1 つ目は新郷瀬川を中心とした水田地区で、川沿いではアオサギ、コサギ、ゴイサギ等のサギ類、クイナ、バン等のクイナ類、カルガモ、マガモ、オシドリ等のカモ類、クサシギ等のシギ類が観察される。ただ、ここ最近、数年に渡る新郷瀬川の護岸拡張工事のため調査ルート上でのサギ類、カモ類、シギ類、カイツブリ、カワセミ、オオヨシキリ等が減少もしくは全く見受けられなくなった。また水田地帯にはスズメ、カワラヒワ、ムクドリ、ハシボソガラス、ケリ、ヒバリ、セッカ、カシラダカ、サギ類等が観察される。

2 つ目は合戦橋から味鹿までの集落と樹林帯先の今井集落である。ここにはスズメ、ヒヨドリ、ムクドリ、キジバト、キジ、モズ、カワラヒワ、セキレイ類、サギ類、カラ類等の身近な鳥と季節によりツバメ、

アオジ、ツグミ、シロハラ、ジョウビタキ等が観察される。

最後の 1 つは地理的にルート中央に位置する東京大学の愛知演習林の樹林帯と犬山市に特徴的な数箇所のため池で構成されているエリアである。東大演習林はルート上、最も重要な位置を占めており調査開始以来この変わらぬ自然環境が野鳥の観察種類・個体数の基礎となっている。このエリアで観察される鳥はおよそ 70 種あまりで、ノスリ、サシバ、オオタカ、トビ等の猛禽類から、アカゲラ、アオゲラ、コゲラ等のキツツキ類、メジロ、ウグイス、シジュウカラ、ヤマガラ等のカラ類、オオルリ、キビタキ等のヒタキ類、ツグミ、シロハラ等のツグミ類、コジュケイ、センダイムシクイ、ホオジロ、カシラダカ、カケス、ハシブトガラス等の主だった山の鳥を観察することが出来る。

ルート上に点在するため池でよく観察されるのがカワウ、アオサギ、カイツブリ、バン、カルガモ等で冬に飛来するカモ類はコ



場所：犬山市

観察された主な野鳥

キジ、カイツブリ、コサギ、ケリ、クサシギ、トビ、サシバ、コゲラ、モズ、ハシブトガラス、シジュウカラ、ヒバリ、ツバメ、ウグイス、メジロ、ツグミ、ジョウビタキ、カワラヒワ、ホオジロ、カシラダカ、アオジ

地図：国土地理院の電子地形図 (タイル) より



ガモ、マガモ、キンクロハジロ、ホシハジロ、オナガガモ、ハシビロガモ等で種類・個体数はため池の大小に関係なくとも少ない。

以上が犬山東大演習林のここ数年の概要である。

調査期間の野鳥の種・個体数の増減を見てみると、全く観察されなくなった種や著しく減少してしまった種が存在し、全体的には観察種数の緩慢な減少傾向が見受けられる。近年、観察される種・個体数は年によって多少の増減はあるが、野鳥の受け皿となる里山の自然環境が比較的安定して保たれているため、大体安定していると思われる。例えば毎年必ず定期的に現れる水田などがその最たるもので、この人工湿地は渡り鳥にとっては休憩地・餌場として欠かせない場所であるし、それは留鳥にとっても同様である。

里山は、奥山ではすみづらい種たちにとっては格好のすみかであり、里山を生息適地とすることが出来る種のみが勢力を拡大していけるのではないかと思う。

調査を通してこの里山における野鳥の種数や生息数などについて、今後の推移を見守っていききたい。

2 東大演習林における特徴的な変化

コジュケイ

調査期間を通して姿を見る機会はほとんどなく目視出来たのは1~2回であるが、鳴き声によって生息の確認は比較的容易である。近年この調査地において、数は減少傾向にあるものの生息は確認される。

オオヨシキリ

葦原で繁殖するため葦原が必須である。繁殖期において生息の確認は鳴き声によって比較的容易である。近年、調査ルート上の新郷瀬川の護岸拡張工事により葦原が消滅し、観察事例が激減した。工事

コジュケイ



| 年度/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |

終了後葦原が完全復活するまでは観察は期待できない。

コゲラ

日本で観察できるキツツキ類の中で最も小さい。鳴き声によって生息の確認は比較的容易である。本来は山の鳥という

オオヨシキリ



| 年度/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |

印象であったが、近年、他種の観察事例が減少傾向にある中、この調査地に限らず、平地・市街地等に進出し、分布を拡大している数少ない種である。この調査地においても数は安定して生息が確認される。(今岡 利保)

コゲラ



| 年度/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |



6 岩屋堂 (いわやどう)

— 里山 —



1 調査地について

調査地「岩屋堂」は、瀬戸市の東部に位置し、愛知高原国定公園の一部であり、標高約 400m の岩巢山を中心に低山が連なり、そこを流れる鳥原川沿いに開け、いわゆる里山を形成している。開けたところでは、アカマツ、コナラ、ハンノキ、ヤシャブシ等の林が、その他のところではシイ、カシの林となっている。

春には桜、秋にはモミジと観光の名所としても知られ、名古屋からも近く、多くの観光客が訪れる。この岩屋堂には多くの野鳥が生息し、都市近郊ながら都市では見られない野鳥も多い。また、昆虫も多く、自然観察には絶好の場所である。

最近では、クマやカモシカの見撃情報もある。

近年、愛知県で自然をテーマとした万博が開催されるなど、里山と呼ばれる都市近郊の低山の重要性が再認識され、環境問題とともに雑誌、テレビ、新聞でも報道されるようになってきた。里山は、昔から炭焼きなどを行い、ヒトが手を加えてできた二次林、いわゆる雑木林であり、そこには昆虫や鳥類をはじめ多くの動植物の命が育まれてきた。また、人と自然との接点でもあり、人が自然を学ぶ、観察する、触れ合う場としても注目されるようになってきた。

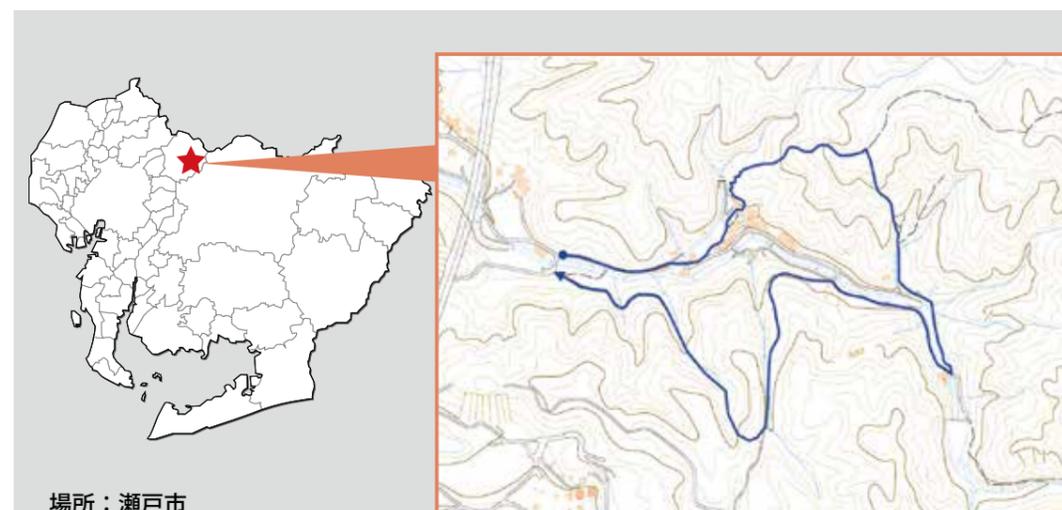
春には、ショウジョウバカマが咲き、桜の開花とともに岩屋堂の顔でもあるオオルリが南から渡ってくる。それからサンショウクイ、センダイムシクイ、ヤブサメ、キビタキといった夏鳥が渡ってくる。さらにシジュウカラ、ヤマガラなどのカラ類、ウグイス、ヒヨドリなどが囀り合いにぎやかになる。4月はそれら夏鳥の縄張り争いが見られ、間近に見られることもある。縄張りが決まり繁殖が始まると、姿があまり見られなくなり、囀りだけとなる。その頃になるとホトトギス、ツツドリの声が聞こえ、上空を見上げるとタカ類が飛ぶこともある。

繁殖が一段落する夏になると鳥の声も聞こえなくなり、観察数もぐっと減少する。

秋になり、渡りの時期になるとヒタキ類、タカ類が見られるようになる。しかし、近年エゾビタキなどのヒタキ類、タ

カ類がめっきり見られなくなった。秋も後半になるとジョウビタキ、ルリビタキ、ツグミ、シロハラなどの冬鳥が姿を見せ始める。ジョウビタキ、ルリビタキはあまり変動がないが、大型のツグミ類が姿を見せなくなってきた。ツグミが群れで飛んでいく光景は過去のものとなってしまった。最近ではライトアップをするなど紅葉見物に力を入れ、観光客が多く来るようになり、あまり姿を見せなくなってきていることも考えられる。

冬にはルリビタキの姿を観察できることが多く、岩屋堂の冬の顔になっている。アオジ、カシラダカもよく見られる。しかし、アオジも近年観察数が減ってきている。留鳥であるカラ類は群れで行動するようになり、春とは違ったにぎわいを見せている。そのなかでも、メジロはよく観察できるようになり観察数が増えている。



場所：瀬戸市

地図：国土地理院の電子地形図（タイル）より

観察された主な野鳥

ホトトギス、トビ、コゲラ、アオゲラ、サンショウクイ、サンコウチョウ、カケス、ヤマガラ、シジュウカラ、ツバメ、ヒヨドリ、ヤブサメ、エナガ、センダイムシクイ、メジロ、ミソサザイ、カワガラス、シロハラ、ルリビタキ、ジョウビタキ、キビタキ、オオルリ、キセキレイ、セグロセキレイ、イカル、カシラダカ、アオジ



2 岩屋堂における特徴的な変化

メジロとオオルリとカワガラス

岩屋堂の留鳥の代表の一つであるメジロは、ヤマガラ、シジュウカラ、エナガとともに混群をつくる。岩屋堂ではエナガと同じくらい群れを構成する個体数の多い種である。冬の終わりから春は、繁殖時期であり、つがいで行動するときが多く、群れているときは少ない。夏から春先にかけては群れを作り、単独の群れの場合もあれば、エナガなどと群れを作る場合もある。年によって観察個体数の多い少ないの変動はあるが、30～40年前に比べると個体数が増えてきている。植生が広葉樹の森で適度に針葉樹が混ざり、エサも豊富で繁殖には最適な場所といえるだろう。

次に夏鳥の一つであり、岩屋堂の顔でもあるオオルリは、4月上旬には岩屋堂に飛来し、川沿いに縄張りを作って繁殖をする。渡ってきてしばらくは、なわばり争いが見られ、よくオオルリを近くに見ることが出来る。なわばり争いが済み、繁殖にはいと樹上で囀る姿しか見られなくなる。岩屋堂では川沿いに毎年約7つがいが繁殖をしている。そのためか個体数の変化もほとんどなく、きれいな姿と声でバードウォッチャーを楽しませてくれている。毎年変わらないのは、川沿いの環境の変化が少なく、巣作りのためのコケが豊富で巣作りの場所も変わらず存在し、適度にヒトが入りへびなどの天敵からも巣を守りやすいことがあげられるだろう。

次にカワガラスであるが、オオルリ同様岩屋堂の顔として探鳥会の案内などには必ず名前が出ていたが、近年めっきり姿を見せなくなった。2000年頃までは毎

月1～2個体が姿を現していた。年によっては、繁殖しているところが見られたり、幼鳥が見られたりしていたが、2000年以降、1年に一度も見られなかった年が7年ある。砂防ダムが出来たり、高速道

メジロ



| 年次/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |

路が近くを通るようになったりと環境の変化はあるが、カワガラスが生息する川の環境は見た目はあまり変化がないと思われるものの、エサとなる水生昆虫の減少など考えられるが原因はよくわからな

い。全般的に岩屋堂の野鳥は減少しているが、その最たるものがカワガラスである。メジロなどの留鳥は変わらないが、今までいつも見られた冬鳥、旅鳥が見られなくなってきている。

(花井 啓)

オオルリ



| 年次/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |

カワガラス



| 年次/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |



7 鶺鴒の山 (うのやま)

— 水辺 —



1 調査地について

調査地「鶺鴒の山」は、知多半島南部の美浜町にある。名鉄上野間駅から南東へ約2km行ったやや小高い丘にある。昭和9年にカワウの集団繁殖地として国の天然記念物になったため開発をまぬがれ、そのままの姿で現在にいたっている。平成21年に農村自然環境整備事業で鶺鴒の池のまわりの観察路とトイレ付観察台が新しく作り直され、カワウや冬の多くの水鳥の観察には便利になった。

1970年代のはじめには日本各地にいたカワウがことごとくいなくなり、東京・上野の不忍池（しのばずのいけ）と鶺鴒

山の2か所になった。この鶺鴒の山にいたカワウは絶滅寸前になったが、地元の人々が鶺鴒の糞を肥料としてきた経緯があり、奇跡的に数を増やしていった。

秋になると遠くに行っていたカワウが鶺鴒の山に帰ってきて、にぎやかになる。朝、木々に止まっていたカワウが一斉に飛び立ち、みるみるうちに真っ黒な大きな集団になり名古屋港方面へえさを求めて飛び去る様子は圧巻である。夕方になると鶺鴒の山を目指して大きな「へ」の字をしたカギの集団（多いときは100羽以上）が次々に帰ってくるのもすばらしい

光景である。11月ごろになると冬鳥のマガモ、キンクロハジロ、ハシビロガモ等が飛来する。カンムリカイツブリ、ミコアイサが来ることもありにぎやかになる。

2 鶺鴒の山における特徴的な変化 カワウ

カワウは以前よりもやや減ってはいるものの、2016年現在においても2000羽以上が観察されている。しかし、50年前の調査開始から10年ほどは、500～900羽程度と1000羽に満たない数であった。

しかしながら、この時期は日本全体でもカワウが3000羽程度しかいなかった時期であり1000羽に満たない数とはい

え、日本全体のカワウの2～3割が鶺鴒の山に生息していたことになる。そして1980年代から急激に増加をはじめ、1995年の7000羽を超えたところをピークとしてそこから緩やかに減少をはじめ2016年現在では2000～3000羽となっている。鶺鴒の山では減少しているものの愛知県内や日本全体ではカワウは増加傾向にあり、鶺鴒の山のカワウの生息数が減る一方で、別の場所で新しい営巣地ができたり、他の営巣地の生息数が増加していることがうかがえる。

鶺鴒の山におけるカワウの減少の原因は元々1000羽程度の数だったものが1980年からの急な増加により5000羽を超えている期間は20年にもなっており、長期間の大量営巣により環境が悪化し、群れの一部が新しい営巣地を求めて移動し



場所：知多郡美浜町

観察された主な野鳥

マガモ、ハシビロガモ、コガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、カワウ、ゴイサギ、アマサギ、アオサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、ツバメ、ウグイス、セッカ、シロハラ、ツグミ、ホオジロ、コジュケイ

地図：国土地理院の電子地形図（タイル）より



た結果なのかもしれない。

カワウが増えると集団繁殖地としては困った問題がおきる。それはカワウの糞によりカワウの止まり木や営巣用の木が枯れてなくなってしまうことである。2016年からカワウは鶺鴒の山で繁殖しにくくなったのか、近くの管田池（鶺鴒の池から約1km）や中山池（鶺鴒の池から約2km）に移っているようだ。長い間この移動を繰り返し必ず鶺鴒の山に帰ってくる。

アオサギ

アオサギは、カワウが群れで魚を追い立てている所に待ち構えて集まった魚を採ったり、カワウが飛行中に吐き出した魚を拾うなど、カワウを採食に利用しているところがある。

そのため、カワウの営巣地の近くにアオサギがコロニーをつくることも多く、鶺鴒の山におけるアオサギも1980年のカワウ増加が開始されたあたりから観察されるようになり、そこから増加を続け2016年現在では最大40羽程度観察できるまで増えている。

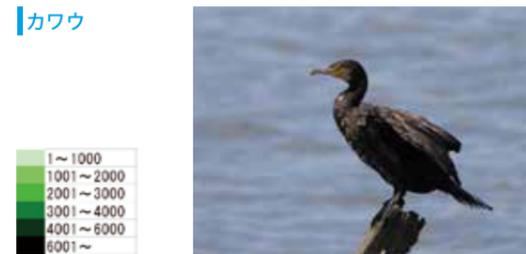
カワウは2000年あたりから緩やかに数を減らしているが、アオサギは夏から秋にかけては別の場所に移動したのか観察数が少なくなるだけで、鶺鴒の山における生息数自体は減ってはいないようである。

ヒヨドリ

ヒヨドリは50年間を通して、一時的に100羽以上観察される月がある以外はだいたい10～30羽程度の数が観察されている。50年間の間に数に増減のある

カワウや増加を続けるアオサギとは対照的にヒヨドリはほとんど数に変化が見られない。

カワウ



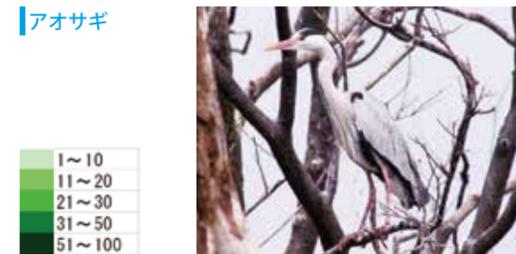
| 年度/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |

カワウの増加による糞害などで他の野鳥の生息環境が悪化しているのではないかとと思われるのだが、ヒヨドリについて

言えばそうした環境悪化の影響を受けているとは思われない。

(岩井昇)

アオサギ



| 年度/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |

ヒヨドリ



| 年度/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |



8 鍋田 (なべた)

— 水辺・耕地 —



1 調査地について

調査開始の1970年当時、鍋田調査地はシギやチドリなどの水鳥が生息する、国内でも代表的な水辺環境であった。近年は開発と乾燥化が進み、生息する水鳥は激減した。調査地の環境区分も、現在は水辺でなく乾燥した耕地の環境に変遷している。

主に、伊勢湾岸自動車道などの開発により、草地のかなりの面積を失い、湾岸道路工事で牛小屋・羊小屋や養豚のし尿処理・牛糞処理場も消滅し、渡り鳥が餌を探す場所も減りつつある。定期的に見られていたツバメチドリの群れも2～3

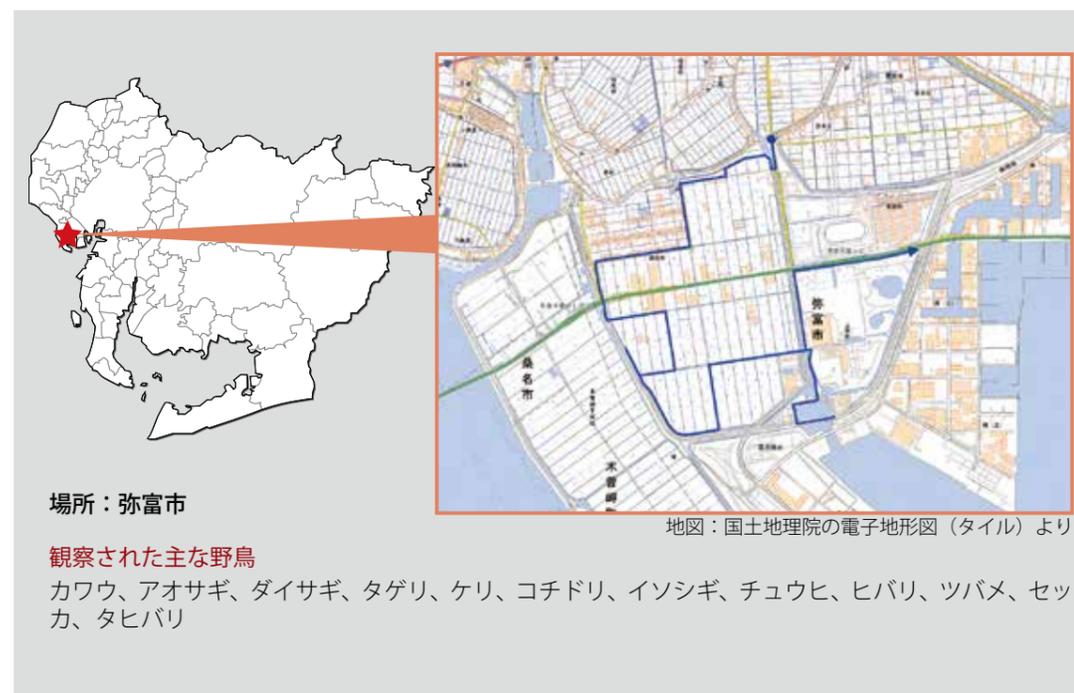
年に一羽出るかどうかである。冬場の午後3時ぐらいになると今のゴルフ場が葦原だった方向からかなりの確率でハイイロチュウヒやコミミズクが現れて、並んで待っているカメラマンの車列がこれらを追いかけ回す姿を思い出す。

隣接する弥富野鳥園と木曾岬干拓地は鳥たちにとってかなり大切なねぐらや繁殖場所として利用されており、特に木曾岬干拓地は400haの面積があり広大な葦原を有し、チュウヒの繁殖地として知られていた。

伊勢湾岸自動車道が1985年に一部開通し、2005年に全面開通したことにより、干拓地が南北に分断され、さらに路線に沿うように倉庫が連なる建築工事が続き、鳥の移動に影響が出ていると思われる。高速道路を通すために牛小屋や羊がのんびりしていた広場もなくなった。養豚場からの糞尿を干拓地にある広場へ散布する時などはなんとも言えない香りが充満していたが、そのお陰で鳥たちの餌は十分確保されていた。

鍋田埠頭は、元は広々とした葦原であったが、開発工事が行われた影響で、水路にかなりの土砂が流れ込み、葦原から水路を渡り、干拓地に入るハイイロチュウヒの姿が一時的に見えなくなったことがあった。しかし、ここ数年はまた姿がみられるようになりカメラマンの姿も少し増えてきている。

気になるのは2014年あたりからキジの姿を見なくなって来ていることであり、3月から7月の繁殖期にはそこかしこでホロ打ちする姿が見られたものであったが、2、3回見に行っても姿を見られないこともあり、その原因が何なのであるかは思いつかない。干拓地内の草地がなくなりつつあり、冬季に水が入っていない田からは、砂ぼこりも立つこともあったが、現在は幾つか水を張った田も出来はじめ、稲作自体も今までの田植え時期をずらし植える所も出始めた。シギ・チドリの飛来する時期に、休息と採餌する場所もあり、最近の薬剤散布も変わってきたのか、サギ類も徐々ではあるが種類数ともに増え始めている。最近の農家では後継ぎ問題もあるのか、専門的に畑仕事を行う会社が主に、田植えから稲刈りまで行っている。



場所：弥富市

観察された主な野鳥

カワウ、アオサギ、ダイサギ、タゲリ、ケリ、コチドリ、イソシギ、チュウヒ、ヒバリ、ツバメ、セッカ、タヒバリ

地図：国土地理院の電子地形図（タイル）より



2 鍋田における特徴的な変化

カワウは弥富野鳥園を営巣地として約1万羽ほど生息し、名古屋市庄内川と木曾川へ餌を求めて別れ移動する。現在では園内の樹を枯らす厄介な存在でもあると言われるが、青い目を見ると生きてるからと許せる。

ミサゴは木曾川で、主にボラを捕まえて、木曾岬干拓や弥富野鳥園の池にある杭の上で食べている。干拓地内で食べようとすると、すぐにカラスが集まり横取りされる。冬場は越冬のため集まるが、夏場でも2～3羽位が見られる。

チュウヒは木曾岬干拓地で繁殖している。私が見始めたころは3つがい繁殖していたが、ここ数年は何とか1つがい繁殖している状況である。原因の一つに性能の良くなったラジコン飛行機があり、干拓地の中ほどまで飛ぶ機体を見ている。木曾岬町は保護地として40haを作ったが、チュウヒは狩場としてのみ使用している。木曾岬干拓地内の樹木がかなり成長したことにより、ハヤブサ・オオタカも年中見られるが、チュウヒと獲物が重なるので木の伐採が望ましく思える。チョウゲンボウもほぼ年中確認でき、冬場ハイイロチュウヒ・コチョウゲンボウには運が良ければ会うことができるのではと思う。

カワウ

鍋田におけるカワウは1990年代後半から急激に増え始め、2000年には2016年現在に近い規模まで増加している。それ以前はそれほど数が多い鳥というわけではなかった。

ミサゴとチュウヒ

ミサゴは1990年代後半から良く見られるようになった猛禽だが、それ以前ほとんど見られない鳥だった。一方、チュウヒは1970年後半～2000年くらいま

カワウ



| 年度/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |

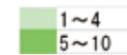
では比較的に見られていたのが、2000年以降は見られない月が増えるなど、ミサゴの増加とは対照的に減少の傾向にある。

なお、2017年種の保存法施行令の一部改正により、チュウヒが国内希少野生

動植物種に指定され、必要に応じ生息地等保護区の指定や保護増殖事業を実施できることになった。

(米倉 静)

ミサゴ



| 年度/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |

チュウヒ



| 年度/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |



9 矢作川河口（やはぎがわかこう） - 水辺 -



1 調査地について

「矢作川河口」の調査は、車で堤防上を移動しながら確認できた野鳥と、途中の20か所程度で車を降り、望遠鏡を使用して河川内で確認できた野鳥を記録している。

調査コースは碧南市の川口町と2号地との境目を始点として、棚尾橋の上流まで、西尾市に移動して中畑橋から14号地の河口部を終点として調査している。途中、碧南側の2箇所河川敷に降り、1箇所では高水敷を車で移動しながら草地とヨシ原を、他の1箇所では徒歩でワンドとヨシ原および河岸の林を調査している。

調査が開始された1972年には河口沖

の両岸に埋立地はなく、干潟は河川内から河口の北側沖まで広がっていた。矢作川には中州や広い砂地が広がっていたが、現在の調査範囲は上流部分およそ2/3の両岸には高水敷が設置されている。

上流部は小潮の満潮時でも干満の影響が及ぶが、下流の1/5は大潮の干潮時でも干潟の出ない水面で、砂地が残るのは右岸の一部に限られる。

調査の範囲外であるが、調査開始当時の碧南2号地は北の方から埋立てが進められており、埋立て途中の湿地ではシギ・チドリをはじめとする水鳥が採餌や満潮

時の休憩場所として利用していた。

コアジサシやチドリ類が繁殖し、ツバメチドリも繁殖していた。ヨシ原や草地ではチュウヒやオオヨシキリなども繁殖していて、現在、県内では観察も稀になっているヨシゴイも普通に繁殖していた。

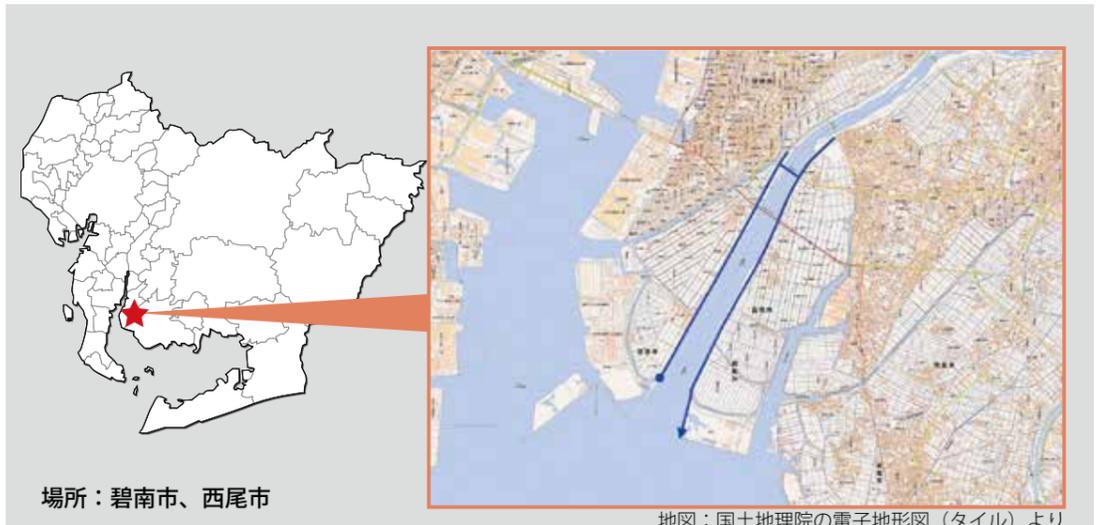
1980年から埋立てが始まった西尾市側の14号地も、一時は同様の環境になったが、埋立て技術の進展によりその期間は2号地とは比較にならない程、短いものであった。14号地の造成と2号地南端の堤防建設によって、矢作川の河口部は沖方向へ1km以上移動している。

矢作川河口に飛来する野鳥で、比較的生息数が安定しているのはカモメの仲間、主に10月～4月と12月～4月頃に飛来して越冬するユリカモメとカモメ、5月～11月に繁殖はしないが飛来して生息するウミネコなどは、減少傾向がみられるものの、現在でも毎年数百羽以上

の群れが飛来している。これらのカモメ類は、主に海上で生活しており、干潮時に現れる上流部の砂州へ飛来して、河川の真水で水浴びをすることが目的である。

カモ類では、冬期にスズガモの数が1980年代の後半から万単位に増加しているが、これは河口部の横で14号地の埋立てや2号地南端の堤防建設が行われた時期に一致しており、その中にできた広い水面を休息地として利用するようになったことによる。2015年には2号地の水面が埋め尽くされ、今後は減少することが予想される。

他のカモ類も近年生息数の増加が認められるが、最大の要因は狩猟規制によるものである。矢作川大橋より下流と碧南市の干拓地や2号地、および西尾市の14号地が銃猟禁止となり、狩猟期に入っても銃声に追われなくなったことで、冬期の生息数は増加している。



場所：碧南市、西尾市

地図：国土地理院の電子地形図（タイル）より

観察された主な野鳥

- 周年：カワウ、アオサギ、ダイサギ、イソシギ、チョウゲンボウ
- 夏：ウミネコ、オオヨシキリ
- 冬：ヒドリガモ、マガモ、オナガガモ、コガモ、キンクロハジロ、スズガモ、カムリカイツブリ、ハジロカイツブリ、オオバン、ユリカモメ、カモメ、タヒバリ、オオジュリン
- 春秋：チュウシャクシギ、キアシシギ、ソリハシシギ、ヒヨドリ



2 矢作川河口における特徴的な変化

減少した種

シロチドリは愛知県でも繁殖するが、非繁殖期に繁殖期を大きく超える数が確認されるのは、渡りの移動によるものと推測される。愛知県における繁殖期は4月～7月頃で、河原の砂地や干拓地の未耕作畑、埋立地の裸地などで繁殖する。シロチドリが集団で繁殖することはなく、コアジサシの集団繁殖地では、その周りに散在して少数が繁殖する。

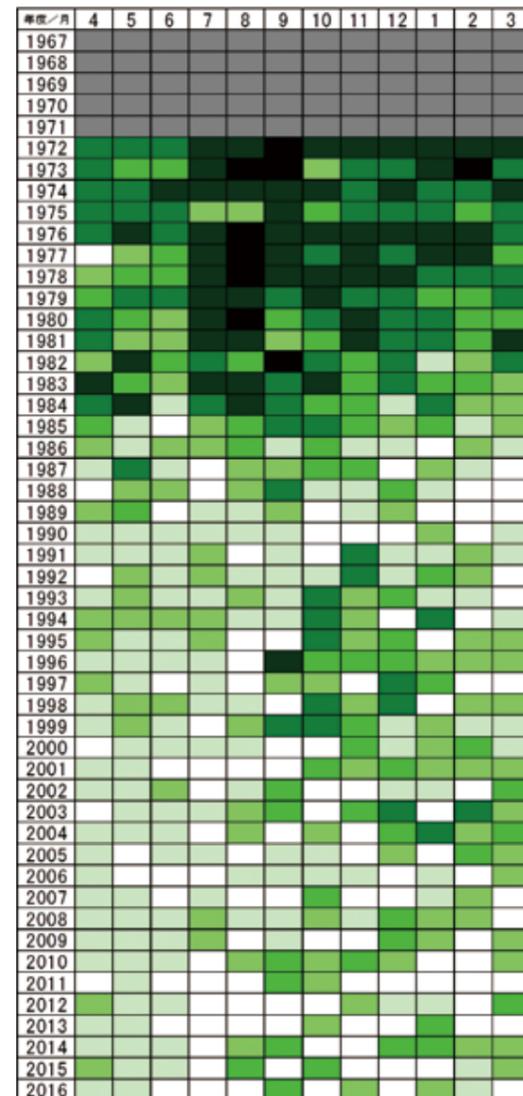
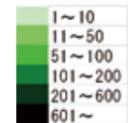
ハマシギは越冬のため、秋は8月頃から渡来して、春は5月頃に渡去するが、4月～5月にみられる生息数の増減は春の渡りによる個体の入れ替りも考えられる。シギ・チドリの中では最も生息数の多い種であるハマシギが、冬期大群で生息できる水辺は、周辺にも良好な自然環境が保たれ、底生生物の多い健全な干潟であることの証しといえる。

コアジサシは、環境条件が良ければ集団繁殖を行い、生息数もシロチドリとは比較にならない数になる。2号地・14号地などの埋立地や、工事等で干拓地にできた広い裸地に集合して繁殖してきたが、繁殖期の生息数が調査記録にそのまま反映されていると思われるのは1990年前後の数年だけで、14号地の中でも矢作川河口のすぐ横で繁殖した年に限られる。コアジサシの餌は小魚で、主な採餌場所は調査地以外の海上であるために、実際の生息数が調査の数に表れていない場合が多いと思われる。

コアジサシの繁殖成功率は低く、一度の豪雨で大きな集団繁殖地が消滅することも稀ではない。大きな集団での繁殖だけでなく、河川の砂地や干拓地の畑、工事途中の狭い裸地などで繁殖することもあ

り、その場合は数ペアから数十ペアの小集団でも繁殖する。繁殖に失敗した場合は、全く別の場所で再度繁殖を試みる習性があり、繁殖期の後半にできる集団繁殖地では、繁殖に成功した群れに、他の

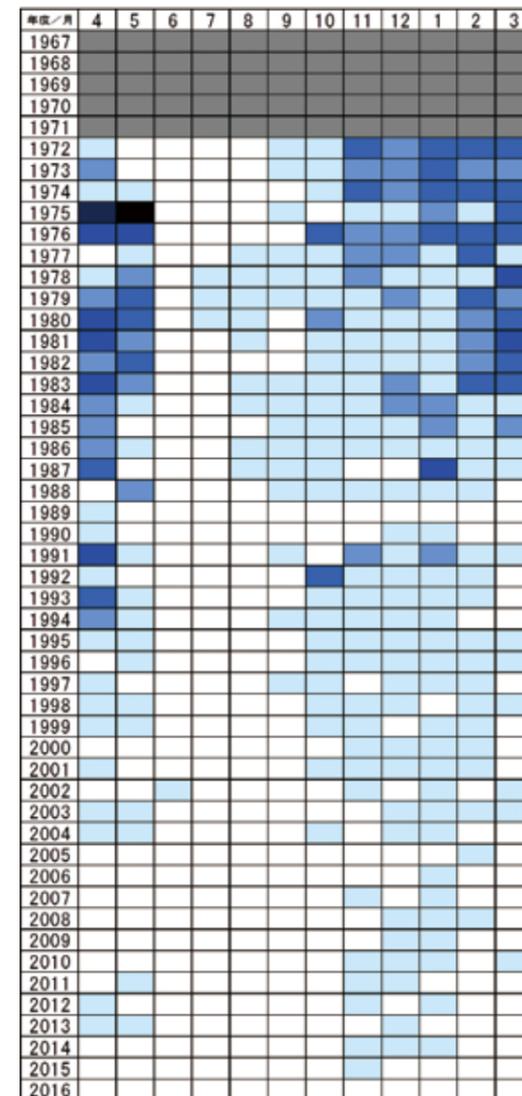
シロチドリ



場所で失敗したものが加わって大きな群れになることが多い。

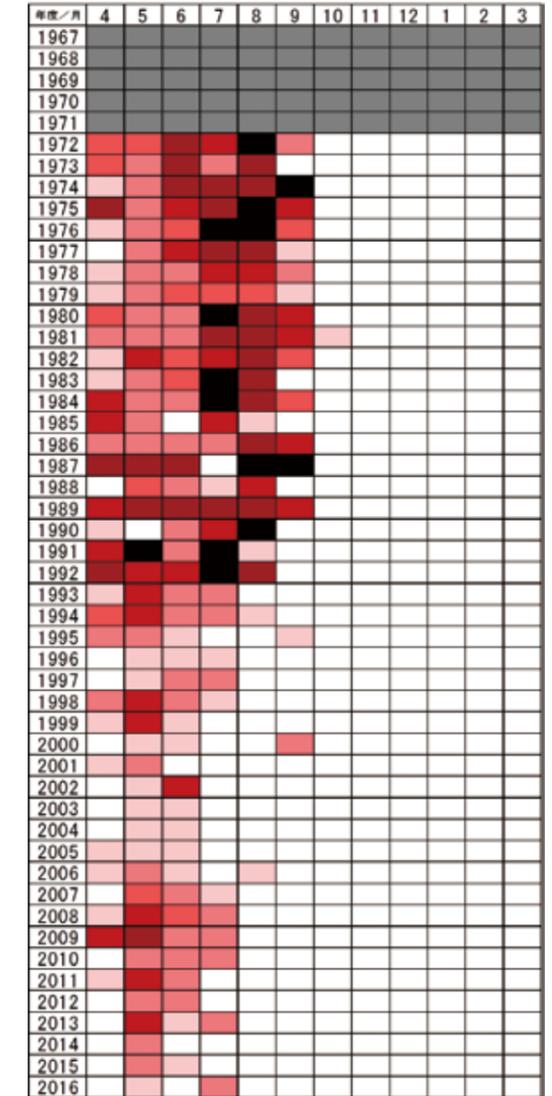
7月下旬～8月上旬には繁殖を終えた群れが淡水や汽水の水辺に集合する習性があるので、1990年代半ばまでは繁殖地

ハマシギ



の近隣でこの群れが普通に見られたが、その後は広い淡水や汽水の水辺が無くなり、稀に伊勢湾・三河湾あるいは国内のどこかで繁殖したと思われるものが、移動の途中に海上で見られる程度である。

コアジサシ





上記3種の記録からも1985年頃までは、矢作川河口にシギ・チドリをはじめとする水鳥の生息数が多く、ここに生息した種類の多さも推測することができる。

2号地だけでなく衣浦湾全体の埋立ては、調査が開始された1972年以前から始まっており、1960年代は矢作川両岸の干拓地にも荒地や耕地整理前の湿地が多く存在していた。調査が始まってからも、調査範囲である矢作川には、自然に堆積した砂地と河口の碧南側沖まで広がる干潟があり、野鳥が多かったのは当然といえる。

矢作川河口堰の計画が実際に動き始めたのが1985年頃からで、矢作川の河川内両岸に山土を入れる高水敷設置の工事が始まった。さらに河口部の河床が浚渫され、この頃を境に矢作川河口からシギ・チドリの生息数が激減したことは、干潟を餌場とするシロチドリとハマシギの数にはっきりと表れている。

1989年には2号地からシギ・チドリの生息環境やコアジサシの繁殖環境が消失し、1995年には14号地からもその環境が消失した。

それまではどこにでも、いくらでもいる普通種のシロチドリやハマシギ、コアジサシが、この矢作川河口から消えることはあり得ないと思っていたが、このまま推移すれば本当に消えてしまうかもしれないと感じたのもこの頃である。

コアジサシでは、その後も若干生息数の多い年が認められるが、これは2号地と武豊の間の衣浦湾口に造られた人工島に繁殖環境ができたことによるものと思われる。

しかしこの人工島で繁殖したコアジサシの数は2号地・14号地とは比較にならない程少なく、現在も広い裸地は存在するが繁殖はしていない。

増加した種

過去に繁殖期の記録がほとんどなく、近年繁殖が確認された種で、現在も安定して繁殖している種としてハクセキレイとチョウゲンボウの2種が挙げられる。

ハクセキレイは本来、北海道以北で繁殖する種で愛知県では冬鳥であったが、1980年代には名古屋港周辺の一部で繁殖しているらしいという情報もあった。

西三河の沿岸部では1991年6月6日に刈谷市で幼鳥1羽の確認があり(山本私信)、1992年5月28日には碧南市6号地の工場で営巣が確認された(筆者確認)。その後、西三河山麓の工業地帯へも拡大し、2000年代には非繁殖期の記録もなかった岐阜県や長野県の山地まで繁殖分布が広がって、現在では中部地方のほぼ全域で普通に繁殖する種になっている。

1970年代には越冬期に岡崎市の矢作橋がハクセキレイのねぐらとして有名であったが、現在は消滅している。近年は碧南市臨海部の工場でも大規模なねぐらが確認されたことがあり、越冬期の生息数は若干の増加傾向が見られる。

チョウゲンボウは本来、中部地方以北にある山地の崖で繁殖するとされていたが、その後関東地方の平野部で繁殖が確認され、1990年代半ばには繁殖期である4月～6月に愛知県でも確認されるようになった。

当初は平野部の山麓に近い地域の確認が多かったが、2005年7月10日に東浦町の鉄橋で繁殖が確認された(筆者確認)。さらに西三河各地の橋や建物で繁殖が確認されて、2012年からは矢作川河口の調査地内でも複数が繁殖するようになった。

2017年には臨海工業地帯の北部にある企業の遊休地に、コアジサシの繁殖地を

創造して、5月末には成鳥の数で500羽程度の集団繁殖地となったが、複数のチョウゲンボウが飛来して孵化直後のヒナを全て捕食してしまった。同所で繁殖していたケリやシロチドリもヒナが確認されず、

チョウゲンボウによる捕食が推測された。本来分布のなかった野鳥の分布拡大は歓迎される場合が多いが、猛禽類の繁殖分布が拡大した場合は、地元で繁殖している野鳥やその他の生物には大きな脅威ともなり得る。(高橋伸夫)

ハクセキレイ



| 年/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |

チョウゲンボウ



| 年/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |



10 木曾川葛木（きそがわかつらぎ） - 水辺 -



1 調査地について

「木曾川葛木」は、愛知県の西にある木曾川河川敷が調査地である。

愛西市三和町から葛木町の木曾川左岸堤防で、河口より 16km から 20km の調査区域である。

葛木の堤防上に立つと、川の向こうに多度山が正面に見え、下流はるかに山の稜線が低く連なっている。対岸の松林の向こうは長良川である。カヌー競技場が整備されている。

堤防の東側には屋敷林に囲まれた集落と、ハス田、水田が広がっている。木曾川左岸の高水敷は、水際のカワヤナギ等低木を残し盛り土整備され、船の係留施

設が整備されている。工事の埋め立て中池になっていた所にカワセミが姿を見せたが、その後埋め立てられ今はセイタカアワダチソウが繁茂している。ヨシの群落は調査区域にはなく、所々にヨシ原が残るが、セイタカアワダチソウに追いやられている。

例年、少ないヨシ原にオオヨシキリが渡ってきて、大きな声の囀りを聞かせてくれる。

左岸堤防上の草地では、ヒバリ、ムクドリ、ツグミなどが見られる。際の樹木ではオオタカ、ミサゴが枝に止まっているのを見るが、いつも背中をみせている。

堤防東側の畑地では、キジやサギが見られるが、シギ類などの渡り鳥は餌場となるハス田が少ないのか、飛来時期が合わないのか、なかなか見ることができなくなっている。

また、川中にできる中州も以前は現れてチドリ類が来ていたが、最近では観察日には中州が見えなくなっている。

春から夏場にかけて、調査地では鳥の種類も数も少なくなっている。観察される主な鳥はカワウ、カルガモ、オオヨシキリ、ツバメ、サギ類、カラスぐらいで、以前は対岸よりカッコウの声が聞かれた。

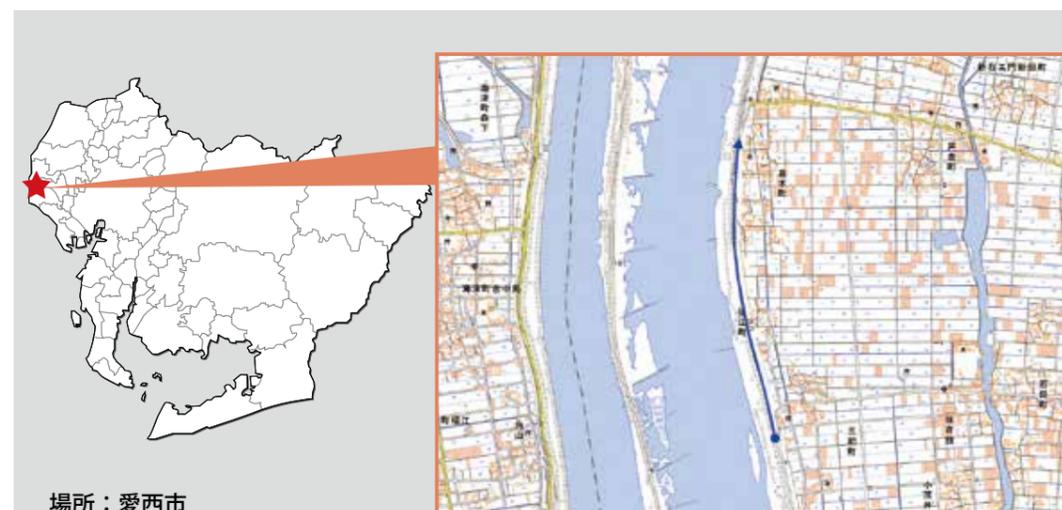
当調査地では、ラジコン飛行機を操縦する人やモーターグライダーを楽しむ人たちが、それぞれ飛行場を整備し、人が集まっている。また、船着き場も整備されているので、家族で来て水上バイクを走らせるなど、一年を通じ、天気の良い日は河川敷の利用者も多くなってきてい

て、手前の岸近くにはカルガモ、キンクロハジロ以外は寄りつかない。冬期のカモ類の多くは、対岸の岸から伸びている水制護岸の周りの流れのない奥まった所や護岸近くに集まって来ている。

カワウ、カルガモは、護岸に上がり休んでおり、コガモ、キンクロハジロなども集まり羽を休ませている。数は少ないが、ときどきトモエガモ、ミコアイサを見ることができ、最近ではオオバンが多く見られるようになった。

やや流れのある所では、カンムリカイツブリが数羽ずつ点在し、潜水から浮き上がるのを見る。マガモの群れにオナガガモやホシハジロ、ヒドリガモ等が混ざり合っている。

幾重にも重なり合っている群れが下流へ流れてゆくのをしていると、船などに驚いたカモの群れが一斉に飛立ち移動する情景には迫力があり、見とれてしまう。



場所：愛西市

観察された主な野鳥

キジ、コハクチョウ、オカヨシガモ、ヒドリガモ、マガモ、ハシビロガモ、オナガガモ、コガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、カンムリカイツブリ、カワウ、アオサギ、ダイサギ、チュウサギ、オオバン、ミサゴ、オオタカ、ノスリ、モズ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒバリ、ヒヨドリ、ムクドリ、ツグミ、ホオジロ

地図：国土地理院の電子地形図（タイル）より



当調査地で印象に残っているのは、コハクチョウが例年10羽前後飛来するが、2006年2月には38羽確認できたことである。

以前、テレビで白鳥が飛立つ時は首を振って合図をすることをみたことがあった。調査地では、普段見る時は首をすばめて眠っていることが多いが、偶然一羽がくびを振り始めたのを見ていたら、次々に首を振り始め、一斉に水面をけて飛立っていった。首を振ると飛立つ合図である白鳥の習性を見ることができた。

また、調査地ではオオタカ、ノスリ、ミサゴも時々見られる。枝に止まっているオオタカが、対岸まで水平に飛ぶのを普通に見られるが、ある日3羽のオオタカが田んぼの上を飛んでいるのを見てると、少し羽ばたいては羽を広げゆっくり円を描いて、かなり高く上昇し南東の方に飛び去った。

タカも遠くへ行くため、上昇気流を利用しているのを初めて見た。少しでも自分の目で、鳥の習性が確認できるのは楽しいことである。

2 木曾川葛木における特徴的な変化

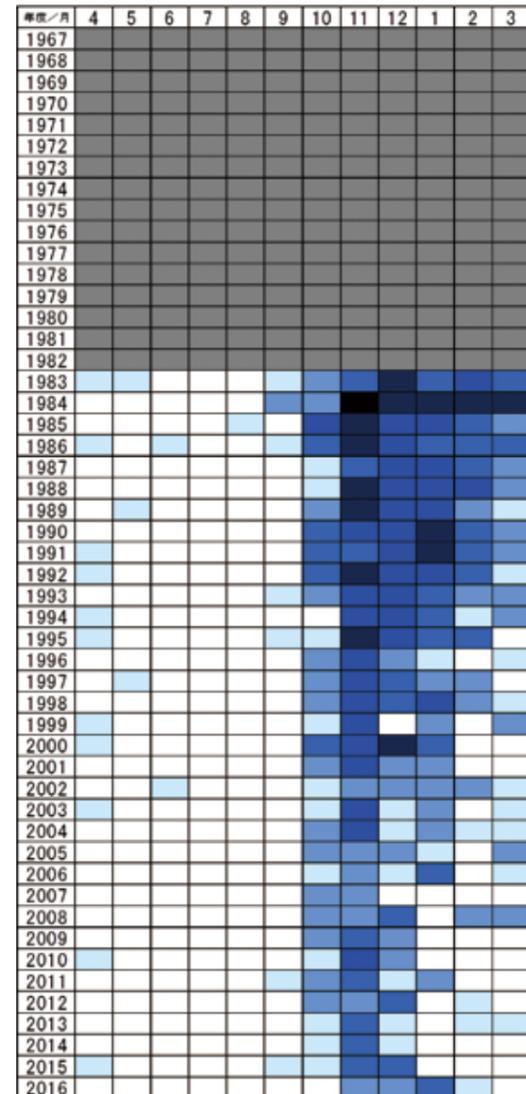
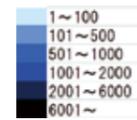
当調査地の木曾川葛木は、1983年の調査開始より葛木を中心に三和町から塩田町までの4kmの調査区間であったが、2007年より工事等で通行止めとなり、現在は2kmの調査区間となって、観察される鳥の数も全体に少なく変化している。

ここ葛木では冬期のカモ類の飛来地であり、観察される数と種類が多くなる。なかでもマガモとオナガガモは千単位の群れで観察することができていた。

最近は全体の数が少なくなっており、

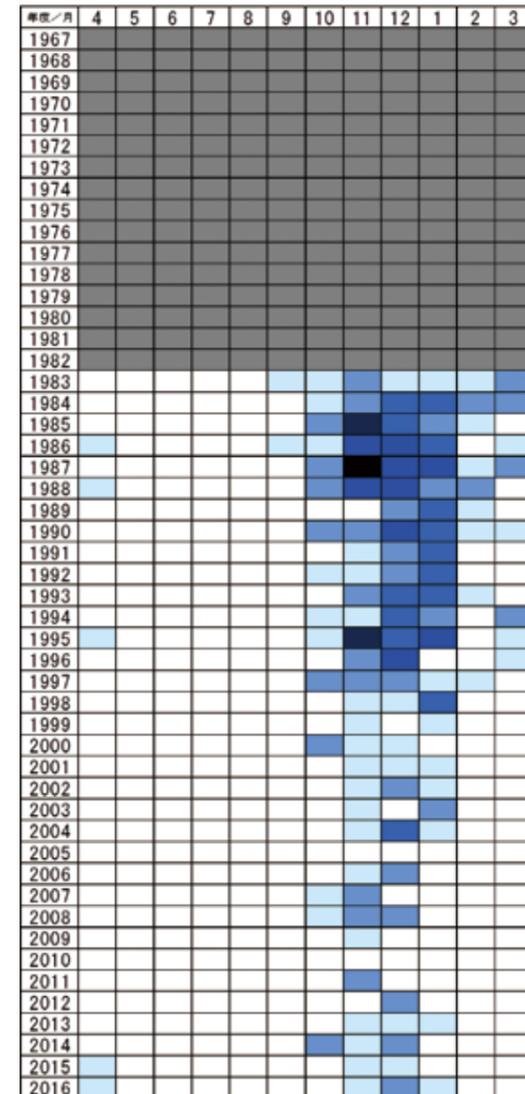
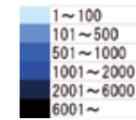
単独の大きな群れはないがマガモの飛来数は一番多い。マガモの群れに少数のヒドリガモ、ホシハジロなど他種が混じっている。船等に驚くと一斉に飛立ち対岸の長良川へ飛び去るのを見ることもあった。

■マガモ



最近の当調査地では、オナガガモは場所を移動しているのか、相当数渡って来ていると思うが、とどまっている期間が短く、数も少なくなりマガモの群れに混じっているのを見る。

■オナガガモ

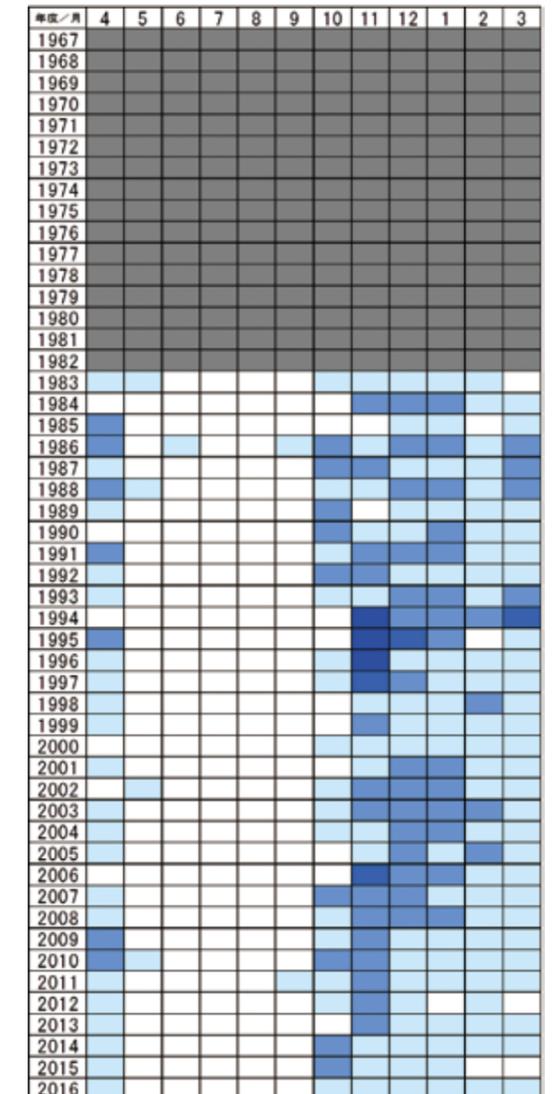


キンクロハジロは、冬鳥として早めに飛来し春遅くまでとどまっている。

例年、一定数が観察され変動は少なく、数羽の群れで広く点在し、人の動きにもさほど驚かない様子である。

(寺本 育夫)

■キンクロハジロ





11 木曾川玉ノ井(きそがわたまのい) - 水辺 -



1 調査地について

調査地「木曾川玉ノ井」は、木曾川河口から約40km上流の木曾川橋下流左岸河川敷の緑地帯で、二次林、低木草本類、草原で構成されており、中洲と水域が含まれている。

1972年から調査されているが、近年、公園が整備されて環境は変化している。

樹林帯ではコゲラ、シジュウカラ、エナガ、ヒヨドリ、カワラヒワ、ホオジロ、ヒバリなどが繁殖し、冬期はツグミ、シロハラ、ジョウビタキ、アオジ、カシラダカ、シメ、ノスリなどが越冬している。

渡りの時期には、ヒタキ類、ムシクイ類など多くの種が利用していると思われ

るが、滞在期間が短いために、多くの種が確認できていない。

水辺では、ケリやサギ類が一年を通して生息し、夏季には調査地周辺で繁殖しているササゴイなども採餌場として利用している。冬季はマガモなどのカモ類が見られ猛禽類も出現する。

過去に観察されたシギ・チドリ類は激減している。

公園や駐車場などが整備され、訪れる人が増えゴミも増えた。

本調査地の区分は水辺であるが、水域全体を見通せず、河川敷を利用する種の確認が主になってしまっている。

調査マニュアルでは、『幅500mの区域内に見聞する鳥類すべてを観察する』となっているが、大型種と小型種では確認率が異なることや、入り江状に入り組んだ場所など視野の優劣により観察確認に差が生じてしまうため、観察結果の扱いは、水域と陸域などを、停線などを利用して区分して表示する必要があると思われる。

渡りの時期に、サシバなどが上空を通過するのが観察される時もあるが、調査地に降り立ち、その場を利用しているのではないため、確認種をそのまま調査地の生息種と同一には扱えない。

カワウは、調査地内で確認される場合と、上空を通過する個体があり、区別して評価する必要がある。

確認した種がどのように調査地を利用しているのか、その行動に重点をおいて

調査しなければ、調査地の生息状況を把握することは難しい。

この調査地の開放水面を利用する種の代表はカモ類であるが、気象条件などにより、一時的に数が増えることはあるが相対的に減ってきている。

オオタカなどの猛禽類が狩りを行なった場合などは、調査地から移動することもあり、定量的に把握するには同時に広範囲を調査することが必要である。

なお、調査時間以外に、高空の遠方を飛翔していたオジロワシ属(Savigny)も確認されたが、調査範囲外であることと、種の同定が出来なかったため、観察記録に記載していない。

コハクチョウも滞在する場合もあると思われるが、調査日には観察されなかった。



場所：一宮市

地図：国土地理院の電子地形図(タイル)より

観察された主な野鳥

マガモ、カルガモ、コガモ、カンムリカイツブリ、キジバト、カワウ、アオサギ、ダイサギ、コサギ、ノスリ、コゲラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、シジュウカラ、ヒバリ、ヒヨドリ、エナガ、ムクドリ、シロハラ、ツグミ、ジョウビタキ、スズメ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、カワラヒワ、ホオジロ、カワラバト



12 佐布里池 (そうりいけ)

— 水辺 —



1 調査地について

調査地「佐布里池」は、知多市東部丘陵地に名古屋南部臨海工業地帯に工業用水を供給するために建設された調整池である。池の周囲、約 180ha が佐布里鳥獣保護区として指定されている。

調査は 1974 年から実施され、当初の北部の七曲池出発から、北部周辺の環境悪化により、池南部を回るコースへと変更した。調査者は現在 4 人目が継続担当している。

池の周囲の植生は、建設当初頃のマツ類が枯死し、シイ類、カクレミノ、ヒサカキ、ヤブツバキ等の常緑広葉樹、コナラ、アベマキ、ヤシャブシ等からなる人

工林、二次林である。なお、佐布里梅として 5,100 本が植栽されている。池の植生は、池の性格上、水生植物は全くない。池の完成後、植生等が一変した周辺は、約 50 年を経過し、樹木は生長して材積も増加し、大径木になり、シイ類、クスノキ等の樹冠が鬱閉してきた。そのため林内照度が低下し、林相も単純化、下層植生も貧弱である。さらにモウソウチク等の竹類の侵入拡大が著しく、伐採も行われている。そんな状況で、余り多くの鳥類の繁殖は見られないが、最近では竹木混合林や暗い森林に適応したキビタキの幼鳥やサンコウチョウが繁殖期に見ら

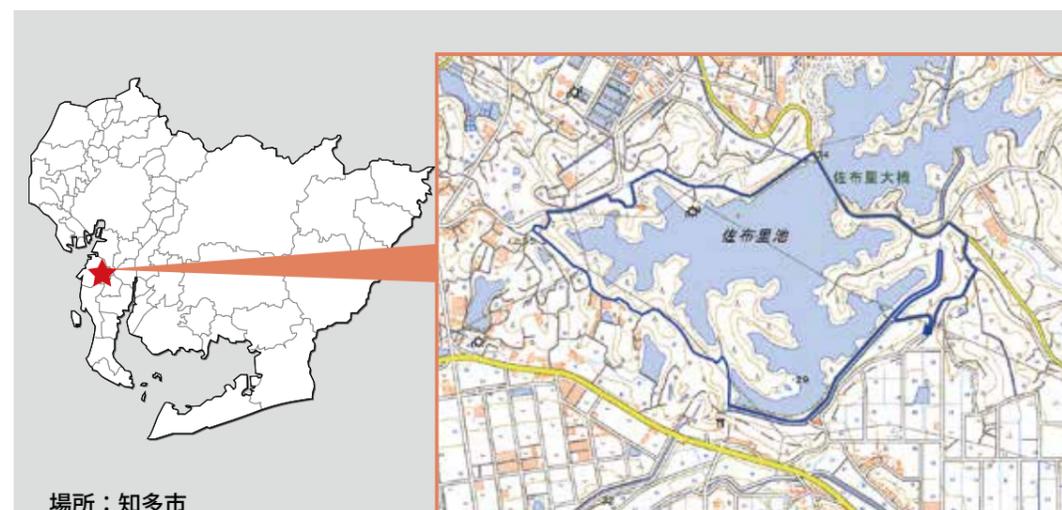
れるようになった。散策路が全線開通し、佐布里大橋から樹林帯、用水路を通り抜け、南部の方へ一周出来る。また、調査コースの隣地に太陽光設備開発等が行われ、南部も次第に環境が変化しつつある。最近では、カシノナガキクイムシによるナラ枯れが侵入し、コナラなどのナラ類の枯損木拡大が心配される。2018 年度からの高圧電線鉄塔建て替え工事等の影響で環境悪化も懸念される。

佐布里池の代表的な水鳥は、秋冬のカモ類である。しかし、最近のカモは水面採餌型のマガモ、カルガモが目立つ程度で、カルガモは百羽以下で最盛期の数千羽から激減している。マガモは数百羽で千羽に及ばない。

他の水鳥は、カンムリカイツブリの個体数や確認の頻度は増加傾向にあり、2015 年 3 月に 14 羽をカウントし、2015 年の夏には越夏した。オオバンも少数が見られるようになった。

秋冬には、カモ類、小鳥類、魚を狙い猛禽類が飛来する。ハイタカ、オオタカ、ノスリ、ハヤブサ、チョウゲンボウ、ミサゴ等である。2010 年と 2013 年にはクマタカの幼鳥が観察された。オオタカは 1997 年前後から少数だが頻度も多く見られ、その後、継続的に繁殖している。

佐布里池付近には、名古屋南部、衣浦臨海工業地帯に供給する高圧電線鉄塔群がある。鉄塔の穴、隙間を利用してムクドリやスズメが営巣している。池や用水の橋桁にはツバメが営巣し、愛知用水により溜池に頼らず圃場整備が進み、稲作、果樹栽培等が可能になり、「食、住」や隠れ場等、身の安全を守る森が身近にあり、野鳥にとって好適な環境が広がった背景もある。元々、広い農地に依存して生活している種類は、今後、この様に郊外への人工建造物での繁殖傾向は拡大していくと思われる。



場所：知多市

地図：国土地理院の電子地形図（タイル）より

観察された主な野鳥

マガモ、カルガモ、コガモ、カンムリカイツブリ、キジバト、カワウ、ミサゴ、オオタカ、ノスリ、カワセミ、コゲラ、モズ、ヤマガラ、シジュウカラ、ツバメ、ヒヨドリ、ウグイス、メジロ、ムクドリ、キビタキ、スズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ホオジロ、アオジ



2 佐布里池における特徴的な変化

オオタカの県内の繁殖記録は、1975年に猿投山麓であり、主生息地は山間部、高い標高の奥山で観察は少なかった。知多半島地域では1967年～1979年頃に秋の渡りが少数見られたのに過ぎなかった。オオタカは、標高100m以下の丘陵地、50m前後の知多市周辺の市町で見られるようになり、1991年頃から当地でも、主に秋季少数が見られるようになった。近隣の常滑市や東浦町で営巣地が確認された1997年前後から観察が多くなり、繁殖期も見られた。営巣木が確認された2005年以降は少数ながら、年間を通して観察された。

以後、オオタカは、継続的に繁殖している。以前は池から少し離れた東部や神社付近に営巣が見られたが、次第に池の方へ移動した。移動後も、繁殖期前後の高圧鉄塔の線下伐採、不用意な保全や整備等は、繁殖中止や営巣木移動の負荷を与えた。遊歩道等の近い巣ほど雛の落下、巣立ち後の事故が起きた。2010年は繁殖が見られなくなった。2011年からは同一営巣木を使用しているが、営巣木が遊歩道ルートになったために、今後の繁殖への影響が懸念される。

佐布里池の主管理は浄水場であるが、水路等は水資源機構等、鉄塔等の維持管理は電力事業会社と各部所が担当し、市や委託管理等、多岐にわたる。作業も下刈、竹木の伐採等が、年間通して施工されている。そこで、事業の情報を受け、協議、調整をしているが、オオタカ等の繁殖期は長く、なかなか難しい。非繁殖期の9月から12月中旬までの作業完了が安全であるが、時期や営巣木との距離、伐採面積等営巣環境の改変に、特に留意が必要

である。生息に下刈や除伐は有利に働く場合があるが種類により一様ではない。今まで以上に、各事業者と緊密に連携していく必要がある。

現在でも万全でない上に、種の保存法に基づく国内希少野生動植物種からの解除は森林乱開発防止、里山保全のシンボルのオオタカには大きなダメージを受け、他の種類も言うまでもなく、鳥類生息の環境保全を守れないおそれが出てくる。里山生態系の上位の象徴種としての価値は、今後も変わらない。人工巣等、別の対策が必要になってくる。

カワウの繁殖地は、美浜町の「鶺鴒の山」であり、国の天然記念物として有名であるが、知多市日長には1948年まで繁殖地があり、「鶺鴒の山」以上の一大コロニーであったと言われている。佐布里池から南西約3kmの場所である。

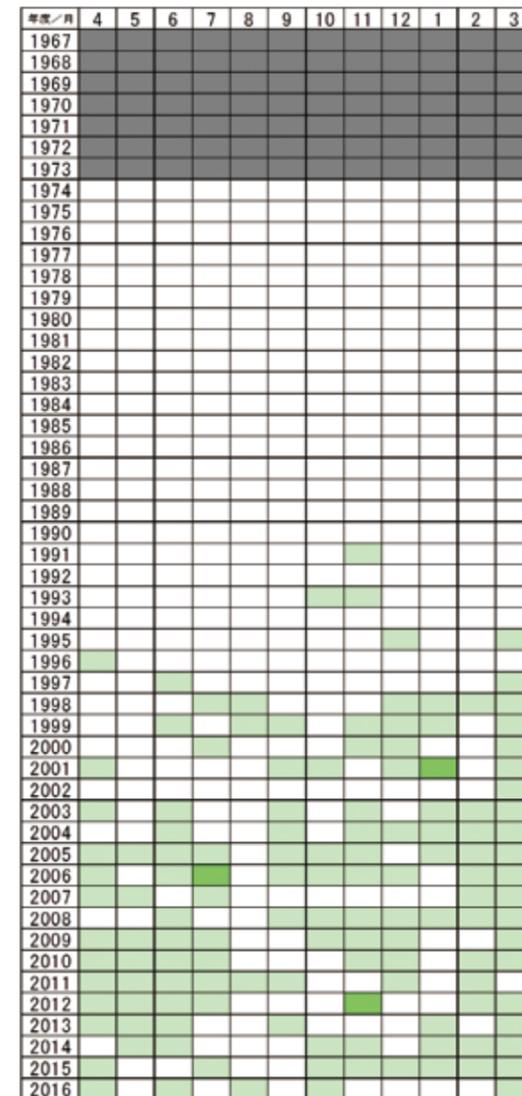
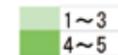
当地のカワウは、池完成後15年経過した1980年頃から、冬季に増加が見られようになった。正確には解らないが、「鶺鴒の山」の分散が原因ではないかと言うことは「鶺鴒の山」の各地への分散が、1970年頃以後から盛んになったことで推測される。

以後、1987年には、12月に初めて100羽以上確認され、1990年代以降増減はあるが、月別100羽近く、それ以上も見られた。1995年、1996年4月の時期に初めて11羽以上のカワウが記録された。2001年頃から、コロニー形成が目立ち、以降、繁殖活動が活発になってきた。さらに2005年から2009年は、年間にわたり高個体数を維持した。その結果、糞による水質汚染悪化が進んできた。このため、2009年11月頃から歩道巡回、爆音、ポール、妨害ロープ、固定サーチライトの発光等の分散対策の

結果、次第に効果が現われてきて、2010年度は4、5月、2月を除き激減した。減少した個体数は、2011年度以降低く推移して、現在営巣は見られない。分散したカワウは、隣地域の常滑市に移動した。

森林内に小規模な崩壊、立木倒伏や枯損

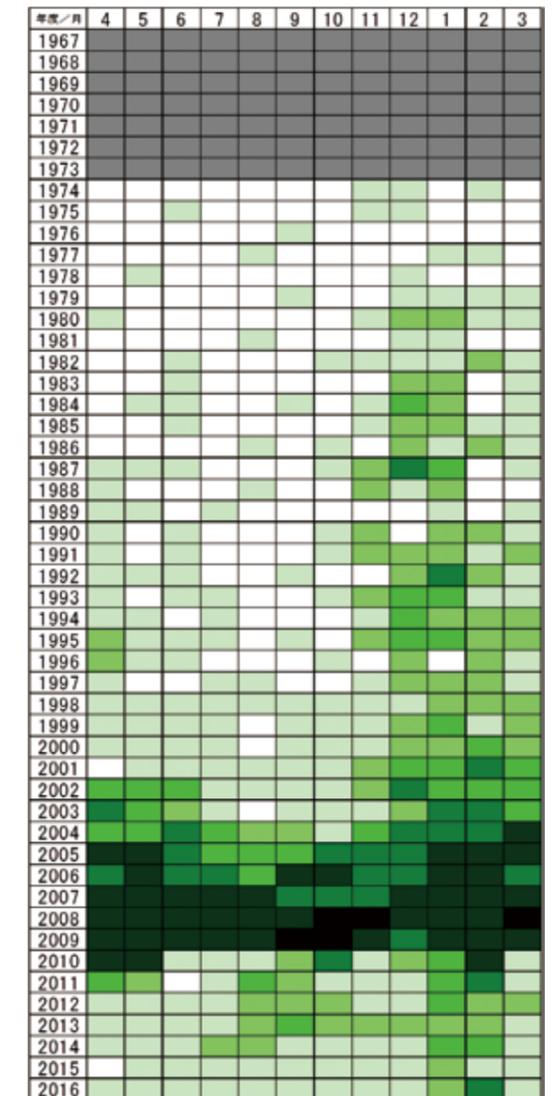
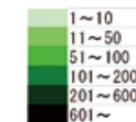
オオタカ



が見られる。計画的に治山工事を施工し、健全な森林保全回復を行い、併せてレクリエーションに活用することで、野生生物の保全が図られると考えられる。

(伊藤 岱二)

カワウ





13 汐川河口 (しおかわかこう) - 水辺 -



1 調査地について

調査地「汐川河口」は、三河湾の最奥部に位置し、田原市東部の汐川河口から豊橋市南西部の杉山町地先にかけて広がる自然の干潟である。面積は約 280ha、満潮時にはほぼ全域が海になり、干潮時には滞筋(みおすじ)を除き、ほぼ全域が干潟になる。基本的には砂泥質の干潟で、西側に粒径がごく細かなシルトを多く含む泥質、東側は粒径がやや粗い細砂質となっている。また、汐川干潟は、外周がコンクリート堤防で囲まれている。堤防内部の後背地は、水田、畑、池などがあり、多彩な環境を有する。

汐川河口と境川河口の広範囲には、ヨシ

帯が広がっている。主要な植物は、潮間帯上部には、シバナ群落、ハマツナ群落、シオクグ群落、ヨシ群落がある。潮上帯にはハマボウ群落、及びオオバイボタ、マサキなどの低木やセイタカアワダチソウを伴うヨシ群落が成立していて、潮間帯から潮上帯が連続した環境が残り、塩湿地性の植物が分布している。分布域が広いのは、ヨシ群落で、特に汐川と切畑川河口部に発達する。

底生生物はゴカイ、貝、カニなどが確認され、約半数の種を貝類が占めている。コケゴカイ、オキシジミチゴガニなどは、分布域が広く干潟の各所に生息している。

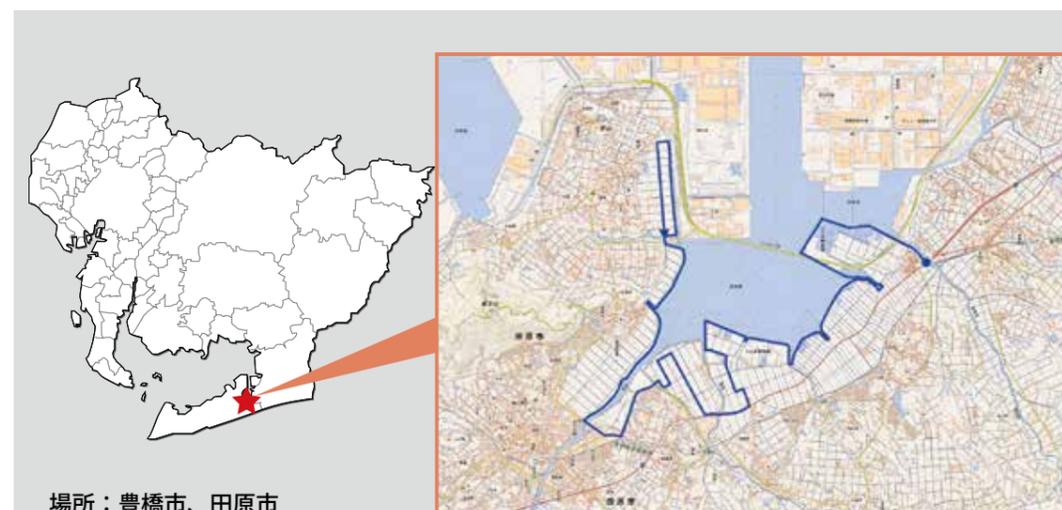
干潟の沖合に生息するオオノガイ、ヨシ群落周辺のみに見られるフトヘナタリ、アシハラガニなどは、分布が限られる。また、干潟の広範囲にカキが高密度に密生してできたカキ礁が見られる。凹凸が多く、この隙間が多くの生き物の生活場所になる。これらの底生生物は、堆積した有機物を捕食、あるいは水中の栄養分をろ過することなどにより、干潟の底質、水質の浄化に役立っていると考えられている。

鳥類はカモ類、シギ、チドリ類の数が多く、全国的な渡り鳥の重要な中継地、渡来地とされ、多くの種類が確認されている。カモ類は、スズガモを中心に冬場に多く観察される。シギ類は、冬から春にかけて多い。ハマシギは、特に冬場に大群で訪れる。シギ・チドリ類は、長距離の渡りをする。他地域で標識を付けた個体が観察され、東アジア地域の重要な中継地となっているようだ。後背地ではオオタカやハヤブサ、チュウヒなどの猛禽類も確認されてい

る。彼らの餌となる小鳥や小動物が周辺に多く生息しているといえよう。シギ・チドリ類も種類によっては、休耕田や畑に現れる。干潟だけでなく、後背地も含めて、多彩な環境を有しているといえる。

明治時代には、2,000haにも及ぶ広大な干潟が広がっていたとされているが、昭和10年代から、梅田川河口沖をはじめとして、埋め立て事業が行われるようになり、昭和47年に田原町緑が浜が、翌昭和48年に豊橋市に有明町が設定され、ほぼ現在の汐川干潟が作られたようだ。この埋め立て面積は年累計で1,732haにも及ぶと言われている。そして、臨海部と埋立地をつなぐ産業道路が建設され、三河港大橋が昭和57年に開通した。昭和47年頃から始まった干潟の保存運動などにより、当初予定されていた干潟の全面埋め立て計画は、汐川河口部を残し中止された。

調査は、車に乗って、堤防上を走り行っている。片側に海(干潟)、反対側に陸(後



場所：豊橋市、田原市

地図：国土地理院の電子地形図(タイル)より

観察された主な野鳥

ヒドリガモ、マガモ、カルガモ、ハシビロガモ、オナガガモ、コガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、カイツブリ、カワウ、アオサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、オオバン、ケリ、ダイゼン、コチドリ、チュウシャクシギ、キアシシギ、イソシギ、キョウジョシギ、ハマシギ、ミサゴ、トビ、オオタカ、オオヨシキリ、スズメ、カワラヒワ



背地)を眺める。このため、水辺の鳥を中心に、山の鳥も観察できる。鳥の判別は見通しが良いため、目視による確認が殆どである。最近では、堤防工事の影響のため通れない場所が多く、ルート変更を余儀なくされる。

温暖化や異常気象などの気候変動も影響していると思う。酷暑の日などカワウやアオサギは大口を開け、喉をカラカラ揺らしているのを見る。冬場には、ホオジロガモやツクシガモも見られるようになってきた。

大雨や巨大台風も多い。特に台風が去った後は、珍種が多く、過去にアカガシラサギや、ハジロクロハラアジサシを確認したこともある。このように、今まであまり見られなかった鳥が確認されることは、何らかの要因が働いているのであろう。

また、平成23年の大震災以降、堤防工事箇所が増えた。嵩上げを施しているようだ。太陽光発電施設の建設も著しい。かつて養鰻池であった場所にソーラーパネルを設置することも多いようだ。

鳥以外の動物で、水路で最も良く目立ち、またその数が多いのがミシシッピアカミミガメである。調査中、付近を通りかかると、彼らはドボドボと一斉に水に逃げ込む。真冬でも暖かい日は甲羅干しをしている。また哺乳類のヌートリアも目にする。かつて毛皮目的で飼育されていた動物で、今は外来生物法の特定外来生物となっている。

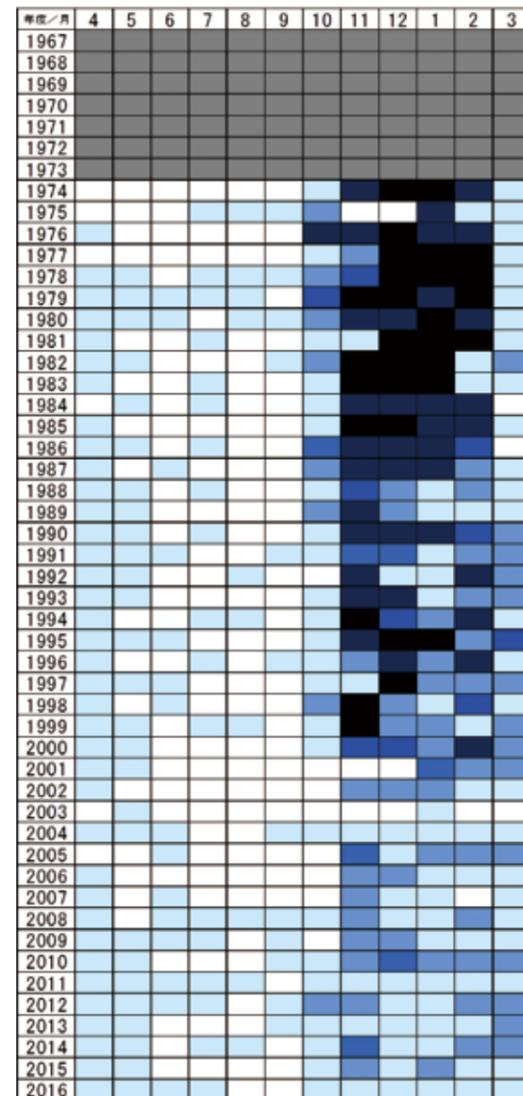
2 汐川河口における特徴的な変化 カワウ

一時、爆発的に多く確認されたことがあったが、その後、数は多いものの、やや減ったように感じる。この変化は漁業被害軽減のための駆除と関係があるのかもしれない。

スズガモ

主に冬鳥として多数飛来する。調査時に観察する個体はその多くが休息しているものと思われる。実際、海の広範囲に多数いる。過去の調査データを見ると数は減っている。

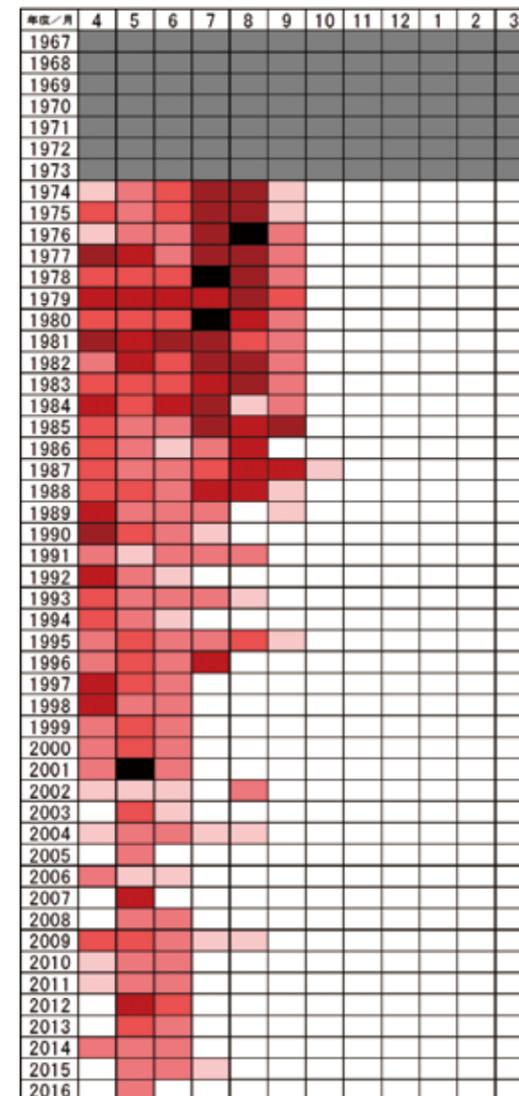
スズガモ



コアジサシ

夏鳥として渡来し、魚を捕食する。かつては造成工事で更地になったところに営巣を確認することもあったが、現在調査ルート内に営巣を確認することはない。

コアジサシ

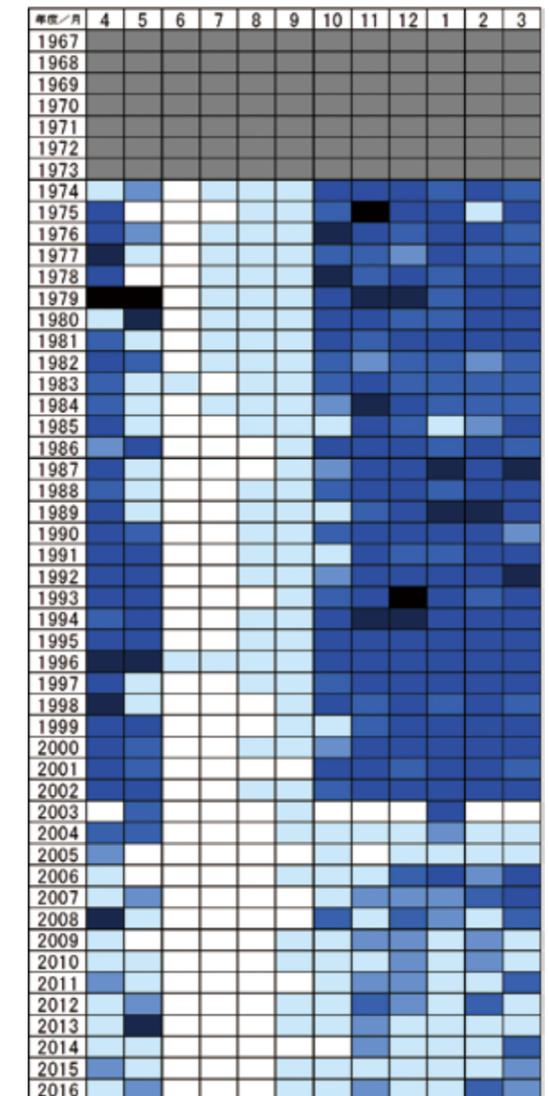


ハマシギ

特に冬に数多く渡来する。集団で飛ぶときは数の把握が難しい。底生動物を採餌するので、水質や底質の有害物質等による汚濁がないように配慮する必要があると思う。

(片山 卓也)

ハマシギ





14 庄内川河口(しょうないがわかこう) - 水辺 -



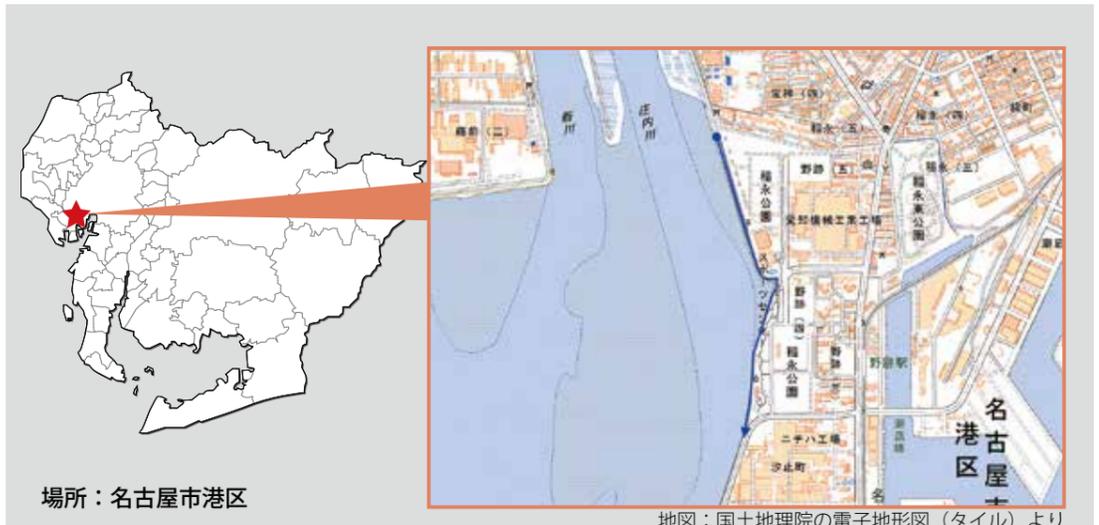
1 調査地について

調査地「庄内川河口」は、岐阜県夕立山に源を発し、伊勢湾に注ぐ。河口には干潟が広がり、水鳥の重要な生息地となっている。庄内川が注ぐ伊勢湾最奥部には、庄内川に隣接する新川及び日光川の河口が集まり、一帯に干潟が広がっている。かつて伊勢湾は広大な干潟を有していたが、高度経済成長期にほとんどが埋め立てられ、この一帯の干潟は市民運動により、かろうじて残されたものである。潮が最も引いたときには、238haの干潟が現れる。干潟の主要部分は「藤前干潟」という名でラムサール条約に登録されてい

る。水鳥はこの一帯を1つの場所として利用しているため、調査も一帯を対象に行っている。調査範囲は国道23号線以南の河口部である。干潟は、潮の干満により刻々と変化するため、調査時の状況に応じ、徒歩及び車で移動しつつ、数か所で止まって干潟及び干潟周辺の水面、堤防上の野鳥をカウントしている。また、移動に際し通過する庄内川河口の東に隣接する稲永公園についても調査している。1年で120種ほど、10数年で200種ほどの鳥が観察されている。多くは水鳥で、

干潟を採餌場、休息地として利用する冬鳥及び旅鳥である。干潟上部の葦原では、カルガモ、オオヨシキリ等が繁殖している。30年位前まではこの葦原でバン、ヨシゴイも普通に繁殖していたが、減少し、現在では繁殖どころか姿を見ることも稀である。これらの減少は当地に限ったことではないので、当地の環境変化以外の理由があるものと思われる。当地の環境はそれなりに保たれているが、周辺は開発が進み、かつてあったコアジサシ、シロチドリのコロニーは失われた。また、当地でもかつてはたくさん生息していたハゼがほとんどいなくなったので、見ているだけでは分からない環境の変化があるものと思われる。当地を代表する鳥は旅鳥、または冬鳥のシギチドリ類である。カモ類やカモメ類も多く、干潟以外の水辺環境にも生息す

るが、シギチドリ類は干潟に大きく依存している。そのシギチドリ類が減少している。これらのシギチドリ類は極北で繁殖し、日本から東南アジア、オーストラリア、ニュージーランドで越冬する(そのころ南半球は夏だが)。渡りの主要な中継地は黄海沿岸である。この減少には温暖化による繁殖適地の減少、黄海での開発による干潟の減少(1年に10%減少と言われている)が大きく影響しているであろうと推測される。湾の最奥部なので、海鳥の記録は少ないが、台風の時などは、それなりに記録がある。稲永公園ではカワラヒワ、ヒヨドリなどが繁殖している。2017年にはキビタキが繁殖した。渡りの時期には名古屋市南部の希少な緑地として、多くの野鳥が見られる。



場所：名古屋市港区

地図：国土地理院の電子地形図(タイル)より

観察された主な野鳥

ヒドリガモ、マガモ、カルガモ、オナガガモ、コガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、カンムリカイツブリ、ハジロカイツブリ、カワウ、ササゴイ、アオサギ、ダイサギ、コサギ、ダイゼン、シロチドリ、メダイチドリ、オオソリハシシギ、チュウシャクシギ、アオアシシギ、キアシシギ、イソシギ、オバシギ、ハマシギ、ユリカモメ、スズロカモメ、ウミネコ、カモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、ミサゴ、チュウヒ、ハヤブサ、イソヒヨドリ



2 庄内川河口における特徴的な変化

ミサゴ

ミサゴは30年ほど前までは数少ない旅鳥及び冬鳥であった。10月に数羽来て、冬の間はいたりいなかったり、3月に現れて、春夏にはいなかった。

それが、現在は10月に30羽、冬の間は20羽前後、春夏にも一桁だが確認できている。繁殖期である春夏にもいるが、繁殖している様子はないので、春夏にいるのはまだ繁殖しない若い鳥であろう。

いる。ハマシギは砂浜や、川の中上流の河原にもいるが、個体数の多い主な生息地は干潟である。当地では、多い時には七千羽以上が観察されたが、ここ数年は

ミサゴ



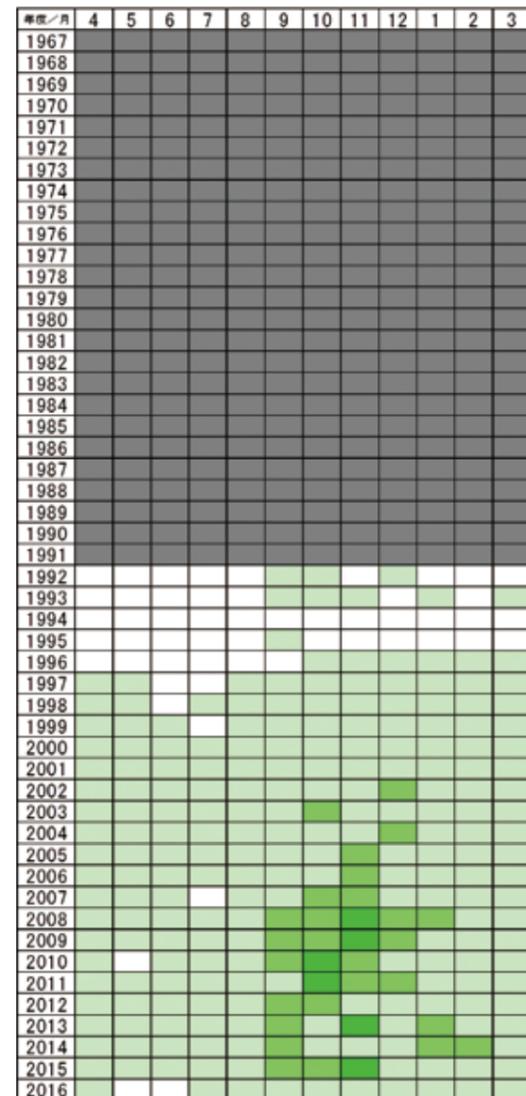
マガモ

マガモは冬鳥であったが、当地及び周辺で繁殖するようになった。もともとが冬鳥なので、留鳥のカルガモより寒いときから繁殖するのか、冬鳥のカモが去って、留鳥のカルガモがまだ繁殖のために分散している時期には当地ではカモ類の中でマガモが最も多い。

マガモを飼いならしたのがアヒルであり、2種は同種なので繁殖可能だろうが、どこかで混じり、北へ渡らずにここで繁殖するマガモが現れたものと思われる。カルガモと繁殖地が重なるため、現在でもカルガモとマガモの雑種は割合見られるが、今後どうなるのか、興味深い。

ハマシギ

日本では、多くのシギチドリが観察されているが、個体数では圧倒的にハマシギである。シギチドリ類の多くは旅鳥であり、その旅鳥の旅の途中の中継地は、主に黄海沿岸で、黄海沿岸に比べると藤前干潟は1%以下である。カウントの誤差の範囲内として、なかったことにされてもよいようなものだが、冬鳥として渡来するハマシギは、それなりの数が来て

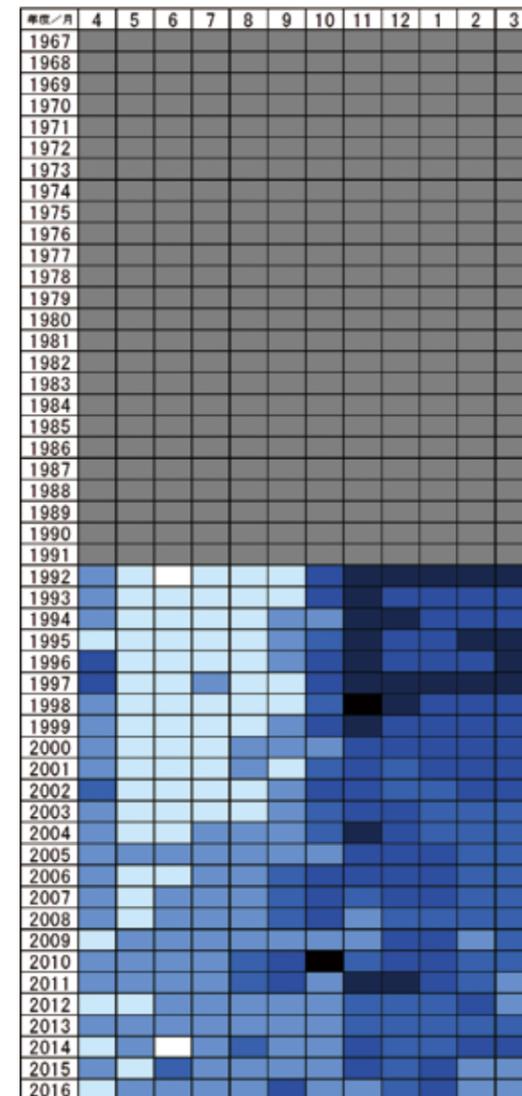


千羽を超えることは稀だ。ハマシギの天敵であるハヤブサは以前から1羽から2羽である。つまり1羽のハマシギに対するハヤブサの脅威は格段に増している。

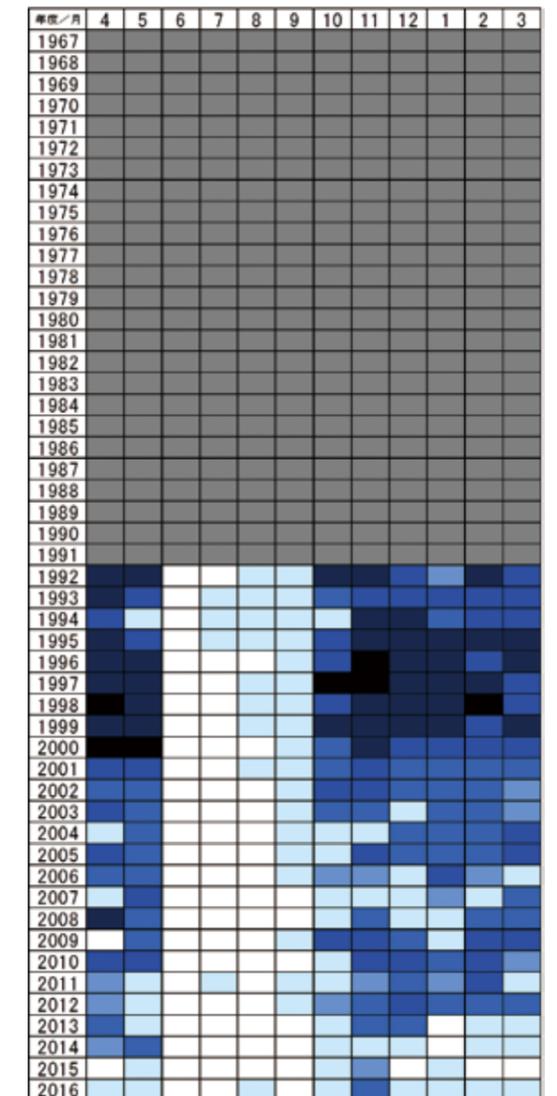
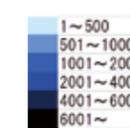
秋冬には昼間より夜中に広く干潟が現れるため、ハマシギはハヤブサを避けるため、夜中を主な採餌時としているようで、昼間には現れないことも多い。

(太田 次雄)

マガモ



ハマシギ





15 茶臼山 (ちゃうすやま)

— 山林 —



1 調査地について

調査地「茶臼山」は、愛知県の北東部に位置し、北設楽郡豊根村にある。北は長野県と隣接し標高 1,416m あり、天竜奥三河国定公園に指定されている愛知県における最高峰である。

茶臼山は、年間を通してウォーキングの人や観光客が訪れる県民の憩いの場所である。山頂には南アルプスをはじめ、三河地方の山並みが一望できる展望台もあり、見事で広大な眺望が楽しめる。軽装でも山登りが年間を通して可能であり、初夏には新緑、秋には紅葉が楽しめる。麓に広がる茶臼山高原には、牧場やス

キー場があり、また、休暇村茶臼山高原もあり宿泊施設も整っている。

かつて、この地域は原生林におおわれていたが、1950 年代から開発が進み、高原観光地と変貌していった。冬は、茶臼山の南にある萩太郎山の北斜面には、1986 年に開業されたスキー場があり、多くのスキー客で賑わう。初夏には、2007 年頃から芝桜が植栽され「天空の花園」と銘打ち開設された。現在では、芝桜が山頂付近の山肌一面を覆うようになり、観光客で賑わっている。

春から夏にかけてはオオルリ、キビタ

キ、コルリ、ミソサザイなどが賑やかに囀り、現在でも何とか残っている原生林に、美しい鳴き声が響いている。

冬には、マヒワ、アトリ、ベニマシコ、ウソ、稀にハギマシコやオオマシコも見ることができる。

年間を通して、ウグイス、ホオジロ、ヒガラ、コガラなどが生息している。

しかしながら、近年は、亜高山帯・高原性の夏鳥であるノジコ、コマドリ、マミジロ、アカハラ、ホオアカなどが県内で最後の繁殖地であった当地域においても、確認できなくなりつつある。これは、当地域の自然環境が壊されていることが起因しているものと思われる。さらに、国や世界規模の環境変化によって、影響をうけていることも推測される。今後さらに、種によっては生息範囲が狭められる可能性があり、大いに危惧される。

一方、個体数が急速に増えている種も

ある。外来生物法の特定外来生物に指定されているソウシチョウである。すでに関東地方をはじめ、全国的に生息地域は拡大しつつあったが、この茶臼山周辺でも 2007 年から確認されるようになり、現在では、春から秋にかけては、いくつかの群れで森中を賑やかに鳴きながら動き回り、他の鳥たちを圧倒している。

このように、本調査の開始から 35 年が経過し、茶臼山周辺で生息する鳥たちの種類や個体数は大きく変化している。とりわけ、高原性の繁殖種が急速に減少しており、さらに減少傾向が加速されることが懸念される。

この茶臼山高原においても、多くの観光客の誘致のため、関係者がいろいろ知恵を絞り、努力しておられるが、自然環境への十分な配慮も心掛けていただくことを期待する。



場所：北設楽郡豊根村

地図：国土地理院の電子地形図 (タイル) より

観察された主な野鳥

カイツブリ、キジバト、アオバト、ホトトギス、カッコウ、トビ、ノスリ、コゲラ、アカゲラ、カケス、ハシブトガラス、コガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒバリ、イワツバメ、ヒヨドリ、ウグイス、メジロ、ミソサザイ、コルリ、キビタキ、オオルリ、キセキレイ、セグロセキレイ、アトリ、カワラヒワ、マヒワ、ベニマシコ、ウソ、イカル、ホオジロ、ソウシチョウ



2 茶臼山における特徴的な変化

コマドリとマミジロ

この両種は、当地域においては夏鳥であり、亜高山帯を代表する種である。愛知県において繁殖が確認されているところは稀である。

コマドリは、茶臼山での調査が開始された1983年から、個体数は多くないが毎年夏期に確認され、繁殖していたものと思われる。しかし、2007年頃から全く生息が確認されなくなった。調査地と隣接する長野県売木村の「あてび平」においても、最近ほとんど生息確認がされなくなっており、本種の減少傾向は広範囲な現象と思われる。

マミジロも1983年の調査開始頃は、少数ではあるが確認されていた。しかし、コマドリの確認が出来なくなった10年前頃から、ときを同じくして確認されなくなった。調査地と隣接する売木村では、現在も稀に確認されてはいるが、やはり急速に減少している種の一つである。

他にノジコ、アオジ、アカハラ、ホオアカなど、以前は普通に繁殖時期に確認されていた種が、当地域においては見られなくなってきた。これは、茶臼山周辺の自然環境の変化、地球規模の環境変化が影響しているものと思われる。

ソウシチョウ

茶臼山において、何と言っても特筆すべき懸念されるのはソウシチョウである。かつて、ソウシチョウは主に愛玩用として国内に持ち込まれ、その後、野生化し全国的に分布を広げている。

愛知県では2000年頃から確認されるようになり、2003年には段戸裏谷において繁殖も確認された。

茶臼山においても2007年頃から確認

されるようになり、徐々に数を増やしている種であり、賑やかな鳴き声は、他の種を圧倒している。当地では夏鳥であり、多数繁殖している。冬期は、標高の低いところへ移動する。

コマドリ



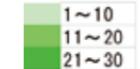
| 年次/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |

マミジロ



| 年次/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |

ソウシチョウ



| 年次/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |

と思われるが、ソウシチョウの侵入、増加も関係あるものと考えられる。

今後も本種の増加は他種への悪影響が懸念される。(小嶋 良武)



16 闇苧 (くらがり) — 山林 —



1 調査地について

くらがり溪谷は、本宮山県立自然公園の南西部に位置し、矢作川水系男川の源流になっている。自然が豊かなくらがり溪谷は、「岡崎観光きらり百選」と「岡崎・水とみどりの森の駅」に指定されている。

溪谷に沿って標高 789m の本宮山の山頂や砥鹿神社の奥の院へと続く登山道は、一般車両の乗り入れが禁じられており、ハイキングや森林浴、川遊びなど、自然そのものに親しんだり、楽しんだりすることができる。

溪谷内には、バンガロー村、テント村コテージ、ログハウス、デイキャンプもできるバーベキュー場などの施設が充実

しており、マス釣りやマスつかみなどの川遊びやハイキングなどを中心としたアウトドアが楽しめる人気のスポットになっている。また、くらがり紅葉まつり、くらがり感謝祭、自然観察会などのイベントも開催されている。

くらがり溪谷の四季を通じた魅力の多様さ、四季折々の溪谷美には定評があり、春は新緑と野鳥の囀り、夏は涼しい清流とカジカの鳴き声、秋は溪谷を赤黄に染める紅葉、冬には富士山、御嶽山、南アルプスの山々を眺めることができる。

また、本宮山の山頂付近からは豊橋平野、渥美半島、三河湾を一望することが

できる。

くらがり溪谷の登山口から本宮山にかけての山林は、スギ・ヒノキが植林された人工林が多くを占めているが、溪流沿いや岩場にはアラカシ、シラカシ、ヤブニッケイ、ヤブツバキなどの常緑樹や針葉樹のアカマツ、落葉広葉樹のコナラ、イロハカエデ、コハウチワカエデ、シラキなどが分布している。この付近の谷間の崖にはシシランの群落、岩の下の斜面にはサンショウソウ、ヤマアイ、ワサビ、イヌショウマなどが見られ、溪流の岩にはカタヒバなどの群落が見られる。また、野生生物が数多く生息し、ニホンザル、ニホンジカ、ムササビなどの姿をよく見かける。近年は国の特別天然記念物であるニホンカモシカの生息も確認されている。

調査ルートは、くらがり溪谷の登山口から約 800m の所にあるくらがり山荘から一ぜん飯休憩所までの約 3km の登山道

で、標高約 270m から 490m にかけての区間で、約 220m の標高差を溪流沿いにゆるやかに登って行く。

調査担当者は、1983 年からの 11 年間は、くらがり山荘で働いていた故菅沼高吉氏が担当し、その後は、くらがり溪谷を学区とする岡崎市立宮崎小学校で、愛鳥活動の指導を行ってきた筆者が引き継ぎ、現在に至っている。

この区間に大きな環境の変化はなく、溪流の水音のために野鳥の鳴き声が聞き取りにくい場所もあるが、どこの地点でも同じような種類の野鳥を観察することができる。

この調査では、23 科 46 種類の野鳥を確認している。主にキセキレイ、カワガラス、ミソサザイなどの溪流の野鳥とシジウカラ、ヤマガラ、メジロ、カケス、ヒヨドリ、ホオジロ、オオルリなどの山林の野鳥を観察することができる。



場所：岡崎市

観察された主な野鳥

ツツドリ、コゲラ、カケス、ヤマガラ、シジウカラ、ヒヨドリ、メジロ、ミソサザイ、カワガラス、ルリビタキ、キセキレイ、アオジ

地図：国土地理院の電子地形図（タイル）より



2 間苳における特徴的な変化

1983年度から2016年度までの調査期間中に調査ルートを含めた本宮山付近では、次のような環境の変化が見られる。

- (1) 手入れの行き届かない荒廃した山林が目立つようになり、山林全体の保水能力と地力が低下している。
- (2) ニホンジカの増加が植生に変化を与え、自然環境のバランスを崩している。
- (3) アカマツに松枯れの被害が出ている。

このような環境の変化は、間苳の野鳥の生息や分布にも影響を与えている。

最も特徴的な変化は、溪流で見られる野鳥の種類と個体数の減少である。山林の保水能力の低下により、降水後の溪流の水量は一気に増加する半面、普段の水量が減少したために水深が浅くなってしまい、野鳥の餌となるカワゲラやトビゲラなどの水生生物やサワガニなどが減少した。そのために、セグロセキレイやキセキレイの個体数も減少した。

現在では、溪流内の岩の上で尾羽を上下に振ったり、餌を求めて岩から岩へと忙しそうに動き回ったりするキセキレイ、溪流に沿って飛び、溪流を潜って餌を探すカワガラス、美しい囀りを響かせるミソサザイを見かけることができる。

調査を開始した頃には分布していなかったアオサギやカワウを観察できるようになった。アオサギとカワウの全体的な個体数の増加の影響もあり、渓谷内で養殖しているニジマス求めてアオサギが飛来するようになった。また、矢作川水系男川に沿ってカワウがくらがり渓谷まで飛来するようになった。

シジュウカラ

シジュウカラは1983年の調査開始からずっと観察されている鳥であるが、2016年までの間に見られる頻度は増えているものの、数はほとんど変化がないようである。

シジュウカラ

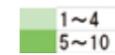


| 年度/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |

キセキレイ

溪流の環境の変化によるものなのかキセキレイは2007年を境にそれ以前は5羽以上観察できた月が年数回あったものが、以降はほとんど5羽未満の観察となり明らかに減少している。

キセキレイ

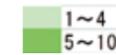


| 年度/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |

ミソサザイ

ミソサザイは調査開始から現在に至るまで、ほぼ観察数5羽未満の元々数の少ない鳥であるが、5羽以上の観察があった時期は1994年より前のみであり、減少傾向にある。(荻野真市)

ミソサザイ



| 年度/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |



17 段戸裏谷 (だんどうらだに) — 山林 —



1 調査地について

調査地「段戸裏谷」は、北設楽郡設楽町地内の西部に位置する。樹齢 200 年以上のモミ・ツガなどの常緑針葉樹に、ブナ・ミズナラなどの落葉広葉樹を交えた冷温帯林である。特に、モミは樹高 30m に達し、ミズナラは樹幹周り 5m にもなる大木が林立する。林床は、一面にスズタケが自生し、太平洋側ブナ・スズタケ群団を形成している。県内最大級の原生林で、自然林は愛知営林署の 39～44 林班で約 156ha、モミ・ツガ植物群落保護林は約 14ha である（設楽町誌，1996）。その標高範囲は 900m～1,100m で、駐

車場付近は 917m である。調査コースは、駐車場東側の歩道から開始し、約 200m 歩くと県道 365 号線と合流する。県道を南へ約 200m 進むと、右手に自然観察路入り口の案内板がある。さらに観察路を約 2km 歩くと、東西を横切る車道（林道）の五六橋に出る。その車道を西に 500m 進み、再び自然観察路に入る。北西に約 1.2km 歩くと寧比曾岳方面へ続く東海自然歩道と合流する。その方向へ約 1km 進むと、原生林との境で、スギ・ヒノキの植林地になる。ここで U ターンし、東海自然歩道を約 1.3km 戻ると、再び車

道に合流する。車道に出たら東へ約 1km 行き、「車両通行禁止」のゲート脇を約 100m も歩くと、左手に段戸湖を望む。さらに約 300m 進むと、開始地点に到着する。調査時間は約 5 時間である。

調査は 1972 年 5 月から実施し、現在も継続中である。45 年間に記録された野鳥は、16 目 37 科 108 種だが、筆者が観察していない種が 2 種含まれている。1995 年 5 月 7 日に段戸湖にてキアシシギ 1 羽が倉多利通、清水正義両氏によって観察、撮影された。1983 年 6 月 23 日にオオコノハズクが落鳥し、柿本浩氏によって拾得された。筆者作成の目録にはハヤブサとヒメアマツバメの 2 種も加えたが、証拠写真等の情報不足のために除外する。

確認種の中で 1 回だけの記録を列挙すると、以下の種が挙げられる。マガモ、

ミコアイサ、カイツブリ、オオハム、カワウ、ゴイサギ、ダイサギ、ササゴイ（2017 年 9 月 9 日）、アオシギ、キアシシギ、オオコノハズク、サンコウチョウ、アカモズ、ホシガラス（落鳥）、キレンジャク、スズメの 16 種である。うち、8 種は水鳥で、湖があることにより、県内奥地の森林でも飛来する。特筆に値する種としては、1994 年 5 月 4 日にオオハムが渡来し、29 日まで留まる。その間に冬羽から夏羽へと換羽した。（愛知県 1995）。スズメはおもに、住宅地に生息するが、1973 年 3 月 5 日に 1 羽を確認する。今では考えられないが、当時は営林署の社宅や田峰小学校裏谷分校、それに民宿もあり、その敷地内である。現在は、社宅と民宿は無となり、分校跡地は豊川市の宿泊施設が建った。

場所：北設楽郡設楽町

地図：国土地理院の電子地形図（タイル）より

観察された主な野鳥
 キジバト、アオバト、ホトトギス、ツツドリ、トビ、ノスリ、カワセミ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、アオゲラ、サンショウクイ、モズ、カケス、ハシブトガラス、コガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、イワツバメ、ヒヨドリ、ウグイス、センダイムシクイ、メジロ、ゴジュウカラ、ミソサザイ、クロツグミ、コルリ、キビタキ、オオルリ、キセキレイ、アトリ、マヒワ、イカル、ホオジロ



2 段戸裏谷における特徴的な変化

オオアカゲラ

オオアカゲラは周年生息し、調査開始の1972年から毎年記録している。最多数は4羽で、数つがいが生息していると思われる。アオゲラ、アカゲラ、コゲラも生息し繁殖する。地鳴きはコゲラを除き、甲高い声でキョッキョッと鳴くが、アオゲラはキャラキャラとけたたましく鳴き、また、ピョーと澄んだ声でも鳴くので、声による識別は可能である。問題はアカゲラとオオアカゲラで、2種の地鳴きは極めて似ている。強いて言えば、オオアカゲラは体長で約5cm大きい分、力強く聞こえるが、あくまでも主観的な判断である。したがって、データは姿による記録である。ドラミングは1月から聞かれ、4～6月の繁殖期には頻りに聞かれる。オスは立ち枯れした樹幹の先端部でドラミングをおこなう。時には上下に移動しておこなう。その時は気のせい、音の響きに違いを感じる。営巣木はモミ、ツガ、ブナ、ミズナラ、ハリギリを記録している。

キバシリ

県内におけるキバシリの生息地は、極めて限られる。確実な生息地は本調査区のみと思われる。初確認は1973年7月8日で2羽を観察した。1975年4月20日には偶然にも、リョウブの地上約3mの樹洞で育雛中を観察した。雛の数は不明だが、親鳥は嘴に何匹も昆虫をくわえては給餌を繰り返した。写真による確認だが、昆虫の多くはガガンボのような双翅目であった。1975年4月26日には、近くのモミの樹幹に、巣立ち雛1羽を確認した。この記録から、繁殖期は3月下旬から4月下旬で、囀りは2月中旬ごろから聞かれる。

個体数は非常に少なく、ランダムに年間数回記録される程度である。2016年2月23日にはオス3羽を記録した。全て

囀っていたので、数つがいが生息していると思われる。

コマドリ

コマドリは、どの夏鳥よりも早く4月上旬に渡来する。谷間から響き渡る囀は、今年も渡ってきたかと感慨深いものがある。

オオアカゲラ



1~3
4~5

| 年度/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |

月毎の個体数の推移では、1980年代までは二桁も記録されていたが、1990年代から一桁になった。減少傾向はさらに強くなり、2010年以降は1羽～3羽と激減した。要因としては、本調査地の環境悪化等、幾つか考えられるが、詳しくは分からない。2010

キバシリ



1~3

| 年度/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |

年頃から野鳥撮影者が急増し、時には50人をはるかに超える。極めて限られた種、つまりミソサザイ、コルリ、コマドリが被写体となり、餌付けや囀りのテープまで流されるのは問題である。

(緒方 清人)

コマドリ



1~4
5~10
11~14

| 年度/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |



18 鍛冶屋敷 (かじやしき)

— 山林 —



1 調査地について

調査地「鍛冶屋敷」は、愛知県の北中部に位置している。昔は東加茂郡小原村であったが、現在は豊田市になっている。

調査地までのアクセスは、公共交通機関の場合は豊田市駅からおいでんバス小原豊田線上仁木行きで約1時間である。乗用車利用の場合は猿投グリーンロード中山IC、または東海環状自動車道豊田藤岡ICより国道419号を瑞浪方面へ約25分である。冬季は道路が凍結することがあるので、冬用タイヤでの走行となる。道路は結構アップダウンがある。

鍛冶屋敷は豊かな自然と文化に恵まれ

たところである。春にはミツマタ、初夏にはササユリ、秋には紅葉や四季桜など、四季折々の草花や鳥の囀りが私たちを迎えてくれる。

調査地は矢作川の上流になる百月ダム付近から小原の市場までである。約2時間の徒歩調査となる。

百月ダムは、矢作川が堰堤でせき止められていて、大きなダム湖のようになっている。堰堤にある管理事務所の横からは、対岸の淵の入り込んだところに、冬季はオシドリがペアで休んでいるところが観察できる。また、対岸から湖面に出

ている木の枝にヤマセミが止まっていることがある。時にはダム湖の湖面の上を飛翔することもある。矢作川にかかる橋の上からダム湖の堰堤方向や橋の下を見ると、カワセミやカワガラスの飛翔を観察できることもある。

岩倉から坊洞間まではかなりの坂道で勾配があり、カーブもある。冬季はジョウビタキ、ルリビタキや時にはベニマシコを見ることがある。以前はウソ、マヒワ、カシラダカ、ミヤマホオジロが普通に観察できたが、近年はほとんど見ることができなくなった。夏季には、キビタキ、ヤブサメ、オオルリ、センダイムシクイ、サンコウチョウ等の囀りを聞くことができる。また、サシバがピックイーピックイーと鳴きながら飛翔しているのが観察できる。集落へ入るところは里山となっていて、田畑があり、カエルやヘ

ビがたくさんいるので、サシバの餌場になっていると思われる。秋には幼鳥も観察されているので、おそらく繁殖しているのだろう。また、2015年頃から、夏季にはサンショウクイも確認できるようになった。

さらに田代川沿いに歩くと、夏季にはサンコウチョウの囀りを聞くことができる。秋の渡りの時期には、ノビタキ、ハチクマ、アマツバメを見ることがある。

2 鍛冶屋敷における特徴的な変化 オシドリ

オシドリはほぼ毎年冬季に渡来している。1990年代前半で40羽前後が最大となり、その後は10羽前後に減少している。

ヤマセミ

ヤマセミは2000年代までは周年確認



場所：豊田市

地図：国土地理院の電子地形図（タイル）より

観察された主な野鳥

オシドリ、ホトトギス、サシバ、ノスリ、カワセミ、ヤマセミ、アオゲラ、サンショウクイ、サンコウチョウ、ヤマガラ、ヤブサメ、センダイムシクイ、カワガラス、シロハラ、ツグミ、ルリビタキ、ジョウビタキ、キビタキ、オオルリ、ベニマシコ



19 香嵐溪 (こうらんけい)

— 山林 —



1 調査地について

調査地「香嵐溪」は、豊田市足助町にある矢作川の支流巴川がつくる渓谷である。春は新緑、秋は紅葉の名所として、県民に親しまれている。当地は足助鳥獣保護区 328ha(1967 年指定)のうち、特別保護地区 35ha(1968 年指定)の区域内にある。また、足助鳥獣保護区全域は、愛知高原国定公園の特別地域に指定されている。

調査は 1974 年から始まり、2010 年に調査員の交代があり 42 年が経過した。当地は前述のように、鳥獣保護区特別保護地区に指定されていることから、樹木などの成長による変化はあるものの開発によ

る大きな環境変化は見られない。一方で、観光地として、客を増やすための施策や橋の新增設、ライトアップ、イベントの増加、間伐や草刈りの促進、拡声器による放送など、観光地ゆえの問題があると指摘されている。

当地は秋の紅葉の他に、飯盛山の春のカタクリの花が有名で、県内だけでなく近県からも多くの観光客が訪れる。夏は川遊びの人たちで賑わい、釣人も入る。しかし、これらの時期を除けば訪れる人は多くない。

調査コースは、国道 153 号線の足助大橋の巴川右岸を起点に、上流の香嵐溪

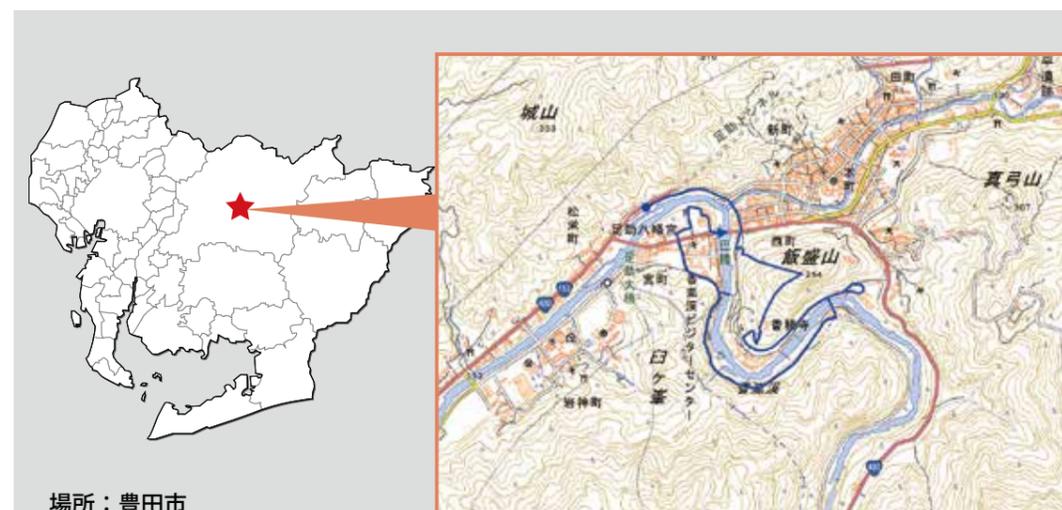
に向かう。西町駐車場から飯盛山(標高 254m)に登り、香積寺に下り、上流の一の谷へ行き、そこで引き返す。吊り橋(香嵐橋)を渡って左岸を下り、足助八幡宮を通過して巴橋を終点とする。このコースは巴川、飯盛山、香積寺の参道、足助八幡宮の境内など変化に富んだ環境で、「山野の鳥」と「水辺の鳥」の両方の野鳥が観察できる。

巴川にはカルガモ、カワセミ、カワガラス、キセキレイ、セグロセキレイなどが周年生息し、ヤマセミも姿を見ることがある。夏季にはイワツバメが巴橋の橋桁で毎年繁殖する。冬季には足助八幡宮の裏にオシドリ、マガモが飛来する。飯盛山などでは、コゲラ、シジュウカラ、ウグイス、エナガ、メジロ、イカルなどが周年生息し、夏季はサンショウクイ、キビタキ、オオルリなど、冬季にはシロハラ、ルリビタキ、ジョウビタキ、アオジなどが観察できる。また年によってはアトリ、マヒワの大群に出会うこともある。

2 香嵐溪における特徴的な変化

43 年間の調査で、14 目 35 科 96 種の鳥類を記録した。他に外来種 3 種を確認している。記録種の 96 種を便宜的に「山野の鳥」と「水辺の鳥」の 2 つに分類して比較すると、山野の鳥が 79%、水辺の鳥が 21%となる。当調査地には巴川が流れているが、山に挟まれた渓谷となっているため山野の鳥が主体であり、調査地のカテゴリーは山林となっている。

当地の代表ともいえるカワガラスとキセキレイに大きな変化は見られない。カワガラスは絶滅危惧種に選定(レッドリストあいち 2015 の絶滅危惧Ⅱ類)されており、観光地という環境で、普通に観察できることは貴重である。両種とも、ここでの繁殖が確認されている。一方、香嵐溪を流れる巴川のシンボルともいえるヤマセミは、1991 年頃から年に 1~2 度しか観察できなくなり、最近ではさらに観察回数が少なくなった。



場所：豊田市

地図：国土地理院の電子地形図(タイル)より

観察された主な野鳥

オシドリ、マガモ、カルガモ、アオサギ、トビ、カワセミ、ヤマセミ、コゲラ、サンショウクイ、カケス、ハシブトガラス、ヤマガラ、シジュウカラ、イワツバメ、ヒヨドリ、ウグイス、エナガ、メジロ、カワガラス、シロハラ、ルリビタキ、ジョウビタキ、キビタキ、オオルリ、キセキレイ、セグロセキレイ、アトリ、カワラヒワ、マヒワ、イカル、ホオジロ、アオジ



カワウは1989年に初めて観察され、わずかであるが観察回数が増えてきた。アオサギは1991年に1羽が初めて観察された。その後は年々、観察回数が増えて、最近では周年観察されるようになった。ダイサギも2008年から飛来するようになったが、これらとは逆にコサギは1998年を最後に見られなくなった。近年、大型魚食性の鳥は分布拡大が続き、小型魚食性の鳥は分布縮小が続いていると言われており、当地でも同様の傾向がみられる。

夏鳥のサンショウクイは、全国で増加していると言われており、当地では顕著な増加はみられない。キビタキも増加していると言われており、当地でも2004年頃から増加傾向にある。オオルリは全国と同様に顕著な変化は見られない。

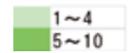
クイタダキ、ヒガラの両種とも針葉樹を好む森林性の野鳥で、当地では冬鳥である。調査が始まった1974年から10年間は、よく観察されたが、その後、徐々に数を減らし、クイタダキは1994年を最後に姿を消した。ヒガラは1992年以降、姿を消していたが、2015年に1羽観察された。

2006年にオシドリとハクセキレイの繁殖と思われる行動を確認した。オシドリは、4、5月の調査でペアを観察し、翌6月の調査で、4羽を連れた6羽の家族を観察した。ハクセキレイは5月の調査で、開放型の貸駐車場の鉄骨に出入りする所を確認し、翌月雌雄を観察した。オシドリは1984年から観察されるようになった。ハクセキレイは1986年～1992年に観察されて以来、記録がなかったが、両種とも2006年以降は、ほぼ毎年観察されている。

イソヒヨドリは、通常海岸部で観察される種であるが、近年山間部に近いところで

も観察されるようになってきている。当地でも2013年に初めて足助八幡宮の境内で雄を観察、2016年にも観察した。調査地内ではないが、隣接する巴川支流の足助川を流れる街中で、餌運びと幼鳥を観察した。巣は確認していないが、この街

カワガラス



| 年度/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |

で繁殖したものと思われる。

外来生物法の特定外来生物に指定されているソウシチョウは、2007年に初めて観察され2009年は観察されなかったものの、その後、毎年観察されている。観察時期は11月から翌4月で、今のところ

キセキレイ



| 年度/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |

繁殖は確認されていない。当地にはウグイスが多数生息しており、営巣環境が似ると言われているので、今後の動向に注視していく。

(加藤 正人)

キビタキ



| 年度/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |



20 栗代 (あわしろ)

— 山林 —



1 調査地について

調査地「栗代」は、東三河の東栄町の北端に位置し、標高 400 m 前後、大千瀬川の上流部の民家が点在する県道沿いの山間部である。

名古屋方面からは 3 時間程かかり、交通のアクセスは悪い。

調査は 1983 年から実施されている。

周辺の山地は、大部分がスギ・ヒノキの植林地であり、川沿いの調査ルートは、川の畔のわずかな田んぼや畑も、休耕で荒れたり、植林されたりしている場所で、鳥類の生息数は少ない。

キセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、キジバト、シジュウカラ、スズメ、ハシボソガ

ラス、ハシボトガラスなどが周年生息し、冬季にはツグミ、シロハラ、ジョウビタキ、カワガラスなどが観察される。

調査区分は山林であるが、調査地は民家が点在する県道沿いで、放棄田などがあり、いわゆる山地とは様子が異なる。

調査地周辺地域の広い範囲では、ホトギス、ツツドリ、サンショウクイ、アカゲラ、アオゲラ、カケス、メジロ、コサメビタキ、キビタキ、オオルリ、イカル、ノスリ、オシドリなど、山林を主な生息地として利用する種が繁殖している。

ハチクマ、ヤマセミも見られ、ヨタカ、トラツグミ、クロツグミ、コマドリ、ビンズイ、アカ

シヨウビンなどの声が聞かれることもある。

冬季はハイタカ、キクイタダキ、コガラ、ヒガラ、ゴジュウカラ、カヤクグリ、アトリ、マヒワ、ウソ、クロジなども見られることもある。

調査ルートも短く、観察視野も限られているために、周辺で繁殖しているオシドリ、ミソサザイ、ヤブサメなど山林を利用している多くの種が抜け落ちている。

調査地を変えれば、山地の山林の鳥類の生息状況を把握出来ると思われる。

里山、山地、水辺という環境区分で分類し比較するのであれば、それに相応しい場所が必要であろう。

周辺地域では、外来生物法の特定外来生物であるソウシチョウも観察されている。藪の中で営巣するために、同じように藪で繁殖するウグイスなどに悪影響があることが知られている。営巣場所にカケスなどの捕食者が誘引されるなどの事例も知られ、近年の爆発的な個体数の増加が、在来種に影響を与えている可能性が

指摘され、鳥類相が変化しているとの報告もあり危惧される。調査地を含め、周辺地域の今後の生息状況を把握していくことが必要である。

近年周辺地域を含め、ニホンカモシカは従来から見かけていたが、ニホンジカとツキノワグマが高頻度で見られる様になっている。後者の 2 種は増加してきていると思われる。

定量的な調査以外にも、鳥類調査の折りに観察状況を収集して、動向を把握していくことが必要である。

ただし、増加という単純な数字だけで判断して、駆除という人間の奢った行為に直接結びつかないように願いたい。

当地域は、冬季、道路が凍結している場合も多く、特に夜間や早朝の移動には注意が必要である。

本調査は、直接の目視観察が主な調査方法であるが、種の生態により確認頻度が異なるため、それぞれに適した調査方法を取らなければ、正確な状況を把握することは難しい。





2 粟代における特徴的な変化

ヒヨドリ

ヒヨドリは1983年の調査開始から、2016年現在に至るまで1～10羽程度観察されている鳥である。原因は不明であるが2004年から2010年の間に数が増加し、その後元に戻っている。

ヒヨドリ

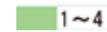


| 年度/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |

カワガラス

カワガラスが良く見られたのは1988年までで、それ以降は全く見られないか冬期に見られるのみである。

カワガラス



| 年度/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |

キセキレイとセグロセキレイ

主に水辺で見られる鳥であるキセキレイやセグロセキレイは2003年までは5羽以上の数が見られることがあったが、以降

は5羽未満の数しか見られずどちらも減少傾向にあるようである。

(天野 弘朗)

キセキレイ



| 年度/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |

セグロセキレイ



| 年度/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|----|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | </ | | | | | | | | |



21 県民の森 (けんみんのもり) — 山林 —



1 調査地について

調査地「県民の森」は、新東名高速道路新城ICより北東の方向に約15kmの新城市内（鳳来地区）にあり、JR飯田線三河槇原駅から徒歩約15分と比較的交通の便も良く、面積は572ha、沢山のハイキングコースがあることから、自然観察やキャンプ、ハイキングなどレクリエーションの森として広く親しまれている。最近では、トレイルランニングをする人をよく見かける。地形は急峻で標高120m～730m、川沿いには安山岩の岩脈、風穴、雨樋なども見られる。この辺りは亀石の滝、蔦の滝なども見られる鳳来溪と呼ば

れる溪谷で、火山岩からなる白い河床が新緑や紅葉を引き立ててくれる。また、生活と樹木、県の木、外国樹種などの展示林も整備されている。ハイキングコースは全長30kmで、植物では季節ごとに、春はホソバシャクナゲ、初夏にはホウライジユリ、秋にはもみじ、ハナノキなどの紅葉が見られる。山の7割はスギ、ヒノキ、マツで、3割がカシ、シイ等の常緑広葉樹である。哺乳類では、ニホンザル、カモシカ等が見られ、ツキノワグマも最近では、目撃されている。

県民の森は、1967年から50年間調査が続けられている調査地である。

調査区域は、県民の森駐車場を起点とし、森林学習館、多目的広場、宿泊施設「モリトピア愛知」を経て、いったん木和田林道をおしどり池まで行って戻り、再び大津谷川沿いを大芝生広場、県の木展示林、かえで展示林、木材生産展示林などを経て、明治百年広場までの片道約3.5kmである。2017年春に駐車場の大木が伐採されたり、部分的なエリアが伐採されているが、全体的には自然環境はよく保たれている。

春には、オオルリ、キビタキ、センダイムシクイなどの夏鳥の姿を見たり、囀りをあちこちで聞くことができる。

また、ウグイスの囀りがあちらこちらから聞こえてくる。

夏は少なくなるが、カワラヒワ、セキ

レイ類、カラ類が見られる。

秋から冬では、ジョウビタキ、ルリビタキ、シロハラなどが観察される。

年間を通して、ヤマガラ、シジュウカラ、エナガ、コゲラ、ヒヨドリ、メジロなどよく見られる。

特に、シジュウカラ、ヤマガラ、エナガ、メジロ、コゲラの混群にしばしば出会う。

かつては少なかったサンショウクイは近年、確認する機会が増えている。稀に、ミヤマホオジロ、クロツグミ、カワガラス等が見られ、楽しみとなっている。

水鳥はカルガモ、カワセミ、サギ類が稀に見られるのみである。

猛禽類では、トビ、オオタカ、サシバ、ノスリの記録はあるが、クマタカについては、この周囲の山間部では確認されるが、県民の森では現在まで記録はされていない。



場所：新城市

地図：国土地理院の電子地形図（タイル）より

観察された主な野鳥

キジバト、トビ、コゲラ、アオゲラ、サンショウクイ、ハシブトガラス、ヤマガラ、シジュウカラ、ツバメ、ヒヨドリ、ウグイス、エナガ、センダイムシクイ、メジロ、ルリビタキ、ジョウビタキ、キビタキ、オオルリ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、カワラヒワ、イカル、ホオジロ



2 県民の森における特徴的な変化

本調査地は名前のおり、森とハイキング道路と施設から構成されている。

代表的な鳥について考察してみると、まず、アオゲラの遠くから聞こえる「ピョー、ピョー、ピョー」という、他のキツツキとは違う声が思い浮かぶ。

姿を見ることは少ないが、調査記録ではコンスタントに記録がある。

同じく山の鳥としてカケスがいるが、1990年代と比較すると確認数が減っているように思われる。

春先の代表としては、オオルリがいる。5月～7月にかけて、木の先端で囀る姿をよく見かけることも多く、囀りを楽しむことができる。

一方で、確認することが少なくなったのはホオジロ類である。

特にここ2年ほどでは、ホオジロ、アオジ等の記録が少なくなってきたと感じる。

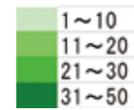
2009年以降、外来種のソウシチョウの声があちこちで聞こえ、群れを見ることが多くなっており、ほぼ年間を通じて観察される。以前は、藪の中の姿を見る程度であったが、現在では、道路上で餌をついばむ姿も観察するようになってきた。観察される場所も、特定の場所であったものが、駐車場から明治百年広場までの広範囲に広がってきたように感じる。

生息場所が競合すると思われるウグイスは、いたる所で春先の囀り、その他の季節の地鳴きと、姿を見ることは少ないが年間を通して確認できる。

1970年代と比べると確認数が減っているが、1980年代以降では大きく変化していないと思われる。

本調査地は、愛知公園協会が管理しており、「森林浴の森百選」・「水源の森百選」にも選定されていて、よく利用されている。

カケス



| 年次/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |

るが、比較的自然環境が保たれているエリアである。

今後も、四季折々、小さな子供から親

子、高齢者まで気軽にハイキングを楽しむことができ、野鳥にとっても生息しやすいフィールドであってほしいものである。

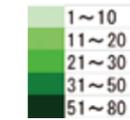
(小笠原 正博)

ソウシチョウ



| 年次/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |

ウグイス



| 年次/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |



22 古山 (こやま)

— 水辺 —



1 調査地について

調査地「古山」は、愛知県最南端に位置し、東西に伸びる渥美半島の先端部にある標高 85.7m の小さな山である。周りは岩礁海岸となっていて太平洋と伊勢湾に面し、山全体はヤブツバキやカクレミノ、トベラ、タブノキ、シロダモ、ヤブニッケイ、ヒメユズリハ、ハマヒサカキ、カラスザンショウ、ウバメガシなどで形成される照葉樹林に覆われている。

調査地内にある気象庁伊良湖特別地域気象観測所のデータによれば、年間平均気温 16.0℃ (名古屋と比べるとおよそ夏季は 1℃低く、冬季は 1℃高い)、年間降

水量 1,603mm と、温暖な海洋性気候である。ただし、秋から初冬にかけての季節風は強く、1日の平均風速が毎秒 10m を超える日がしばしばあり、体感温度はかなり下がる。

古山調査地は、古山と東に隣接する宮山 (標高 149.5m= 宮山原生林：国指定天然記念物を有する) と骨山 (標高 109.7m) の山麓を周るコースとなっている。国道 42 号線上の堀切信号から始まり、国道を西進する。さらに骨山山頂にあるビューホテルに至る側道に進入・往復し、国道に戻り、さらに西進して恋路ヶ

浜の駐車場に至る。そこからまた国道に戻り、伊良湖港の海岸線を辿り伊良湖魚市場から国道 259 号線に入る。国道を北進し伊良湖集落の北端で旧フラワーセンターに至る市道に折れ、田園地帯を横切り国道 42 号線に合流して調査開始地点に到達する。途中、日出園地の駐車場 (骨山山麓) とビューホテルの駐車場 (骨山山頂)、恋路ヶ浜の駐車場 (古山山麓)、伊良湖港、宮山北山麓が 30 分程度の定位観察地点である。それらを含め、調査時間は約 4 時間である。

調査地のカテゴリーは「水辺」となっているが、コース周辺には海洋、山地、耕地 (畑や水田) が含まれ、多様な鳥種が観察される。特に調査地は、外洋に面しているため、シロエリオオハムやカンムリカイツブリ、ウミウ、ヒメウ、オオミズナギドリ、クロサギ、クロガモ、ウ

ミアイサ、アカエリヒレアシシギ、カモメ類、アジサシ類、ウミスズメなど海鳥の出現割合が多い。更に、多くの鳥たちの春秋の渡りの移動のコース上に位置し、シーズンには、サシバやハチクマ、ノスリ、ツミ、ハイタカ、チゴハヤブサといったタカ・ハヤブサ類をはじめ、ツバメやヒヨドリ、ハクセキレイ、メジロ、カワラヒワ、アオジなどの小鳥が多数観察される。



場所：田原市

地図：国土地理院の電子地形図 (タイル) より

観察された主な野鳥

ウミアイサ、カンムリカイツブリ、シロエリオオハム、オオミズナギドリ、ヒメウ、ウミウ、ミツユビカモメ、ウミネコ、カモメ、セグロカモメ、ミサゴ、ハチクマ、トビ、ツミ、ハイタカ、オオタカ、サシバ、ノスリ、ハヤブサ、ウグイス、シロハラ、イソヒヨドリ、キセキレイ、ホオジロ



2 古山における特徴的な変化

古山は1992年に調査を開始した調査地で、調査自体は25年経過しているのみであるが、当地で調査以外でも野鳥観察は行ってきているので、可能な限りそれ以前の25年も振り返ってみたい。

この50年における調査地付近の環境変化は、豊川用水完成と共に、初立ダム完成、伊良湖ビューホテルオープン(1968)、恋路ヶ浜に駐車場整備(1973)、伊良湖岬付近の護岸工事(1988~1992)、伊良湖海上交通センター完成(2003)、伊良湖風力発電所完成(2005)と小中規模の開発があった。これらの野鳥への影響は不明であるが、調査地に隣接する初立ダム北側山林にカワウのコロニーが形成されたことから、その後、調査地内におけるカワウの出現が増加したものと推察される。人為的な開発以上に、渥美半島の山林を中心とした植物遷移(クロマツ、アカマツの1次林からシイやタブノキ、ヤブツバキなどの常緑広葉樹からなる2次林へ)が進んだことにより、ヤマガラやウグイス、ヒタキ類などの野鳥が増加傾向にある。さらに、地球規模の気候変動(温暖化)による渡り鳥への影響は、無視できないところまで進んでいるものと考ええる。

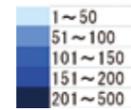
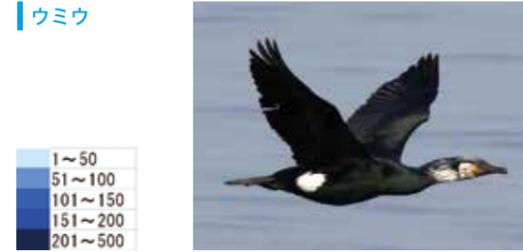
ウミウとヒメウ

いずれも海岸域で観察される種で、岩礁地帯を中心にねぐらを形成することが多く、本調査地の特徴的な種である。ウミウは、2011年までは、150羽~300羽と増減を繰り返しながらも安定していて、渡来数もそれほど大きな変化は見られなかったが、その後、激減し、20羽~100羽となっている。これは、2011年に発生

した東日本大震災の際の、津波によるウミウの繁殖地の崩壊によるものではないかと考える。

一方、ヒメウは年が明けると集結し始め、渡去直前の3月~4月には岩の中下段に隙間がないほど数を増す。ヒメウの

ウミウ



| 年度/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |

方は、渡来数に大きな変化は見られない。

シノリガモ

岩礁海岸を好む海ガモで、1980年代までは日出の石門付近の岩礁に10羽~20羽が冬鳥として定着していたが、

シノリガモ



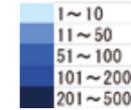
| 年度/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |

1990年代以降は定着することなく、ここで姿を見ることは稀となってしまった。

ミツユビカモメ

外洋性のカモメで、陸地からの観察はよほど恵まれないと、望遠鏡に捉えるこ

ミツユビカモメ



| 年度/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |



とは難しかったが、最近では古山周辺で観察例が増えてきた。渡去前には大きな群れを形成することもある。



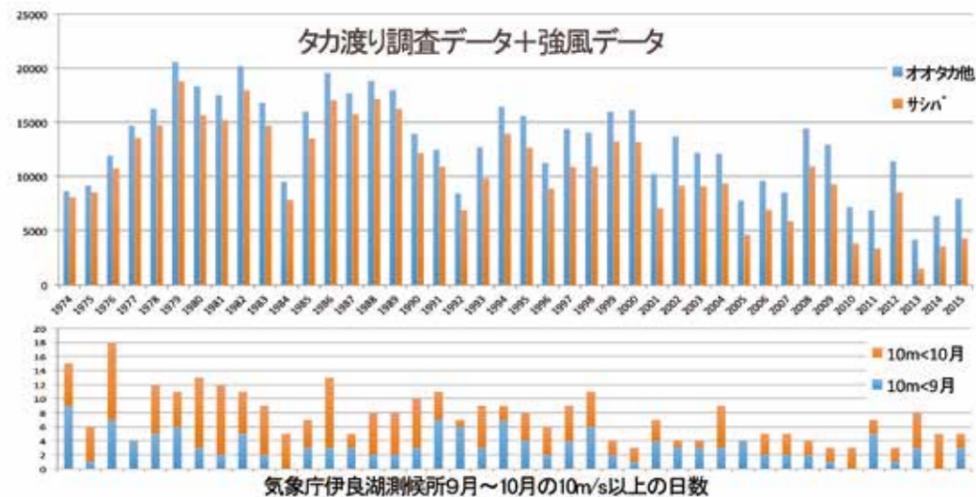
サシバ

古山付近での記録は、ほぼ春秋の移動個体である。本調査の記録では、本種の増減は語れないので、Web上に公開されている伊良湖岬の渡り鳥を記録する会の調査記録を基に、主に秋季の渡去数の減少について触れておきたい。

当地でのサシバの渡りは、1972年に緒方清人氏らにより再発見された。1974年から辻淳夫氏らにより渡去数の調査が行われ、その後、前記の「記録する会」に引き継がれた。それによると、1991年までは15,000羽前後が記録されていたが、それ以降になると10,000羽前後に落ち込んだ。2005年からは5,000羽前後と半減してしまい、2013年には1,500羽と過去最低の記録となっている。

昭和後期のサシバの渡去数の減少は、生息地とされる低山の開発と、エサ場となる水田の乾田化が大きな要因と考えられる。しかし、最近の地球規模の気候変動や温暖化により、9月下旬から10月上旬にかけて強い季節風が発生しないことが多々ある。

それにより地上のあちこちに大きな上昇気流が発生し、より高く上昇することが可能となり、その位置から直接対岸の紀伊半島をめざす集団が現れる。それらは、山などの吹き上げ気流が発生する地形を頼ることなく、海上等を通ると推測される。それは、サシバの群れが伊良湖岬上空を通過しないことを意味する。太古から、伊良湖岬で見られたサシバの渡り、更には多くのサシバが集まり渦を巻いて上昇する「鷹柱」が見られなくなるのは寂しい限りである。



ノスリ

秋季の記録は大部分が渡りの際の移動個体である。1980年代までは渥美半島では稀な鳥であったが、水田の乾田化や畑地化で、ノスリの好む環境が増えたためか、越冬個体は増加している。

ノスリ

1~10
11~50
51~100
101~200



| 年度/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |

ウグイス

松の1次林から照葉樹林への変遷が進んだこと、海岸域で竹林や笹林が増えていることから、増加傾向にある。以前は冬鳥であったこの種が、留鳥のカテゴリーになった。(渡邊 幸久)

ウグイス

1~4
5~10
11~14



| 年度/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|---|
| 1967 | | | | | | | | | | | | |
| 1968 | | | | | | | | | | | | |
| 1969 | | | | | | | | | | | | |
| 1970 | | | | | | | | | | | | |
| 1971 | | | | | | | | | | | | |
| 1972 | | | | | | | | | | | | |
| 1973 | | | | | | | | | | | | |
| 1974 | | | | | | | | | | | | |
| 1975 | | | | | | | | | | | | |
| 1976 | | | | | | | | | | | | |
| 1977 | | | | | | | | | | | | |
| 1978 | | | | | | | | | | | | |
| 1979 | | | | | | | | | | | | |
| 1980 | | | | | | | | | | | | |
| 1981 | | | | | | | | | | | | |
| 1982 | | | | | | | | | | | | |
| 1983 | | | | | | | | | | | | |
| 1984 | | | | | | | | | | | | |
| 1985 | | | | | | | | | | | | |
| 1986 | | | | | | | | | | | | |
| 1987 | | | | | | | | | | | | |
| 1988 | | | | | | | | | | | | |
| 1989 | | | | | | | | | | | | |
| 1990 | | | | | | | | | | | | |
| 1991 | | | | | | | | | | | | |
| 1992 | | | | | | | | | | | | |
| 1993 | | | | | | | | | | | | |
| 1994 | | | | | | | | | | | | |
| 1995 | | | | | | | | | | | | |
| 1996 | | | | | | | | | | | | |
| 1997 | | | | | | | | | | | | |
| 1998 | | | | | | | | | | | | |
| 1999 | | | | | | | | | | | | |
| 2000 | | | | | | | | | | | | |
| 2001 | | | | | | | | | | | | |
| 2002 | | | | | | | | | | | | |
| 2003 | | | | | | | | | | | | |
| 2004 | | | | | | | | | | | | |
| 2005 | | | | | | | | | | | | |
| 2006 | | | | | | | | | | | | |
| 2007 | | | | | | | | | | | | |
| 2008 | | | | | | | | | | | | |
| 2009 | | | | | | | | | | | | |
| 2010 | | | | | | | | | | | | |
| 2011 | | | | | | | | | | | | |
| 2012 | | | | | | | | | | | | |
| 2013 | | | | | | | | | | | | |
| 2014 | | | | | | | | | | | | |
| 2015 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 | | | | | | | | | | | | |



愛知県内での現状

ソウシチョウの原産地は中国南部からヒマラヤ山脈南西部であり、標高 1,000 ～ 3,000 m 程度で繁殖する。当時県内でソウシチョウの繁殖適地ではないかと思われていた環境で最初にソウシチョウが確認されたのは、2000年8月15日に設楽町段戸裏谷にて1羽が確認(緒方,2005)されたのが最初の記録であろう。以後、同調査地では繁殖期に個体数の急激な増加が認められており、現在もその数は県内で最も多い。

愛知県鳥類生息調査の資料によると、ソウシチョウは4～10月まで繁殖地に滞在していることが観察されている(愛知県,2017)。ただし、繁殖期の4・5月に確認された場所でも、その後は越冬期の11月以降まで確認されない例もある。とりあえず6・7月に確認されている場所を、ソウシチョウの安定した繁殖場所と推定して、最大数をグラフに赤色で表し、越冬期と思われる12・1・2月の最大数を、同一のグラフに青色で表した。なお、県内22箇所の調査地の中で、ソウシチョウの記録があり、グラフに表されていない調査地は、名古屋市千種区平和公園のみである。この平和公園では、2006年11月19日に1羽、2007年4月15日に5羽、2010年11月21日に2羽の3回記録されている。

ソウシチョウの繁殖分布については、2000年頃より標高 1,000m 程度の原生林や、二次林の環境で繁殖が始まり、その後の10年間でさらに標高の高い高原や、300m以下の低山まで繁殖分布を拡げてきた。その増加量をみると、段戸裏谷において最も顕著な増加がみられることから、標高が高く広葉樹の老齢木が多い原生林の環境がソウシチョウにとって、繁殖に最も適していることが推測される。

越冬については、茶白山や段戸裏谷等、積雪量の多い地域ではソウシチョウの越冬は困難であることが推測される。

積雪量が少ない標高 250m 以下の新城市県民の森では、2010年以降に越冬期と繁殖期に生息が確認された。県内における繁殖分布の標高が低下してきたのもこの頃と思われる。

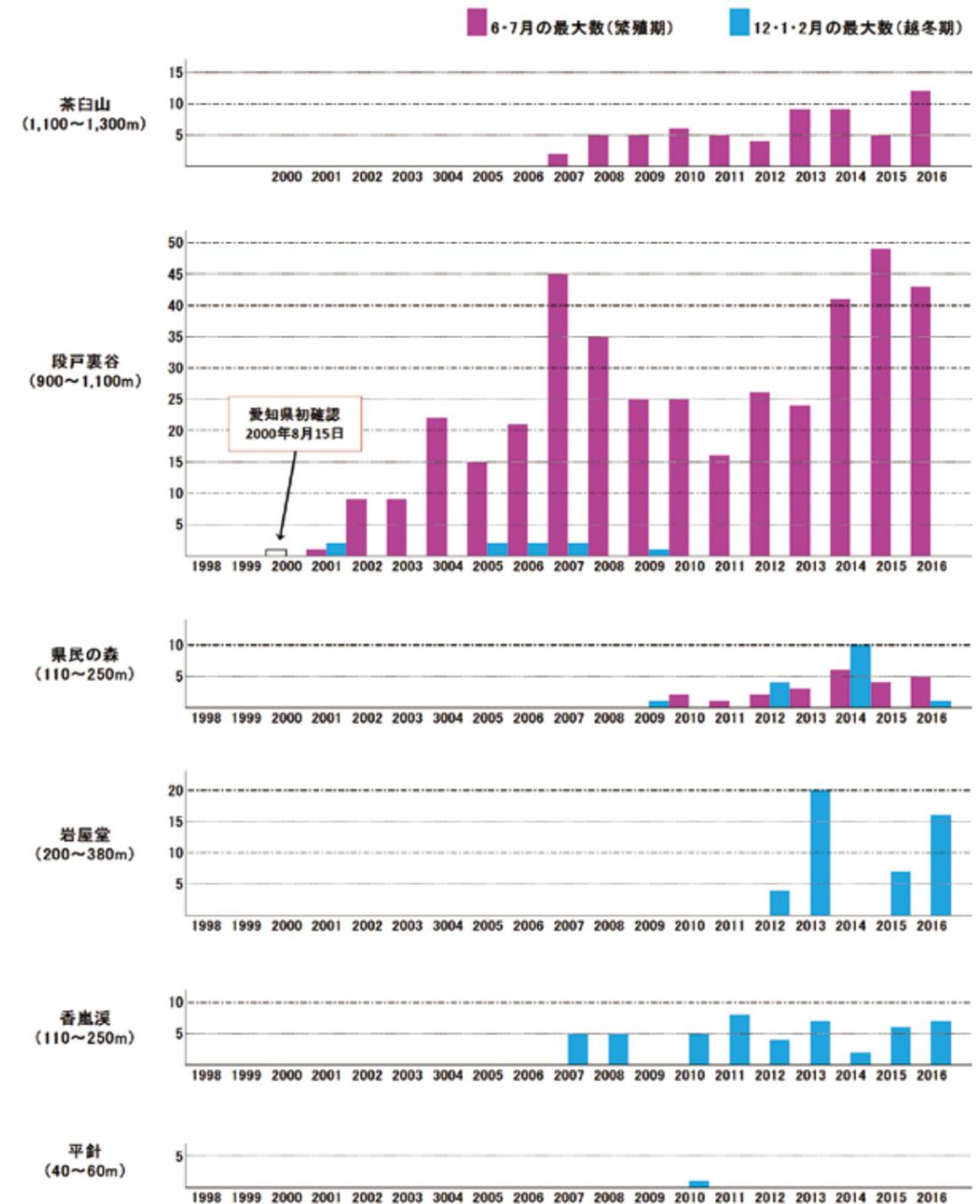
愛知県鳥類生息調査以外の確認記録をみても、県内におけるソウシチョウ本来の繁殖環境は愛知・岐阜・長野県境の三国山から寧比曾岳を経て、茶白山から離山に至る標高 700m 以上の東部山岳地帯に分布し、植生は原生林か二次林で林床に笹類の繁茂した環境である。この環境は、県内におけるコルリの繁殖分布にほぼ重なっている。

県民の森以外で、標高の低い場所における6・7月の確認記録は2014年に豊田市三河高原牧場1羽、2016年に豊田市下川口町で1羽、2017年に岡崎市木下町で8羽、同市小呂町で2羽、豊田市押井町で2羽、同市足助町で1羽となっている(筆者確認)。繁殖については、2017年5月6日に豊田市自然観察の森で、巣とヒナが観察されている(大熊私信)。

本来標高 1,000m 程度と思われていた繁殖場所が徐々に標高の低い場所へと拡大しており、現在では平野部近隣の丘陵地でも繁殖が確認されるようになった。

以前オーストラリア北東部で野鳥の観察をしたことがあるが、平野部から山の上の砂漠地帯まで、どこへ行っても移入種カバイロハッカの声が溢れていてウンザリした思いがある。同じく音色も多様で複雑な囀りではあるが、日本の里山にあの騒がしいソウシチョウの声は似合わないと思われる。

ソウシチョウの県内分布



(高橋 伸夫)



段戸裏谷での現状

今は亡き原田猪津夫先生から、1枚の写真を見せていただいた。設楽町田口で拾得された、ソウシチョウの死んだ落鳥個体であった。確か1998年8月だったと記憶している。これが、初めて目にするソウシチョウであった。前田茂雄氏は同年11月8日に豊田市で標識調査を実施され、4羽に標識された(前田, 1999)。このように愛知県に侵入した年は、どうもこのころと思われる。段戸裏谷で初めて確認されたのは、2000年8月15日の1羽ある。さらに9月に1羽、10月に6羽と記録している。2002年になると4～10月にかけて毎月記録され、最多で25羽を記録する。これを機に、毎年増加傾向にあり、2016年10月には125羽を記録する。2010年以降は月毎に40～60羽を、普通に記録するようになった。本調査区では優占種になったが、環境省の特定外来生物に指定されており、営巣場所が競合するウグイスやオオルリが駆逐される危険があり、危機を感じる。

本調査区における年間の推移は、極めて明白である。低山や都市近郊の雑木林等、暖地で越冬していた個体が繁殖のために一気に戻ってくる。遠くまで聞こえる囀りで、その存在を知る。クロツグミの囀りにやや似ているが、それよりも強くググッとカジェジェと濁った声も混ざる。非常に賑やかで、熊笹の中でも、頭上の枝を移動しながらも囀る。繁殖期は長く、9月中旬ごろまで続き、オスは10月の渡去寸前まで囀る。ウグイスも8月末ごろまで囀るを聞くこともあるが、秋期まで囀ることはない。11月になると記録されない年もあり、12月では過去4例しかない。厳冬期の1月は無く、2月と3月は1例だけである。

| 年度/月 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|------|----|----|----|----|----|----|-----|----|----|---|---|---|
| 2000 | | | | | 1 | | | | | | | |
| 2001 | | | 1 | | | 1 | 6 | | | | | |
| 2002 | 25 | 2 | 9 | 4 | 4 | 10 | 6 | | | | 2 | |
| 2003 | | 5 | 2 | 9 | 6 | | 1 | 6 | | | | |
| 2004 | 4 | 25 | 22 | 16 | 18 | 9 | 2 | | | | | |
| 2005 | | 12 | 15 | 10 | 23 | 6 | 4 | 14 | 2 | | | |
| 2006 | 18 | 5 | 16 | 21 | 25 | 5 | 11 | | 1 | | | 1 |
| 2007 | 18 | 11 | 22 | 45 | 31 | 16 | 39 | 6 | 2 | | | |
| 2008 | 13 | 23 | 20 | 35 | 39 | 43 | 23 | | | | | |
| 2009 | 29 | 31 | 22 | 25 | 35 | 34 | 39 | 2 | 1 | | | |
| 2010 | 34 | 36 | 25 | 23 | 27 | 43 | 35 | 1 | | | | |
| 2011 | 1 | 19 | 15 | 16 | 15 | 41 | 30 | 3 | | | | |
| 2012 | 19 | 21 | 26 | 21 | 29 | 26 | 20 | | | | | |
| 2013 | 18 | 35 | | 24 | 31 | 38 | 71 | 3 | | | | |
| 2014 | 49 | 54 | 36 | 41 | 52 | 69 | 32 | | | | | |
| 2015 | 23 | 32 | 26 | 49 | 58 | 69 | 76 | | | | | |
| 2016 | 42 | 33 | 43 | 35 | 52 | 66 | 125 | | | | | |

ソウシチョウの体色だが、オスは喉が橙色で目の周りが淡黄色である。腹部も淡黄色で、背と脇は灰色である。頭部は黄緑色で、初列風切の基部外縁が赤色で先が黄色である。メスの喉は黄色で、腹部は淡灰色である。目の周りは白っぽい灰色で、頭部は暗黄緑色である。一見オスよりも地味を感じる。雌雄とも嘴は鮮やかな紅色である(写真1)。



写真1 オス(左)とメス(右)
2006年4月14日撮影

2003年には古巣を、2004年・2005年と営巣を発見した。巣はお椀型で、スズタケの地上約1.9mの先端部である(写真2)。巣の外部は笹の枯葉をスギかヒノキの樹皮の内皮を糸状に裂いて、幾重にも絡める。稈(かん)も巻きつけるので、ぶら下がるような格好になる。産座はおもにシダ類の根で、密に敷き詰める。僅かだがコケ類とクモの卵のうも認めた。



写真2 スズタケに営巣したソウシチョウ
2015年8月7日撮影

ウグイスもスズタケに作るが、幾つかの相違点がある。巣は地上1m以下が多く、ボール形で入り口が側面にある。巣は数本の稈を利用し、ぶら下がるような格好にはならない(写真3)。巣の外部は笹の枯葉だが、糸状の根等はほとんど使用せず、もろい感じを受ける。産座も細い茎葉等だが、密な作りではない。



写真3 スズタケに営巣したウグイス
2015年7月13日撮影

2014年ごろから、スズタケに花が咲き、枯れ始めた。状況は年毎にひどくなり、2016年になると、すっかり林床が明るくなった。環境は一変したが、2017年3月12日に、モミの幼木の枝に古巣を発見した。地上約1.6mで、外部の巣材は笹ではなく、落葉樹の枯葉であった(写真4)。スズタケ以外で初めての発見である。



写真4 モミの幼木に作られた古巣
2015年8月7日撮影

2017年7月15日の調査時、ミヤコザサの茂みから1羽のソウシチョウが目前を横切った。飛び出した付近を両手でかき分けると、スズタケの地上約50cmの稈に巣を発見した。巣内には赤褐色の斑点のある卵が4卵あり、抱卵中のメスが警戒して飛び出したのだ(写真5)。このように低い位置の営巣は初見で、環境の変化に対しても順応性が高いと推測される。今後は、温帯林のスズタケだけではなく、低山・里山・丘陵地等の熊笹や木本類でも繁殖する可能性が高いと思われる。



写真5 スズタケの低位置で営巣したソウシチョウ
2017年7月15日撮影

(緒方 清人)

参考・引用文献

- 池田清彦(監), 2009. 外来生物事典. 463pp. 東京書籍, 東京.
- 緒方清人, 1995. (6) 段戸裏谷の野鳥, 愛知の野鳥. 233-243. 愛知県農地林務部.
- 緒方清人, 2005. 愛知県におけるソウシチョウの初繁殖, 西三河野鳥の会研究年報. 8:1-7.
- 柿澤亮三・小海途銀次郎, 1999. 巣と卵図鑑. 238pp. 世界文化社, 東京.
- 設楽町, 1996. 第4章 植物, 設楽町誌 自然編. 249-368.
- 前田茂雄, 1999. ソウシチョウの愛知県初標識記録について, 西三河野鳥の会研究年報. 2:19-20.



各調査地の状況

ウグイスの繁殖期は概ね4月から8月頃と思われ、5月下旬に巣立ちビナが確認されることもあるが、平野部の場合は5月に囀りが聞かれても以降確認がされない例が多い。ウグイスは巣立ち後も囀りが続き複数回繁殖するものと思われることから、6・7月を繁殖安定期としてその最大数をグラフに表した。

6・7月にウグイスの生息が確認されたのは県内22調査地点の中の19地点であり、これらを大きく4つの型に分けて解説する。(6・7月の数値が対象なので、1967年など調査の開始が10月の場合は当年の記録はない)

1. ウグイス本来の繁殖地である調査地

ウグイス本来の繁殖地であり、1960年代以前から現在までほぼ同一の範囲で繁殖していると思われる調査地として、「茶臼山」「段戸裏谷」「鍛冶屋敷」「県民の森」の4地点があげられる。「茶臼山」は牧場の周辺に二次林がありその下草にササの群落が広がる環境で、牧畜業は衰退したが環境は大きく変化せず、現在はスキー場を中心とした観光業が発展している。

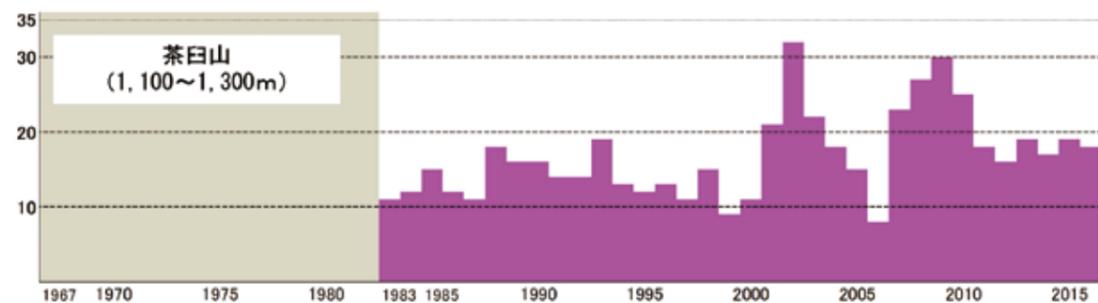
「段戸裏谷」は原生林で下草にササ類の群落があり、1980年代以降は10年程度の周期で生息数が増減しており、ウグイスの繁殖には安定した環境が保たれているが(1984年は6・7月の調査記録がなく5月20日の記録を充当)、2017年現在、調査地を含む周辺の山地ではスズタケが更新と思われる現象により広域に全て枯れている。今後ウグイスをはじめササ類に営巣する種の動向が注目される。

「鍛冶屋敷」は上部が集落と林、下部は矢作川の谷間である。ウグイスの数はゆっくり増加して2005年をピークに減少しているが、上部の林で送電線の敷設等による伐採など、植生に大きな変化があったことも考えられる。

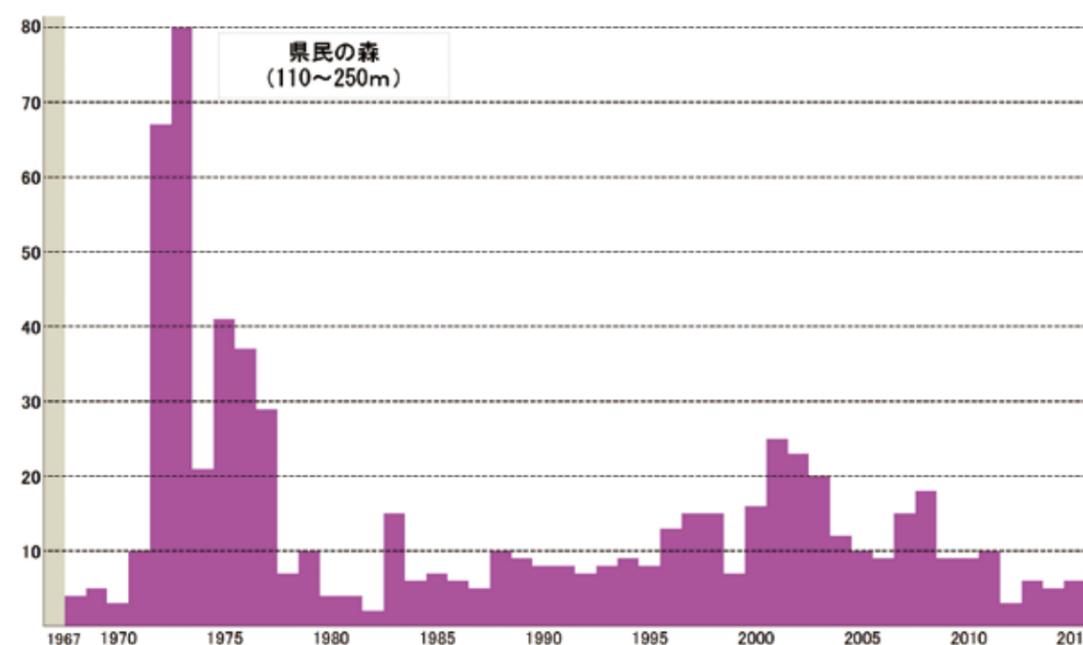
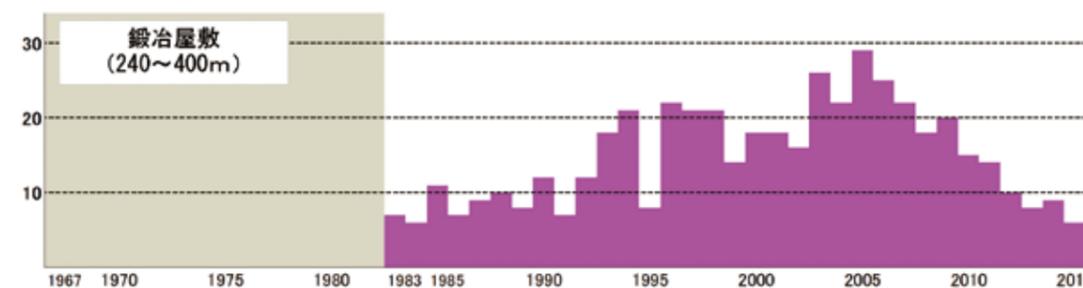
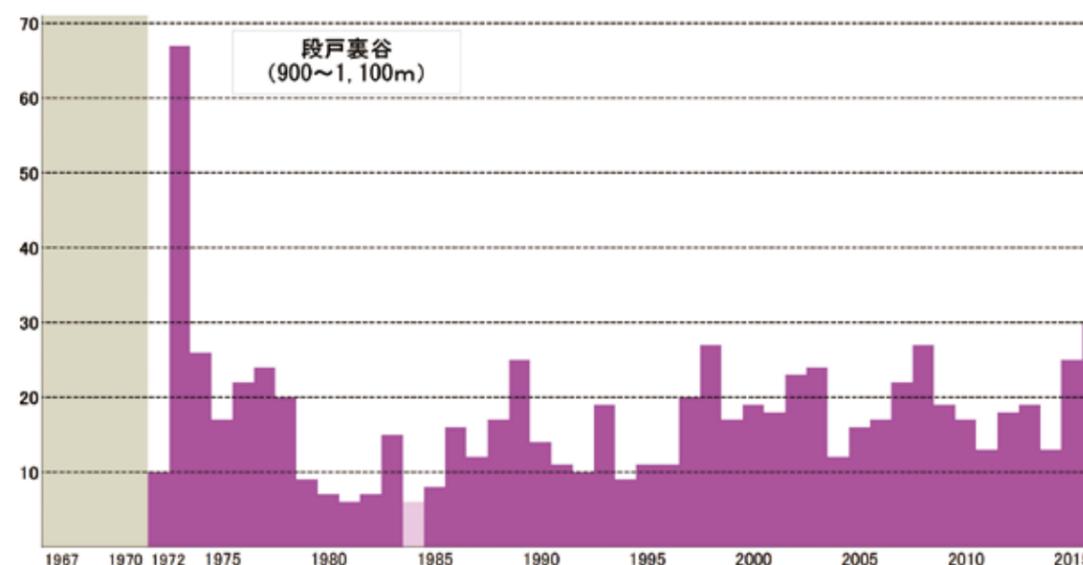
「県民の森」は標高が110~250mで愛知県におけるウグイス本来の繁殖標高より若干低いと思われるが、環境の良い東三河の山塊に位置することで以前よりウグイスの繁殖地であったものと思われる。

なお、「県民の森」では1972・1973年、「段戸裏谷」では1973年に他の年の最大数を大きく超える生息数が記録されており、他にもグラフはないが1972~1983年の間調査されていた「猿投山」でも1973年をピークに1976年以降の3倍程度の生息数が確認されていることから、県内の山地ではこの頃の繁殖期にウグイスが異常に多く生息したようである。

ウグイスの繁殖期における県内分布 (6・7月の最大数)



ウグイスの繁殖期における県内分布 (6・7月の最大数)





2. 繁殖期の確認範囲が拡大し生息数を増加している調査地

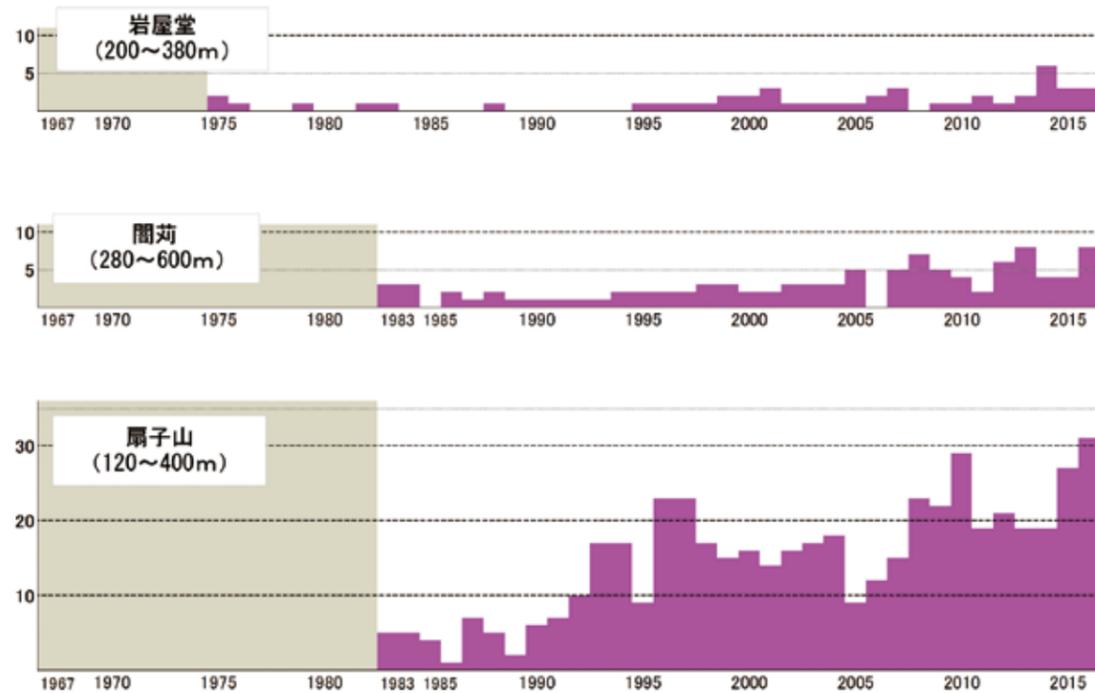
以前から調査地の一部で少数は繁殖していたが、ウグイスの繁殖標高が低地へ拡大した時期に合わせて繁殖期の確認範囲が拡大し生息数も増加している調査地として、「岩屋堂」「闇苅」「扇子山」の3地点があげられる。上記3調査地の共通点は標高差のあるルートでの調査であり、調査開始当初より繁殖していたと思われる頂上部分には集落等がないことである。

「岩屋堂」は調査開始当時に山の樹木は幼齢でウグイスの繁殖環境があったが、樹木の生長で一時繁殖環境がなくなり、その後繁殖標高が低くなったことにより増加したことが考えられる。

「闇苅」も同様と考えられるが、繁殖環境が継続していたものと思われる。

「扇子山」の山塊は三河山地の山塊とは連続していないが、標高400m程度の尾根沿いには以前よりウグイスが繁殖していた。調査ルートが比較的浅いので確認される個体数も多く、「2.」の環境を代表するような生息数増加の特徴がグラフに表れている。

ウグイスの繁殖期における県内分布（6・7月の最大数）



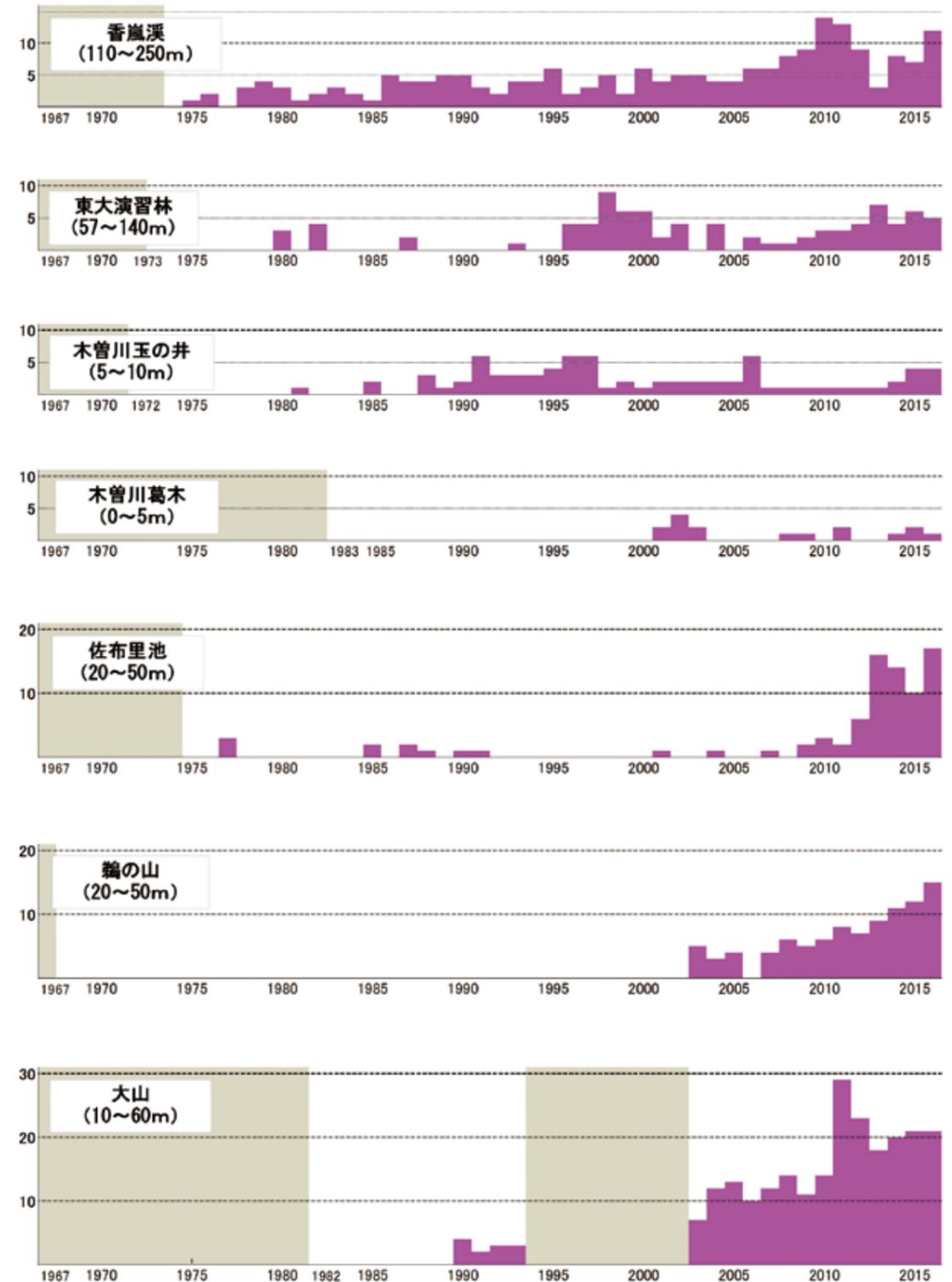
3. 途中から繁殖期の生息が確認された調査地

愛知県鳥類生息調査の開始時は繁殖期の確認が無く、途中から繁殖期の生息が確認されるようになった地点として、「香嵐溪」「東大演習林」「木曾川玉ノ井」「木曾川葛木」「佐布里池」「鶴の池」「大山」「古山」「汐川河口」の9地点があげられる。

「香嵐溪」は標高が低いものの、「闇苅」と同様「2.」に該当する地点であるのかも知れないが、グラフでは新しく繁殖が始まり、ゆっくり増加している状況がグラフの形に現れている。

「東大演習林」は標高の低い尾張東部丘陵の端にあり、生息数の変遷には地理的な要因の他

ウグイスの繁殖期における県内分布（6・7月の最大数）





に開発の影響も推測される。早い時期から分布しているが、繁殖期の定着が安定するまでの間に時間を要していることが分かる。

「木曾川玉ノ井」は平野の河川敷であるが、調査範囲内には林や耕地など多様な環境が混在している。比較的早い時期から分布があり定着しているが、面積が狭いことで生息数は管轄官庁の河川管理やホトトギスの托卵などに左右されていることが推測される。

「木曾川葛木」は容易に変化する環境と思われ、今のところ安定した繁殖地とは言えないが、「木曾川玉ノ井」の下流に位置しておりウグイスの繁殖分布が木曾川沿いに上流から下流へと拡大していることが分かる。木曾川に限らず三河地方の河川でも同様の傾向が見られ、西三河の平野部で最初に確認されたのも矢作川の河川敷である。分布は下流へと拡大しており、2017年には「矢作川河口」調査地の直ぐ上流まで分布が広がっているため、近い将来「矢作川河口」でも確認されるものと思われる。

「佐布里池」と「鶴の山」は知多半島にあり、繁殖分布は北の「佐布里池」から南の「鶴の山」へと広がっている。

渥美半島では「大山」「古山」「汐川河口」の順で確認されているが、基本的にウグイスの分布は東から西の方向へ拡大しているようである。

4. 上記以外の調査地

上記のいずれにも当てはまらないと思われる調査地として、「栗代」及び「平和公園」「平針」の3地点があげられる。

「栗代」は奥三河に位置し標高も高いが、周囲を標高 600m 程の山に囲まれて標高差 300m 近い谷間が中心の調査地である。ウグイス本来の営巣には適した環境でなく、調査開始の 1983 年はすでにウグイスの繁殖分布が低地へ拡大し始めている。2000 年前後の生息数増加は、林部の伐採や農地周辺の荒廃などで一時的に繁殖環境が創生されたことが考えられる。2005 年以降繁殖期の確認はないが、ホトトギスは継続して確認されていることから、山頂付近など調査地の近隣ではウグイスが繁殖しているものと思われる。

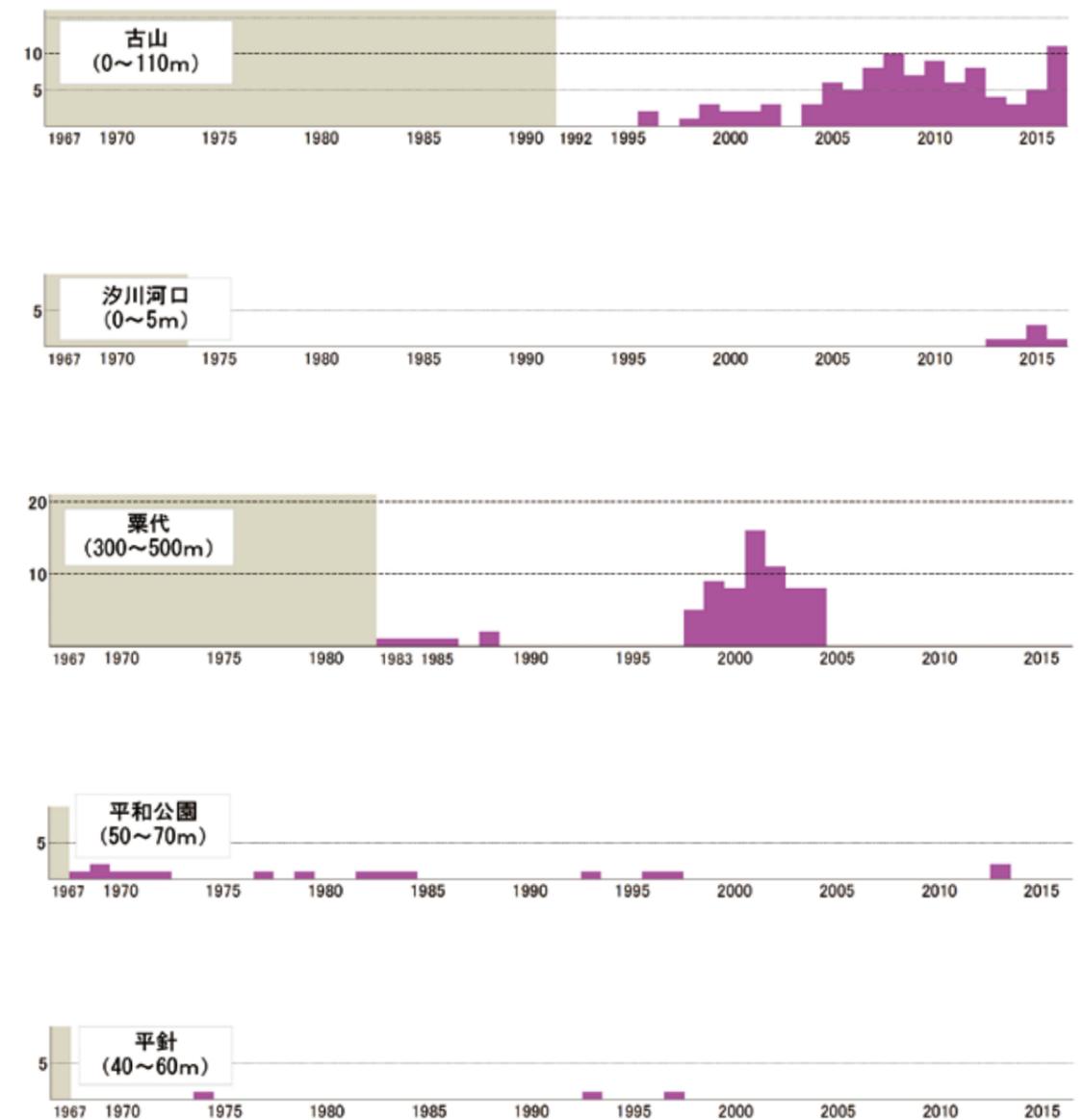
「平和公園」と「平針」は現在市街地の中に位置する緑地の環境であるが、調査開始当時は市街地でなく、郊外に開発された丘の環境であったと思われる。「平和公園」は広大な墓地公園であり、今後もウグイスが繁殖する可能性は残されるが、「平針」は極度に市街化が進んでおり、その可能性は低いと思われる。

ウグイスの一般的な生態

1970 年代までの常識では、東海地方のウグイスは春から夏の間を標高の高い山地の繁殖地で過ごし、秋が深まると里へ下りて冬を過ごす「漂鳥」とされていた。「漂鳥」とは周年国内に生息する野鳥の中でも季節によって生息場所を移動する種であり、季節による移動をしない「留鳥」と区別されていた。

「漂鳥」の季節による移動には、春夏をより北にある繁殖地で過ごし秋冬を温暖な南の地で過ごすために往復する「水平移動型」と、春夏を標高の高い山頂付近で過ごし秋冬を標高の低

ウグイスの繁殖期における県内分布（6・7月の最大数）



い山麓や平地で過ごす「垂直移動型」の2種類に分けられていて、ウグイスは「垂直移動型」の代表種とされていた。「垂直移動型」には他にヤマガラ等のカラ類・メジロ・アカゲラなどがあげられ、これらの種は実際に冬期になると山頂付近にある繁殖地では生息数が減少する。

しかし、最近の遺伝子による解析では冬期沖縄で観察されるウグイスが大陸の亜種やカラフトの亜種であるという報告があり、「垂直移動型」のメジロやカラ類が伊勢湾を越える渡りを観察する機会も多い。愛知県で繁殖するウグイスがどこで越冬しているのか？越冬するウグイス



がどこで繁殖しているのか？などほとんど解明されておらず、今後の研究が待たれるところである。

筆者の育った岐阜県中央の山間部でも、1960年代まではウグイスが山麓で観察できるのは秋から春先までの間に限られていた。鳴き声は笛鳴きばかりであり、春に囀りを聞くと山麓からいなくなる野鳥であった。繁殖期は標高400m程度以上の尾根付近にある疎林などに生息していたが、現在では繁殖期に山麓でも生息しており、岐阜県においても愛知県とほぼ同じ時期から繁殖期の分布が標高の低い山麓へ拡大してきたものと思われる。



ウグイスの繁殖環境

過去には、ウグイスの繁殖地は本州の山地に多いとされていた。営巣する植物はササ類が主であるが、ササ類以外の灌木で営巣することもあるとされている。県内でウグイスが好んで営巣するササ類は、本来標高の高い場所に分布しているスズタケやそれより低い場所に分布するネザサの仲間などを含め、稈が細く草丈の低いササ類であることが常識と思われていた。「木曾川玉ノ井」「木曾川葛木」「鶴の山」のササ類は、山地のササ類に比べれば大型であるが、三河平野部や渥美半島のササ類と比較すれば小型である。矢作川水系では、2000年代よりメダケと思われる大型ササ類の群落で繁殖期に確認されるようになっており、渥美半島の太平洋岸ではさらに草丈が高く密生したササ類の群落で1990年代の半ば頃より繁殖期にウグイスが生息するようになった。

ササ類は同じ種でも分布する環境や栄養状態、草刈の有無などにより稈の太さや草丈に大きな差異が生じるため、筆者のごとき門外漢に種の識別は困難である。県内におけるササ類の種全般の傾向として、標高の高い場所では稈が5～8mm・草丈が1～2m程度であり、標高が下がるにつれて大きくなる傾向があり、西三河平野部の水辺ではさらに大型で、渥美半島の太平洋岸が最大で稈の太いものは30mm以上・草丈の最大は6m以上となっている。しかし、渥美半島の大型ササ類でも群落の縁に位置するものの中には、同一の種でありながらスズタケのように細く草丈の低いものも存在する。

渥美半島の「大山」では1990年から分布して生息数も増加しているが、調査範囲周辺でササ類の植生がある場所は山麓のごく一部に限られている。渥美半島の「古山」では1996年から確認されており、海側にあるササ類の群落で多く確認されているが、山側でササ類の植生がかなり少ない環境でも繁殖期に確認されている。ササ類の植生が極めて少ない渥美半島の照葉樹林ではどのような植生に営巣しているのか、今後の観察が待たれる。

「汐川河口」では2013年から繁殖期に確認されているが、近年、干拓地の中にある畑の放棄地などに大型ササ類の群落がみられる。

平野部において1960年代から1970年代の初期に繁殖期の記録のある「平和公園」「平針」「佐布里池」などの記録をみると、ウグイスは本来標高に関係なく繁殖を試みる種であることが推測されるが、県内の平野部で繁殖期の定着が確認されたのは「木曾川玉ノ井」の1988年が最初である。

以上の調査結果より、県内では①本来の繁殖環境である小型ササ類の環境、②三河地方の平野部や、渥美半島の太平洋沿岸などにある大型ササ類の環境、③「大山」や「古山」の山側など、ササ類の極めて少ない環境と、繁殖期は3タイプの環境に分布していることが確認された。

繁殖分布拡大の要因

県内におけるウグイスの繁殖分布が、1970年代まである程度標高の高い山地に限られていたことについて、その理由が人間社会の土地利用にあったことが考えられる。

現在では想像することも困難であるが、有史以来1960年代の半ばまで食糧難の時代が続いていたのが日本の歴史である。食料や生活に必要な物資を確保するために、人が生活する周辺の土地は無駄なく利用されてきた。農村部にLPガスや石油が普及するまでの燃料は全て植物から得られていたので、農地にも林にも多くの人が入り、ササ類はウグイスが繁殖ができる程繁茂できなかつたのである。メダケのような大型のササ類は、建築や農業・漁業などの資材として利用され、現在のように群落が放置されることもなかった。

経済が高度成長を始めた頃から農林業に携わる人手が減少し、農地や林の隅からササ類の繁茂が始まったことで、山地にも平地にもウグイスの繁殖環境が多くなってきた。

また、1950年までウグイスは無制限に飼養が可能であり、その後、何度か規制は加えられたものの実際にとり締りが厳しくなったのは1980年からである。人間による捕獲圧も、ウグイスが分布を拡大するには大きな阻害要因であったことは間違いない。

ウグイスは低地に分布を拡大することで、ホトトギスの托卵が少なくなる利点がある。しかしほとんどの調査地では、低地へ分布拡大後にホトトギスの分布がみられている。現在繁殖期に生息している調査地の中で、未だ繁殖期にホトトギスの分布がないのは「木曾川葛木」と「古山」だけである。ちなみに三河湾の佐久島や梶島でも繁殖期にウグイスの分布が確認されているが、今のところホトトギスの分布は確認されていない。

(高橋伸夫)

引用文献

- 山階芳麿, 1941. 日本の鳥類と其生態第二巻. 116・117pp. 年岩波書店, 東京.
 愛知県, 2017. 愛知県鳥類調査結果. 愛知県..
 真木広造・大西敏一・五百澤日丸. 2014. 日本の野鳥650. 537・538pp. 平凡社. 東京.



各調査地の状況

キビタキは、愛知県に3月下旬から5月上旬頃渡来して繁殖し、9月下旬から11月上旬頃に渡去する夏鳥である。繁殖分布は、平野部や標高の低い場所で5月の中旬頃まで囀りが確認されても、以降の確認がされない例が多い。愛知県における繁殖の安定期を6・7月として、調査で確認された15地点の最大数をグラフに表した。（「段戸裏谷」のグラフで1984年は6・7月の調査がされなかったため、5月20日の記録を充当）

グラフより「粟代」を除く14地点では全て増加傾向がみられ、県内における繁殖期のキビタキは1980年代以降確実に増加していることが分かる。「粟代」は比較的標高の高い山間部にありながら、1984年に1羽が記録されたのみである。調査地が標高差のある谷の下部に位置していることや、ルート周辺に耕地や若齢の人工林が多い場所であることで、キビタキの繁殖には適していない環境であることが推測される。他に標高が高いにもかかわらず調査開始当初に繁殖期の生息が確認されていなかった「闇苧」でも、調査範囲の大半が標高差のある谷間であることが最大の要因と思われるが、広葉樹の植生も多いことから、調査開始当初に調査範囲の広葉樹が幼齢であったことも推測される。

調査地全域が標高140m以下の調査地点をみると、丘陵地の「平和公園」で1981年に確認された1羽を除けば、他の全てで1990年以降に繁殖期の分布が始まったことになる。1980年代以前の愛知県では、ある程度以上の標高でなければキビタキの繁殖は困難であったことが推測される。

調査地の中で6・7月にキビタキが記録されていないのは、調査範囲の中心が河川敷と水面である「木曾川玉ノ井」「木曾川葛木」「庄内川河口」「矢作川河口」、主な調査範囲が干拓地である「鍋田」「汐川河口」、および知多半島の丘陵部に位置する「鶉の山」の7地点である。標高は「鶉の山」が20～50m、「木曾川玉ノ井」が5～10m、残り5地点は全て0～5mである。

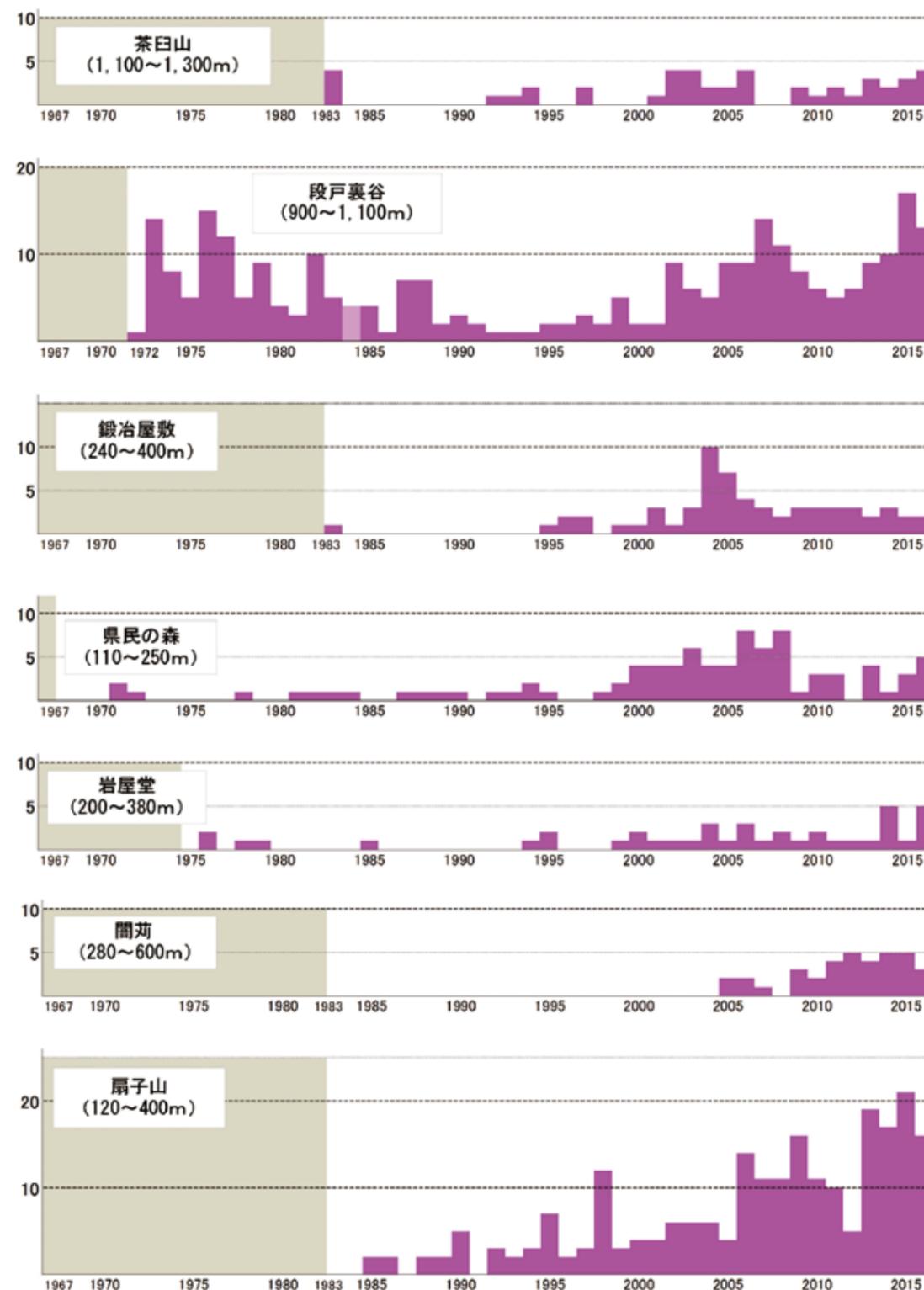
キビタキの繁殖環境

キビタキは、よく繁った広葉樹林や針広混交林等にある樹木の洞や幹の裂け目、樹枝上や蔓が絡んだ場所の葉影などに営巣することが多くとされており、シジュウカラ用の巣箱を使用した例も報告されている。繁殖期は尾根筋など周囲の開けた地形を好む傾向があり、立木に営巣する種として営巣場所が見下ろしや視線の高さになりやすく、外敵の目に着きにくい地形で繁殖していることが推測される。キビタキは樹冠の内側の枝に紛れて囀ることが多いために姿を確認することは難しいが、囀りは音量があって遠くまでよく届く。

繁殖期の生息環境がキビタキとは対照的な種として、オオルリがあげられる。県内ではキビタキと同様の標高へ飛来して繁殖する近縁種の夏鳥であるが、オオルリの場合は主に崖のある環境を好んで生息する傾向があり、キビタキと同じ山であっても沢や谷の環境に多く生息する。営巣場所は谷間であるが、縄張りの誇示は高い木立の先端など、よく目立つ場所に止まって囀りを行う。ちなみに両種共に美しく複雑な声で囀るが、キビタキの囀りは早いテンポで同じ節回しを繰り返すこと、オオルリでは比較的ゆっくりとしたテンポで一声ごとに節回しに変化し、囀りの終わりにジジッと濁った声を入れることが囀りによる両種の識別点である。

キビタキの営巣に必要な洞や裂け目ができるのはある程度の齢を経た樹木であり、蔓が絡む

キビタキの繁殖期における県内分布（6・7月の最大数）





環境には植物種の多様性やそれに合った土壌の生成など多くの条件が必要となる。河川敷や干拓地の土質は、堆積した砂と客土として持ち込まれた土などが主体である。山地や丘陵地と比較すれば植生は貧相で、樹木も若齢である。河川敷や干拓地の中に林を有する調査地も少なくないが、今のところキビタキが繁殖できる環境には至っていないものと推測される。丘陵地である「鵜の山」は特異な環境であり、生息するカワウの糞により林が更新され、調査範囲の林が比較的若齢であることが要因と推測される。

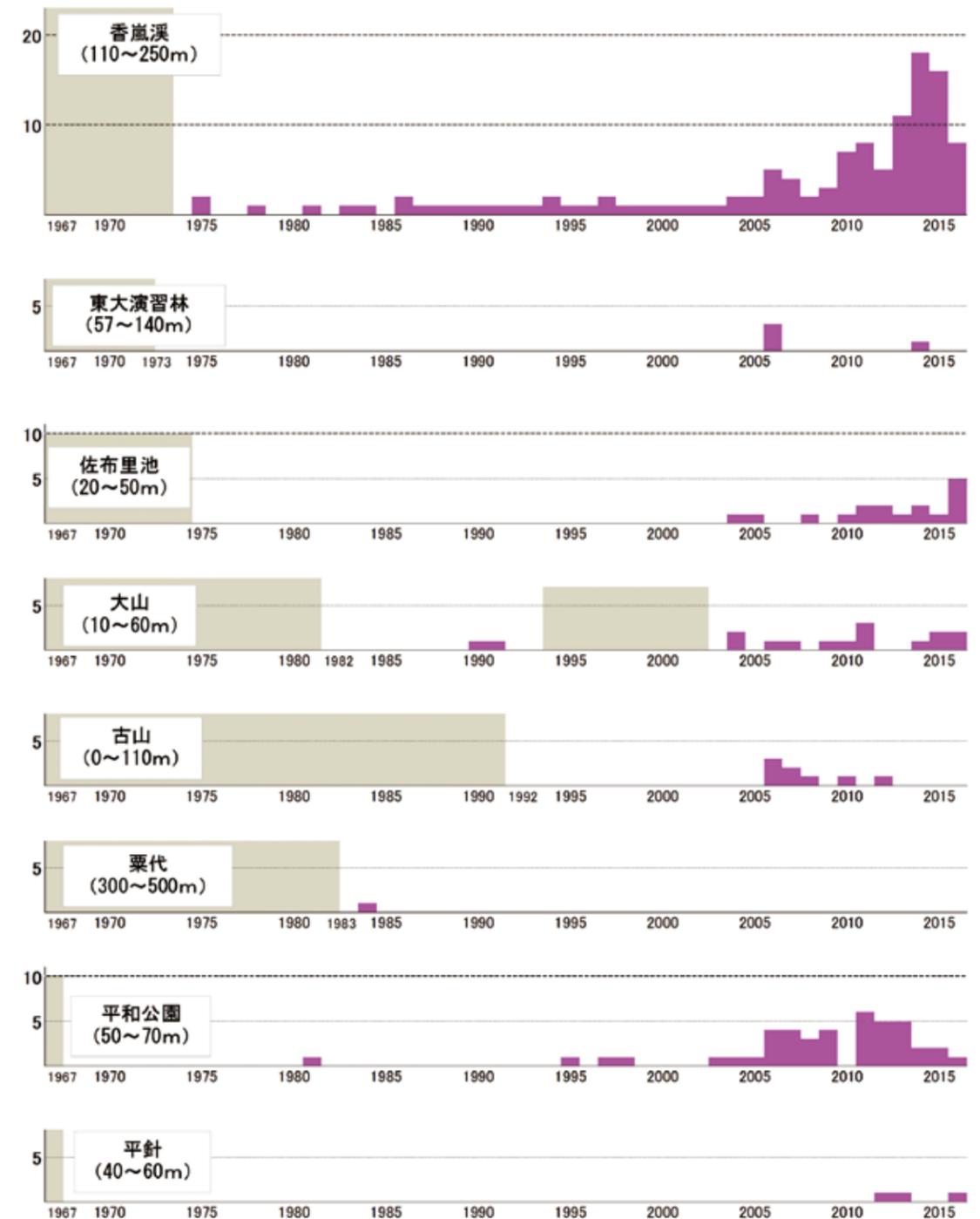
繁殖分布拡大の要因

標高が 140m 以下でキビタキの分布が拡大している調査地「東大演習林」「佐布里池」「大山」「古山」「平和公園」「平針」は、全て標高の低い山地や丘陵地である。これらは全て集落の周辺にあり、1960 年代までは主に薪炭林として利用されてきた雑木林である。1990 年以降徐々に繁殖期の生息が始まりその数を増しているのは、薪炭林に人手が入らなくなり放置されたことでキビタキの繁殖環境が創生されたものと思われる。キビタキの繁殖環境として必要なのは開けた地形にある繁った雑木林であり、その条件に標高は本来含まれていなかった可能性がある。

キビタキの囀りは複雑でウグイスのように明確でなく、繁殖地ではオオルリのように目立った場所で囀ることもない。近年は声による識別の資料が溢れており、野外で容易にその再生をすることも可能であるが、それでも声による種の識別は容易でない。囀りは高音であることから、距離や地形によってはその確認状況にも個人差は大きい。音声資料が殆どなかった時代の調査では、キビタキのように姿の確認が困難な種の生息数が正確に調査結果に表れていないことも考えられる。



キビタキの繁殖期における県内分布（6・7月の最大数）



(高橋伸夫)

引用文献

山階芳麿, 1941. 日本の鳥類と其生態第二巻. 49・50pp. 岩波書店, 東京.
愛知県, 2017. 愛知県鳥類調査結果. 愛知県.

「野鳥は何を語るのか」

日本野鳥の会愛知県支部 支部長 新實 豊

1967 (S42) 年より始まった愛知県野鳥生息調査が 50 年を迎えるという一年前、この記録を何らかの形で残していくこととなるべく分かりやすい形で表したいという思いから愛知県自然環境課にお願いし、この度報告書としてまとめることができた。

この 50 年間に調査結果をまとめたものとして

1972 年 (S47) 3 月「愛知県の野鳥」 S42 年度から S46 年度まで、
 1977 年 (S52) 2 月「愛知県の野鳥」 S42 年度から S50 年度まで、
 1989 年 (H 元) 3 月「愛知県野生鳥類生息調査報告書」 S51 年度から S62 年度まで、
 2004 年 (H16) 11 月「愛知県野生鳥類生息調査データ集」 S63 年度から H14 年度まで
 2006 年 (H19) 3 月「愛知の野鳥 2006」 S46 年度から H17 年度までをグラフで表示
 の報告書がある。

それぞれには確認された全種が解説と図表で表わされている。1972 年当時ではパソコンもない時代であり、回を重ねるごとにパソコンが使える時代になったとはいえ、調査地が増え、必然的に確認される種も増えて、その編集を担った先人の皆さんが相当に苦労されたのではないかと思う。

今回の編集に先立ち、各年毎のデータを一元化したところ 30 万行に及ぶ膨大なデータとなったが、昨今はパソコンの性能も格段に上がり、市販の表計算ソフトでも扱えるようになった。また、インターネットを通じて必要なデータを必要な時に提供できる環境が整いつつあるため、編集の方針として、確認した種の全てを図表化しないで調査地毎に特徴ある種に的を当て、50 年間の増減をカラーの濃淡で表示することにした。この図表は公益財団法人日本野鳥の会発行「野鳥」2017 年 1 月号の特集「明治神宮の森と野鳥」を参考にさせていただいた。

私はスズメの解説を担当し、調査地毎の図表から増減の動向にそれぞれ違いがあることがわかった。これは何を意味するのだろうか。調査地の環境の変化がスズメの生息に影響を与えているとすると、50 年をかけてスズメが何かを語っているのではないかと思う。本調査ではこれまでに 347 種が確認されているが、全調査地を通して増減の動向が明らかになったのはスズメ、ハシブトガラス、ハシボソカラスの 3 種と高橋氏によるウグイス、キビタキの繁殖分布、高橋氏、緒方氏によるソウシチョウの分布を含めて 6 種だけである。30 万行のデータの中にはまだ 341 種の野鳥が何かを語っている。この中から 1 種でも多くを明らかにしてもらえたいことを願いたいし、この調査がこれからも続き 100 年、200 年のデータが蓄積され野鳥の語りに耳を傾けてくれる人が出てくることを願う。

～ 謝辞 ～

この報告書は多くの方のご協力により作成することができました。

50 年間のデータを蓄積する事ができた歴代の調査員の皆様、各調査地と野鳥の解説を執筆していただいた現調査員の皆様、ソウシチョウの解析をして下さった緒方清人氏、ソウシチョウ、ウグイス、キビタキの解析をして下さった高橋伸夫氏、この調査が始まった当時を知り、「鳥類生息調査 50 年に当たって」を寄稿して下さった小笠原昭夫氏、また、編集委員として取りまとめに協力して下さった皆様に感謝致します。

そして、最後に DTP 編集を引き受けて下さった田口奈緒子さんには多大な感謝を申し上げます。

付録

愛知県鳥類目録 (2018 年 2 月現在)

24 目 74 科 418 種

この目録は、愛知県内で確認されている鳥類の種類を一覧にしたものです。作成にあたっては、愛知県鳥類生息調査の他、県内の野鳥関連団体等による記録も参照しています。

よって、すべての種が愛知県鳥類生息調査で確認されているとは限りません。

愛知県鳥類目録（2018年2月現在）

| キジ目 | | | |
|-----|------|--|----|
| キジ科 | | | |
| 1 | ウズラ | <i>Coturnix japonica</i> Temminck & Schlegel, 1849 | |
| 2 | ヤマドリ | <i>Symtlicus soemmeringii</i> (Temminck, 1830) | 繁殖 |
| 3 | キジ | <i>Phasianus colchicus</i> Linnaeus, 1758 | 繁殖 |

| カモ目 | | | |
|-----|---------|--|------------------------|
| カモ科 | | | |
| 4 | サカツラガン | <i>Anser cygnoides</i> (Linnaeus, 1758) | 1995.10.9 汐川干潟 1 |
| 5 | ヒシクイ | <i>Anser fabalis</i> (Latham, 1787) | |
| 6 | ハイロガン | <i>Anser anser</i> (Linnaeus, 1758) | 1989.2.4 美浜町 1, 他 |
| 7 | マガン | <i>Anser albifrons</i> (Scopoli, 1769) | |
| 8 | カリガネ | <i>Anser erythropus</i> (Linnaeus, 1758) | 1971.11.9 鍋田 2 |
| 9 | コクガン | <i>Branta bernicla</i> (Linnaeus, 1758) | |
| 10 | コハクチョウ | <i>Cygnus columbianus</i> (Ord, 1815) | |
| 11 | オオハクチョウ | <i>Cygnus cygnus</i> (Linnaeus, 1758) | |
| 12 | ツクシガモ | <i>Tadorna tadorna</i> (Linnaeus, 1758) | |
| 13 | アカツクシガモ | <i>Tadorna ferruginea</i> (Pallas, 1764) | 2010.1.2 碧南市矢作川河口 1, 他 |
| 14 | オンドリ | <i>Aix galericulata</i> (Linnaeus, 1758) | 繁殖 |

| | | | |
|----|----------|---|-----------------------------|
| 15 | オカヨシガモ | <i>Anas strepera</i> Linnaeus, 1758 | |
| 16 | ヨシガモ | <i>Anas falcata</i> Georgi, 1775 | |
| 17 | ヒドリガモ | <i>Anas penelope</i> Linnaeus, 1758 | |
| 18 | アメリカカドリ | <i>Anas americana</i> Gmelin, 1789 | |
| 19 | マゴモ | <i>Anas platyrhynchos</i> Linnaeus, 1758 | 繁殖記録有り |
| 20 | カルガモ | <i>Anas zonorhyncha</i> Swinhoe, 1866 | 繁殖 |
| 21 | ミカツキシマアジ | <i>Anas discors</i> Linnaeus, 1766 | 1996.1.1 丹羽郡木曾川♂ 1 |
| 22 | ハンビロガモ | <i>Anas clypeata</i> Linnaeus, 1758 | |
| 23 | オナガガモ | <i>Anas acula</i> Linnaeus, 1758 | |
| 24 | シマアジ | <i>Anas querquedula</i> Linnaeus, 1758 | 春秋通過 繁殖記録 1 例 |
| 25 | トモエガモ | <i>Anas formosa</i> Georgi, 1775 | 近年飛来数減少 |
| 26 | コガモ | <i>Anas crecca</i> Linnaeus, 1758 | |
| 27 | アカハシハジロ | <i>Netta rufna</i> (Pallas, 1773) | 2014.11.15 西尾市吉良町♀ 1, 他 |
| 28 | オオホシハジロ | <i>Aythya valisineria</i> (Wilson, 1814) | 1988.10.7 半田市上池♂ 1, 他 |
| 29 | ホシハジロ | <i>Aythya ferina</i> (Linnaeus, 1758) | |
| 30 | アカハジロ | <i>Aythya baeri</i> (Raddé, 1863) | 2013.5.19 豊橋市神野新田♂ 1, 他 |
| 31 | メヅロガモ | <i>Aythya nyroca</i> (Güldenstädt, 1770) | 2017.10.6 西尾市一色町 2, 他 1 例 |
| 32 | クビワキンクロ | <i>Aythya collaris</i> (Donovan, 1809) | 2014.12.12 豊橋市賀茂町♂ 1, 他 |
| 33 | キンクロハジロ | <i>Aythya fuligula</i> (Linnaeus, 1758) | |
| 34 | スズガモ | <i>Aythya marila</i> (Linnaeus, 1761) | |
| 35 | コスズガモ | <i>Aythya affinis</i> (Eyton, 1838) | 2017.3.25 蒲都市形原町♂ 1, 他 |
| 36 | シノリガモ | <i>Histrionicus histrionicus</i> (Linnaeus, 1758) | |
| 37 | ヒロードキンクロ | <i>Melanitta fusca</i> (Linnaeus, 1758) | 近年は希 |
| 38 | クロガモ | <i>Melanitta americana</i> (Swainson, 1832) | |
| 39 | コオリガモ | <i>Cyanula hyemalis</i> (Linnaeus, 1758) | 2017.6.17 田原市小中山町 1S ♂ 1, 他 |
| 40 | ホオジロガモ | <i>Bucephala clangula</i> (Linnaeus, 1758) | |
| 41 | ミコアイサ | <i>Mergellus albellus</i> (Linnaeus, 1758) | |
| 42 | カワアイサ | <i>Mergus merganser</i> Linnaeus, 1758 | |
| 43 | ウミアイサ | <i>Mergus serrator</i> Linnaeus, 1758 | |
| 44 | コウライアイサ | <i>Mergus squamatus</i> Gould, 1864 | 1995.1.16 扶桑町♂ 1, 他 |

| カイツブリ目 | | | |
|--------|-----------|--|-------------------|
| カイツブリ科 | | | |
| 45 | カイツブリ | <i>Tachybaptus ruficollis</i> (Pallas, 1764) | 繁殖 |
| 46 | アカエリカイツブリ | <i>Podiceps grisegena</i> (Boddaert, 1783) | 近年は希 |
| 47 | カンムリカイツブリ | <i>Podiceps cristatus</i> (Linnaeus, 1758) | 2016 年豊明市勅使池で繁殖行動 |
| 48 | ミミカイツブリ | <i>Podiceps auritus</i> (Linnaeus, 1758) | 近年は希 |
| 49 | ハジロカイツブリ | <i>Podiceps nigricollis</i> Brehm, 1831 | |

| ネッタイチョウ目 | | | |
|----------|------------|---|-------------------------------|
| ネッタイチョウ科 | | | |
| 50 | アカオネッタイチョウ | <i>Phaethon rubricauda</i> Boddaert, 1783 | 1998.10.24 安城市 (落鳥 1), 他 1 例 |

| サケイ目 | | | |
|------|-----|---|------------------|
| サケイ科 | | | |
| 51 | サケイ | <i>Syrhaptes paradoxus</i> (Pallas, 1773) | 1978.9.23. 豊橋市 1 |

| ハト目 | | | |
|-----|-------|---|-------------------|
| ハト科 | | | |
| 52 | カラスバト | <i>Columba janthina</i> Temminck, 1830 | 2007.10.12 伊良湖岬 1 |
| 53 | キジバト | <i>Streptopelia orientalis</i> (Latham, 1790) | 繁殖 |

| | | | |
|----|------|---|-----------------------|
| 54 | ベニバト | <i>Streptopelia tranquebarica</i> (Hermann, 1804) | 2012.2.7 西尾市一色町♂ 1, 他 |
| 55 | アオバト | <i>Treron sieboldii</i> (Temminck, 1835) | 繁殖 |

| アビ目 | | | |
|-----|----------|---|-----------------------|
| アビ科 | | | |
| 56 | アビ | <i>Gavia stellata</i> (Pontoppidan, 1763) | |
| 57 | オオハム | <i>Gavia arctica</i> (Linnaeus, 1758) | |
| 58 | シロエリオオハム | <i>Gavia pacifica</i> (Lawrence, 1858) | |
| 59 | ハシジロアビ | <i>Gavia adamsii</i> (Gray, 1859) | 2010.4.10 田原市太平洋 1, 他 |

| ミズナギドリ目 | | | |
|---------|--------------|---|------------------------------|
| アホウドリ科 | | | |
| 60 | コアホウドリ | <i>Phoebastria immutabilis</i> (Rothschild, 1893) | 2017.8.8 豊橋市神野新田(保護 J1), 他 |
| 61 | クロアジアホウドリ | <i>Phoebastria nigripes</i> (Audubon, 1839) | 2013.6.7 田原市 (落鳥 1), 他 |
| ミズナギドリ科 | | | |
| 62 | フルマカモメ | <i>Fulmarus glacialis</i> (Linnaeus, 1761) | 2011.7.26 田原市 (落鳥 1), 他 |
| 63 | オオシロハラミズナギドリ | <i>Pterodroma externa</i> (Salvin, 1875) | 1962.7.29 名古屋市 (保護 1) |
| 64 | シロハラミズナギドリ | <i>Pterodroma hypoleuca</i> (Salvin, 1888) | 2004.10.21 新城市 (保護 1), 他 |
| 65 | オオミズナギドリ | <i>Calonectris leucomelas</i> (Temminck, 1836) | |
| 66 | オナガミズナギドリ | <i>Puffinus pacificus</i> (Gmelin, 1789) | 2013.9.19 豊橋市 (落鳥 1), 他 1 例 |
| 67 | ハイイロミズナギドリ | <i>Puffinus griseus</i> (Gmelin, 1789) | 1977.6.14 表浜 (落鳥 28), 他 |
| 68 | ハシボソミズナギドリ | <i>Puffinus tenuirostris</i> (Temminck, 1836) | |
| 69 | アカアシミズナギドリ | <i>Puffinus carneipes</i> Gould, 1844 | 1993.5.2 赤羽根町 8, 他 |

| ウミツバメ科 | | | |
|--------|-----------|---|----------------------------------|
| 70 | コンジロウミツバメ | <i>Oceanodroma leucorhoa</i> (Vieillot, 1818) | 1979.10.19 ~ 20 内陸部など保護落鳥 6 例, 他 |
| 71 | ハイイロウミツバメ | <i>Oceanodroma furcata</i> (Gmelin, 1789) | 2012.3.6 豊橋市 (落鳥 1), 他 |

| コウノトリ目 | | | |
|--------|-------|---------------------------------------|-------------------------|
| コウノトリ科 | | | |
| 72 | ナベコウ | <i>Ciconia nigra</i> (Linnaeus, 1758) | 1990.11.10 美浜町 1, 他 1 例 |
| 73 | コウノトリ | <i>Ciconia boyciana</i> Swinhoe, 1873 | 1978.10.5 名古屋市 1, 他 |

| カツオドリ目 | | | |
|---------|-----------|--|-------------------------------|
| ゲンカンドリ科 | | | |
| 74 | オオゲンカンドリ | <i>Fregata minor</i> (Gmelin, 1789) | 2012.10. 下旬, 伊良湖岬, 他 |
| 75 | コゲンカンドリ | <i>Fregata ariel</i> (Gray, 1845) | |
| カツオドリ科 | | | |
| 76 | アカアシカツオドリ | <i>Sula sula</i> (Linnaeus, 1766) | 2017.9.10 名古屋市港区藤前干潟 1, 他 1 例 |
| 77 | カツオドリ | <i>Sula leucogaster</i> (Boddaert, 1783) | 1994.3.6 豊橋市, 他 |

| ウ科 | | | |
|----|-----|---|----|
| 78 | ヒメウ | <i>Phalacrocorax pelagicus</i> Pallas, 1811 | |
| 79 | カワウ | <i>Phalacrocorax carbo</i> (Linnaeus, 1758) | 繁殖 |
| 80 | ウミウ | <i>Phalacrocorax capillatus</i> (Temminck & Schlegel, 1849) | |

| ペリカン目 | | | |
|-------|----------|---|-------------------------------------|
| サギ科 | | | |
| 81 | サンカノゴイ | <i>Botaurus stellaris</i> (Linnaeus, 1758) | 2007.11.14 西尾市一色町 1, 他 |
| 82 | ヨシゴイ | <i>Ixobrychus sinensis</i> (Gmelin, 1789) | 繁殖 近年繁殖なし・生息確認も希 |
| 83 | オオヨシゴイ | <i>Ixobrychus eurhythmus</i> (Swinhoe, 1873) | 2017.10.3 名古屋市鶴舞公園 1, 他 |
| 84 | ミゾゴイ | <i>Gorsachius gossagi</i> (Temminck, 1836) | 繁殖 越冬記録あり |
| 85 | ゴイサギ | <i>Nycticorax nycticorax</i> (Linnaeus, 1758) | 繁殖 |
| 86 | ササゴイ | <i>Butorides striata</i> (Linnaeus, 1758) | 繁殖 |
| 87 | アカガシラサギ | <i>Ardeola bacchus</i> (Bonaparte, 1855) | 2017.9.16 西尾市吉良町友国 1, 他 |
| 88 | アマサギ | <i>Bubulcus ibis</i> (Linnaeus, 1758) | 繁殖 越冬記録あり |
| 89 | アオサギ | <i>Ardea cinerea</i> Linnaeus, 1758 | 繁殖 |
| 90 | ムラサキサギ | <i>Ardea purpurea</i> Linnaeus, 1766 | 2017.5.14 西尾市一色町 A1, 他 |
| 91 | ダイサギ | <i>Ardea alba</i> Linnaeus, 1758 | 繁殖 |
| 92 | チュウサギ | <i>Egretta intermedia</i> (Wagler, 1829) | 繁殖 |
| 93 | コサギ | <i>Egretta garzetta</i> (Linnaeus, 1766) | 繁殖 |
| 94 | クロサギ | <i>Egretta sacra</i> (Gmelin, 1789) | 繁殖記録なし |
| 95 | カラシラサギ | <i>Egretta eulophotes</i> (Swinhoe, 1860) | 2017.7.3 西尾市一色町 1, 他 |
| トキ科 | | | |
| 96 | クロトキ | <i>Threskiornis melanocephalus</i> (Latham, 1790) | 2004.12.30 ~ 2005.10.10 西尾市一色町 1, 他 |
| 97 | ヘラサギ | <i>Platalea leucorodia</i> Linnaeus, 1758 | 2016.2.11 西尾市一色町 J1, 他 |
| 98 | クロツラヘラサギ | <i>Platalea minor</i> Temminck & Schlegel, 1849 | |

| ツル目 | | | |
|-----|-------|---|-------------------------|
| ツル科 | | | |
| 99 | カナダツル | <i>Grus canadensis</i> (Linnaeus, 1758) | 2010.11.7 豊橋市 A1, 他 1 例 |
| 100 | マナツル | <i>Grus vipio</i> Pallas, 1811 | 2016.11.7 田原市伊良湖岬 1, 他 |

| 101 | タンチョウ | <i>Grus japonensis</i> (Müller, 1776) | 2009.12.30 ~ 2010.3.2 小牧市 A1 |
|------|---------|--|------------------------------|
| 102 | ナベツル | <i>Grus monacha</i> Temminck, 1835 | |
| クイナ科 | | | |
| 103 | クイナ | <i>Rallus aquaticus</i> Linnaeus, 1758 | 繁殖 1975.6 に巢卵が発見されたのみ、 |
| 104 | シロハラクイナ | <i>Amauromis phoenicurus</i> (Pennant, 1769) | 2017.4.30 碧南市役所 (落鳥 1), 他 |
| 105 | ヒメクイナ | <i>Porzana pusilla</i> (Pallas, 1776) | 2006.4.29 愛西市 1, 他 |
| 106 | ヒクイナ | <i>Porzana fusca</i> (Linnaeus, 1766) | 繁殖 越冬記録増加 |
| 107 | ツルクイナ | <i>Gallixrex cinerea</i> (Gmelin, 1789) | 2002 年以降記録なし |
| 108 | バン | <i>Gallinula chloropus</i> (Linnaeus, 1758) | 繁殖 近年個体数激減 |
| 109 | オオバン | <i>Fulica atra</i> Linnaeus, 1758 | 繁殖確認は僅か 近年冬期は激増 |

| ノガン目 | | | |
|------|-----|----------------------------------|-------------------|
| ノガン科 | | | |
| 110 | ノガン | <i>Otis tarda</i> Linnaeus, 1758 | 1994.3.11 安城市、♂ 1 |

| カッコウ目 | | | |
|-------|----------|---|-----------------------------|
| カッコウ科 | | | |
| 111 | カンムリカッコウ | <i>Clamator coronandus</i> (Linnaeus, 1766) | 2017.4.21 名古屋市南区笠寺 1, 他 1 例 |
| 112 | オニカッコウ | <i>Eudynamis scolopaceus</i> (Linnaeus, 1758) | 2005.6.26 岡崎市矢作川 1 |
| 113 | ジュウイチ | <i>Hierococcyx hyperythrus</i> (Gould, 1856) | 繁殖 |
| 114 | ホトトギス | <i>Cuculus poliocephalus</i> Latham, 1790 | 繁殖 |
| 115 | セグロカッコウ | <i>Cuculus micropterus</i> Gould, 1838 | 2015.5.22 豊橋市大岩町 1, 他 |
| 116 | ツツドリ | <i>Cuculus optatus</i> Gould, 1845 | 繁殖 |
| 117 | カッコウ | <i>Cuculus canorus</i> Linnaeus, 1758 | 繁殖 |

| ヨタカ目 | | | |
|------|-----|---|----|
| ヨタカ科 | | | |
| 118 | ヨタカ | <i>Caprimulgus indicus</i> Latham, 1790 | 繁殖 |

| アマツバメ目 | | | |
|--------|----------|---|-----------|
| アマツバメ科 | | | |
| 119 | ハリオアマツバメ | <i>Hirundapus caudacutus</i> (Latham, 1802) | |
| 120 | アマツバメ | <i>Apus pacificus</i> (Latham, 1802) | |
| 121 | ヒメアマツバメ | <i>Apus nipalensis</i> (Hodgson, 1837) | 繁殖 越冬記録あり |

| チドリ目 | | | |
|--------|----------|--|------------------------------|
| チドリ科 | | | |
| 122 | タゲリ | <i>Vanellus vanellus</i> (Linnaeus, 1758) | 越冬 |
| 123 | ケリ | <i>Vanellus cinereus</i> (Blyth, 1842) | 繁殖 |
| 124 | ムナグロ | <i>Pluvialis fulva</i> (Gmelin, 1789) | 越冬 |
| 125 | ダイゼン | <i>Pluvialis squatarola</i> (Linnaeus, 1758) | 越冬 |
| 126 | ハジロコチドリ | <i>Charadrius hiaticula</i> Linnaeus, 1758 | 越冬 |
| 127 | ミズカキチドリ | <i>Charadrius semipalmatus</i> Bonaparte, 1825 | 2006.11.17 ~ 2007.4.29 愛西市 1 |
| 128 | イカルチドリ | <i>Charadrius placidus</i> Gray & Gray, 1863 | 繁殖 |
| 129 | コチドリ | <i>Charadrius dubius</i> Scopoli, 1786 | 繁殖 |
| 130 | シロチドリ | <i>Charadrius alexandrinus</i> Linnaeus, | 繁殖 |
| 131 | メダイチドリ | <i>Charadrius mongolus</i> Pallas, 1776 | 少数越冬 |
| 132 | オオメダイチドリ | <i>Charadrius leschenaulti</i> Lesson, 1826 | |
| 133 | オオチドリ | <i>Charadrius veredus</i> Gould, 1848 | 2017.3.13 西尾市小栗町 1, 他 |
| 134 | コバシチドリ | <i>Charadrius morinellus</i> Linnaeus, 1758 | 1983.9.15 半田市 1, 他 1 例 |
| ミヤコドリ科 | | | |
| 135 | ミヤコドリ | <i>Haematopus ostralegus</i> Linnaeus, 1758 | 少数越冬 |

| セイタカシギ科 | | | |
|---------|-----------|---|-----------------------|
| 136 | セイタカシギ | <i>Himantopus himantopus</i> (Linnaeus, 1758) | 繁殖 繁殖数は国内最多 |
| 137 | ソリハセイタカシギ | <i>Recurvirostra avosetta</i> Linnaeus, 1758 | 2010.4.16 西尾市一色町 1, 他 |

| シギ科 | | | |
|-----|------------|---|--------------------------|
| 138 | ヤマシギ | <i>Scolopax rusticola</i> Linnaeus, 1758 | 越冬 |
| 139 | コシギ | <i>Lymnocyptes minimus</i> (Brünnich, 1764) | 1981.9.3 鍋田 1 |
| 140 | アオシギ | <i>Gallinago solitaria</i> Hodgson, 1831 | 越冬 |
| 141 | オオジシギ | <i>Gallinago hardwickii</i> (Gray, 1831) | 繁殖 近年繁殖期の生息記録なし |
| 142 | ハリオシギ | <i>Gallinago stenura</i> (Bonaparte, 1830) | 2015.9.12 安城市桜井町 A1, 他 |
| 143 | チュウジシギ | <i>Gallinago megala</i> Swinhoe, 1861 | |
| 144 | タシギ | <i>Gallinago gallinago</i> (Linnaeus, 1758) | 越冬 |
| 145 | オオハシシギ | <i>Limnodromus scolopaceus</i> (Say, 1822) | 越冬記録有り |
| 146 | シベリアオオハシシギ | <i>Limnodromus semipalmatus</i> (Blyth, 1848) | 2013.7.26 西尾市 1, 他 近年は極希 |
| 147 | オグロシギ | <i>Limosa limosa</i> (Linnaeus, 1758) | |
| 148 | オオソリハシシギ | <i>Limosa lapponica</i> (Linnaeus, 1758) | |
| 149 | コシヤクシギ | <i>Numenius minutus</i> Gould, 1841 | 2016.5.1 西尾市小栗町 1, 他 |
| 150 | チュウシヤクシギ | <i>Numenius phaeopus</i> (Linnaeus, 1758) | |
| 151 | ハリモモチュウシヤク | <i>Numenius tahitiensis</i> (Gmelin, 1789) | 1975.8.30 鍋田 1 |

| | | | | | |
|--|------|--------------|-------------|-------------|---------------------|
| | 表の見方 | 〈目〉 | | | |
| | | 〈科〉 | | | |
| | | 〈No.〉 | 〈和名〉 | 〈学名〉 | 〈確認日時/場所/備考〉 |

♂：オス、♀：メス、A：成鳥、J：幼鳥、S：夏羽、W：冬羽

| | | | |
|-----|---------|---|----|
| 152 | ダイシャクシギ | <i>Numenius arquata</i> (Linnaeus, 1758) | 越冬 |
| 153 | ホウロクシギ | <i>Numenius madagascariensis</i> (Linnaeus, | |

愛知県鳥類目録（2018年2月現在）

| 218 | ハジロクロハラアジサシ | <i>Chlidonias leucopterus</i> (Temminck, 1815) | |
|----------|-------------|---|----------------------------|
| 219 | ハシロクロハラアジサシ | <i>Chlidonias niger</i> (Linnaeus, 1758) | 1981.8.16. 鍋田1, 他 1例 |
| トウゾクカモメ科 | | | |
| 220 | オオトウゾクカモメ | <i>Stercorarius macconni</i> Saunders, 1893 | 1994.11.7 赤羽根町 1, 他 |
| 221 | トウゾクカモメ | <i>Stercorarius pomarinus</i> (Temminck, 1815) | 田原市赤羽根 1, 他 |
| 222 | クロトウゾクカモメ | <i>Stercorarius parasiticus</i> (Linnaeus, 1758) | 2013.11.2 田原市赤羽根 1, 他 |
| 223 | シロハトウゾクカモメ | <i>Stercorarius longicaudus</i> Vieillot, 1819 | 2015.8.28 岡崎市 1, 他 |
| ウミスズメ科 | | | |
| 224 | ウミガラス | <i>Uria aalge</i> (Pontoppidan, 1763) | 2008.12.19 田原市 1, 他 |
| 225 | ウミバト | <i>Cephus columba</i> Pallas, 1811 | 1993.5.8. 赤羽根町, 他 |
| 226 | ケイマフリ | <i>Cephus carbo</i> Pallas, 1811 | 2001.4.15 豊橋市 1, 他 |
| 227 | マダラウミスズメ | <i>Brachyramphus perdix</i> (Pallas, 1811) | 2015.1.18 豊橋市伊古部 W1, 他 |
| 228 | ウミスズメ | <i>Synthliboramphus antiquus</i> (Gmelin, 1789) | |
| 229 | カンムリウミスズメ | <i>Synthliboramphus wumizusume</i> (Temminck, 1836) | 2015.6.19 田原市東部海岸崖着死体 1, 他 |
| 230 | ウトウ | <i>Cerorhinca monocerata</i> (Pallas, 1811) | |

| タカ目 | | | |
|------|----------|--|-------------------------|
| ミサゴ科 | | | |
| 231 | ミサゴ | <i>Pandion haliaetus</i> (Linnaeus, 1758) | 繁殖 (1箇所) |
| タカ科 | | | |
| 232 | ハチクマ | <i>Pernis ptilorhynchus</i> (Temminck, 1821) | 繁殖 |
| 233 | トビ | <i>Milvus migrans</i> (Boddaert, 1783) | 繁殖 |
| 234 | オジロワシ | <i>Haliaeetus albicilla</i> (Linnaeus, 1758) | |
| 235 | オオワシ | <i>Haliaeetus pelagicus</i> (Pallas, 1811) | |
| 236 | チュウヒ | <i>Circus sponlotus</i> Kaup, 1847 | 繁殖 |
| 237 | ハイイロチュウヒ | <i>Circus cyaneus</i> (Linnaeus, 1766) | |
| 238 | マダラチュウヒ | <i>Circus melanoleucos</i> (Pennant, 1769) | 2015.9.17 豊田市榎塚西町♂ 1, 他 |
| 239 | アカハラダカ | <i>Accipiter soloensis</i> (Horsfield, 1821) | |
| 240 | ツミ | <i>Accipiter gularis</i> (Temminck & Schlegel, 1844) | 繁殖 |
| 241 | ハイタカ | <i>Accipiter nisus</i> (Linnaeus, 1758) | |
| 242 | オオタカ | <i>Accipiter gentilis</i> (Linnaeus, 1758) | 繁殖 |
| 243 | サンバ | <i>Butastur indicus</i> (Gmelin, 1788) | 繁殖 |
| 244 | ノスリ | <i>Buteo buteo</i> (Linnaeus, 1758) | 繁殖 近年繁殖開始 |
| 245 | ケアシノスリ | <i>Buteo lagopus</i> (Pontoppidan, 1763) | 2018.1.23 西尾市 J1, 他 |
| 246 | カラフトワシ | <i>Aquila clanga</i> Pallas, 1811 | 2014.9.29 蒲都市五井山 A1 |
| 247 | イヌワシ | <i>Aquila chrysaetos</i> (Linnaeus, 1758) | |
| 248 | クマタカ | <i>Nisaetus nipalensis</i> Hodgson, 1836 | 繁殖 |

| フクロウ目 | | | |
|-------|---------|--|-----------|
| フクロウ科 | | | |
| 249 | オオコノハズク | <i>Otus lempiji</i> (Horsfield, 1821) | 繁殖 |
| 250 | コノハズク | <i>Otus sunia</i> (Hodgson, 1836) | 繁殖 |
| 251 | フクロウ | <i>Strix uralensis</i> Pallas, 1771 | 繁殖 |
| 252 | アオバズク | <i>Ninox scutulata</i> (Raffles, 1822) | 繁殖 近年繁殖減少 |
| 253 | トラフズク | <i>Asio otus</i> (Linnaeus, 1758) | |
| 254 | コミミズク | <i>Asio flammeus</i> (Pontoppidan, 1763) | |

| サイチョウ目 | | | |
|--------|-------|-----------------------------------|--|
| ヤツガシラ科 | | | |
| 255 | ヤツガシラ | <i>Upupa epops</i> Linnaeus, 1758 | |

| ブッポウソウ目 | | | |
|---------|---------|---|-----------------------------|
| カフセミ科 | | | |
| 256 | アカショウビン | <i>Halcyon coromanda</i> (Latham, 1790) | 繁殖 |
| 257 | ヤマショウビン | <i>Halcyon pileata</i> (Boddaert, 1783) | 1993.7.9 ~ 8.25 幸田町 1, 他 1例 |
| 258 | カフセミ | <i>Alcedo atthis</i> (Linnaeus, 1758) | 繁殖 |
| 259 | ヤマセミ | <i>Megascyle lugubris</i> (Temminck, 1834) | 繁殖 近年繁殖激減 |
| ブッポウソウ科 | | | |
| 260 | ブッポウソウ | <i>Eurystomus orientalis</i> (Linnaeus, 1766) | 繁殖 |

| キツツキ目 | | | |
|-------|--------|---|----|
| キツツキ科 | | | |
| 261 | アリスイ | <i>Jynx torquilla</i> Linnaeus, 1758 | |
| 262 | コゲラ | <i>Dendrocopos kizuki</i> (Temminck, 1836) | 繁殖 |
| 263 | オオアカゲラ | <i>Dendrocopos leucotos</i> (Bechstein, 1802) | 繁殖 |
| 264 | アカゲラ | <i>Dendrocopos major</i> (Linnaeus, 1758) | 繁殖 |
| 265 | アオゲラ | <i>Picus awokera</i> Temminck, 1836 | 繁殖 |

| ハヤブサ目 | | | |
|-------|-----------|-------------------------------|-------------------|
| ハヤブサ科 | | | |
| 266 | ヒメチョウゲンボウ | <i>Falco naumanni</i> Fleisch | 1983.10.13 伊良湖岬 1 |

| | | | |
|-----|-------------|---|-------------------------|
| 267 | チョウゲンボウ | <i>Falco tinnunculus</i> Linnaeus, 1758 | 繁殖 近年繁殖開始 |
| 268 | アカアシチョウゲンボウ | <i>Falco amurensis</i> Radde, 1863 | 2017.10.1 田原市伊良湖岬 J1, 他 |
| 269 | コチョウゲンボウ | <i>Falco columbarius</i> Linnaeus, 1758 | |
| 270 | チゴハヤブサ | <i>Falco subbuteo</i> Linnaeus, 1758 | |
| 271 | ハヤブサ | <i>Falco peregrinus</i> Tunstall, 1771 | 繁殖 |

| スズメ目 | | | |
|-----------|-----------|--|-----------------------------------|
| ヤイロチョウ科 | | | |
| 272 | ヤイロチョウ | <i>Pitta nympha</i> Temminck & Schlegel, 1850 | 繁殖 |
| サンショウクイ科 | | | |
| 273 | サンショウクイ | <i>Pericrocotus divaricatus</i> (Raffles, 1822) | 繁殖 |
| コウライウグイス科 | | | |
| 274 | コウライウグイス | <i>Oriolus chinensis</i> Linnaeus, 1766 | 1989.6.25 弥富町 1, 他 |
| オウチュウ科 | | | |
| 275 | オウチュウ | <i>Dicurus macrocercus</i> Vieillot, 1817 | 2003.11.28 ~ 12.5 刈谷市 1 |
| 276 | ハイイロオウチュウ | <i>Dicurus leucophaeus</i> Vieillot, 1817 | 2016.10.22 ~ 23 西尾市一色町塩田跡 1, 他 1例 |
| カササギヒタキ科 | | | |
| 277 | サンコウチョウ | <i>Terpsiphona atrocaudata</i> (Eytton, 1839) | 繁殖 |
| モズ科 | | | |
| 278 | チゴモズ | <i>Lanius tigrinus</i> Drapiez, 1828 | 2010.8.29 ~ 8.31 安城市 J1, 他 |
| 279 | モズ | <i>Lanius bucephalus</i> Temminck & Schlegel, 1845 | 繁殖 |
| 280 | アカモズ | <i>Lanius cristatus</i> Linnaeus, 1758 | |
| 281 | タカサゴモズ | <i>Lanius schach</i> Linnaeus, 1758 | 2011.2.1 愛西市 1 (2010年と2冬連続) |
| 282 | オオモズ | <i>Lanius excubitor</i> Linnaeus, 1758 | 2015.1.21 ~ 3.31 愛西市 1, 他 1例 |
| 283 | オオカラモズ | <i>Lanius sphenocercus</i> Cabanis, 1873 | 2002.11.25 ~ 12.29 鍋田 1, 他 1例 |

| カラス科 | | | |
|------|---------|---|------------------------------|
| 284 | カケス | <i>Garrulus glandarius</i> (Linnaeus, 1758) | 繁殖 |
| 285 | オナガ | <i>Cyanopica cyanus</i> (Pallas, 1776) | 1998.6.13 豊根村で繁殖 1例, 本来生息も極希 |
| 286 | カササギ | <i>Pica pica</i> (Linnaeus, 1758) | 2007.4.20 飛島村 1 |
| 287 | ホンガラス | <i>Nucifraga caryocatactes</i> (Linnaeus, 1758) | |
| 288 | コウマルガラス | <i>Corvus dauricus</i> Pallas, 1776 | 一時確認が増えたが現在は極希 |
| 289 | ミヤマガラス | <i>Corvus frugilegus</i> Linnaeus, 1758 | 一時確認が増えたが現在は極希 |
| 290 | ハンボンガラス | <i>Corvus corone</i> Linnaeus, 1758 | 繁殖 |
| 291 | ハンブトガラス | <i>Corvus macrorhynchos</i> Wagler, 1827 | 繁殖 |

| キウイタダキ科 | | | |
|---------|--------|---|----------------------|
| 292 | キウイタダキ | <i>Regulus regulus</i> (Linnaeus, 1758) | 繁殖記録あり |
| ツリスガラ科 | | | |
| 293 | ツリスガラ | <i>Remiz pendulinus</i> (Linnaeus, 1758) | 1980年代から冬鳥として分布現在は極希 |
| シジュウカラ科 | | | |
| 294 | コガラ | <i>Poecile montanus</i> (Conrad von Baldestein, 1827) | 繁殖 |
| 295 | ヤマガラ | <i>Poecile varius</i> (Temminck & Schlegel, 1845) | 繁殖 |
| 296 | ヒガラ | <i>Periparus ater</i> (Linnaeus, 1758) | 繁殖 |
| 297 | キバラガラ | <i>Periparus venustulus</i> (Swinhoe, 1870) | 2013.3.13 豊川市豊川町 1 |
| 298 | シジュウカラ | <i>Parus minor</i> Temminck & Schlegel, 1848 | 繁殖 |

| ヒバリ科 | | | |
|------|----------|---|------------------------|
| 299 | クビワコウテンシ | <i>Melanocorypha bimaculata</i> (Ménétriés, 1832) | 1999.12.26 一色町 1 |
| 300 | ヒメコウテンシ | <i>Calandrella brachydactyla</i> (Leisler, 1814) | 2013.5.3 西尾市 1, 他 |
| 301 | コヒバリ | <i>Calandrella cheleensis</i> (Swinhoe, 1871) | 2013.11.24 西尾市小柳町 1, 他 |
| 302 | ヒバリ | <i>Alauda arvensis</i> Linnaeus, 1758 | 繁殖 |
| 303 | ハマヒバリ | <i>Eremophila alpestris</i> (Linnaeus, 1758) | 1978.11.1 碧南市 1, 他 1例 |

| ツバメ科 | | | |
|------|----------|---|-------------|
| 304 | ショウドウツバメ | <i>Riparia riparia</i> (Linnaeus, 1758) | |
| 305 | ツバメ | <i>Hirundo rustica</i> Linnaeus, 1758 | 繁殖 稀に越冬個体あり |
| 306 | コシアカツバメ | <i>Hirundo daurica</i> Laxmann, 1769 | 繁殖 |
| 307 | イワツバメ | <i>Delichon dasypus</i> (Bonaparte, 1850) | 繁殖 少数越冬 |

| ヒヨドリ科 | | | |
|-------|------|--|----|
| 308 | ヒヨドリ | <i>Hypsipetes amaurotis</i> (Temminck, 1830) | 繁殖 |
| ウグイス科 | | | |
| 309 | ウグイス | <i>Cettia dipone</i> (Kittlitz, 1830) | 繁殖 |
| 310 | ヤブサメ | <i>Urosphena squameiceps</i> (Swinhoe, 1863) | 繁殖 |

| エナガ科 | | | |
|-------|----------|---|---------------------------|
| 311 | エナガ | <i>Aegithalos caudatus</i> (Linnaeus, 1758) | 繁殖 |
| ムシクイ科 | | | |
| 312 | チフチャフ | <i>Phylloscopus collybita</i> (Vieillot, 1817) | 2017.2.4 高浜市前川河口 1 |
| 313 | ムジセッカ | <i>Phylloscopus fuscatus</i> (Blyth, 1842) | 2007.11.25 碧南市 1, 他 |
| 314 | カラフトムシクイ | <i>Phylloscopus proregulus</i> (Pallas, 1811) | 2002.2.26 岡崎市 1 |
| 315 | キマコムシクイ | <i>Phylloscopus inornatus</i> (Blyth, 1842) | 2014.12.14 豊橋市大清水 1, 他 1例 |
| 316 | オオムシクイ | <i>Phylloscopus examinandus</i> Stresemann, 1913 | |
| 317 | メボソムシクイ | <i>Phylloscopus xanthodyras</i> (Swinhoe, 1863) | |
| 318 | エゾムシクイ | <i>Phylloscopus borealoides</i> Portenko, 1950 | |
| 319 | センダイムシクイ | <i>Phylloscopus coronatus</i> (Temminck & Schlegel, 1847) | 繁殖 |

| 320 | イジヤマムシクイ | <i>Phylloscopus ijimae</i> (Stejneger, 1892) | 2002.8.18 安城市 (標識)1, 他 (標識) 1例 |
|----------|-----------|--|--------------------------------|
| スクロムシクイ科 | | | |
| 321 | コンドジロムシクイ | <i>Sylvia curruca</i> (Linnaeus, 1758) | 2008.4.15 西尾市 1, 他 1例 |

| メジロ科 | | | |
|--------|-----------|--|----------------------------|
| 322 | メジロ | <i>Zosterops japonicus</i> Temminck & Schlegel, 1845 | 繁殖 |
| センニュウ科 | | | |
| 323 | マキノセンニュウ | <i>Locustella lanceolata</i> (Temminck, 1840) | |
| 324 | シマセンニュウ | <i>Locustella ochotensis</i> (Middendorff, 1853) | |
| 325 | ウチヤマセンニュウ | <i>Locustella pleskei</i> Taczanowski, 1890 | 2002.7.28 ~ 9.8 田原市 (標識) 3 |
| 326 | オオセッカ | <i>Locustella pryeri</i> (Seebohm, 1884) | 少数越冬 |
| 327 | エゾセンニュウ | <i>Locustella fasciolata</i> (Gray, 1861) | 2003.10.8 西尾市 1, 他 |

| ヨシキリ科 | | | |
|-------|--------|--|----|
| 328 | オオヨシキリ | <i>Acrocephalus orientalis</i> (Temminck & Schlegel, 1847) | 繁殖 |
| 329 | コヨシキリ | <i>Acrocephalus bistrigiceps</i> Swinhoe, 1860 | 繁殖 |
| セッカ科 | | | |
| 330 | セッカ | <i>Cisticola juncidis</i> (Rafinesque, 1810) | 繁殖 |

| レンジャク科 | | | |
|--------|--------|---|--|
| 331 | キレンジャク | <i>Bombycilla garrulus</i> (Linnaeus, 1758) | |
| 332 | ヒレンジャク | <i>Bombycilla japonica</i> (Siebold, 1824) | |

| ゴジュウカラ科 | | | |
|---------|--------|--------------------------------------|----|
| 333 | ゴジュウカラ | <i>Sitta europaea</i> Linnaeus, 1758 | 繁殖 |

| キバシリ科 | | | |
|-------|------|--|----|
| 334 | キバシリ | <i>Certhia familiaris</i> Linnaeus, 1758 | 繁殖 |

| ミンサザイ科 | | | |
|--------|-------|---|----|
| 335 | ミンサザイ | <i>Troglodytes troglodytes</i> (Linnaeus, 1758) | 繁殖 |

| ムグドリ科 | | | |
|-------|----------|--|---------------------------|
| 336 | ギンムグドリ | <i>Spodiopar sericeus</i> (Gmelin, 1789) | 2016.2.27,29 西尾市一色町♀ 1, 他 |
| 337 | ムグドリ | <i>Spodiopar cineraceus</i> (Temminck, 1835) | 繁殖 |
| 338 | シベリアムグドリ | <i>Agropsar sturninus</i> (Pallas, 1776) | 1998.10.10 伊良湖岬 1 |
| 339 | コムグドリ | <i>Agropsar philippensis</i> (Forster, 1781) | |
| 340 | カラムグドリ | <i>Sturmia sinensis</i> (Gmelin, 1788) | 1975.9.27 木曾川町 1, 他 |
| 341 | ホンムグドリ | <i>Sturmia vulgaris</i> Linnaeus, 1758 | |

| カワガラス科 | | | |
|--------|-------|---------------------------------------|----|
| 342 | カワガラス | <i>Cinclus pallasi</i> Temminck, 1820 | 繁殖 |

| ヒタキ科 | | | |
|------|---------|--|---------------------------|
| 343 | マミジロ | <i>Zoothera sibirica</i> (Pallas, 1776) | 繁殖 近年繁殖期記録なし |
| 344 | トラツグミ | <i>Zoothera dauma</i> (Latham, 1790) | 繁殖 |
| 345 | カラアカハラ | <i>Turdus hortulorum</i> Sclater, 1863 | 2014.5.3 名古屋市♂ 1, 他 1例 |
| 346 | クロツグミ | <i>Turdus cardis</i> Temminck, 1831 | 繁殖 |
| 347 | マミチャジナイ | <i>Turdus obscurus</i> Gmelin, 1789 | |
| 348 | シロハラ | <i>Turdus pallidus</i> Gmelin, 1789 | |
| 349 | アカハラ | <i>Turdus chrysolurus</i> Temminck, 1832 | 繁殖 近年繁殖期記録なし |
| 350 | ツグミ | <i>Turdus naumanni</i> Temminck, 1820 | |
| 351 | ヤドリギツグミ | <i>Turdus viscivorus</i> Linnaeus, 1758 | 2017.10.28 西尾市一色町 1, 他 2例 |
| 352 | コマドリ | <i>Luscinia akahige</i> (Temminck, 1835) | 繁殖 |
| 353 | オガワコマドリ | <i>Luscinia svecica</i> (Linnaeus, 1758) | |
| 354 | ノゴマ | <i>Luscinia calliope</i> (Pallas, 1776) | |
| 355 | コルリ | <i>Luscinia cyane</i> (Pallas, 1776) | 繁殖 |

| | | | |
|-----|----------|--|-------------------------|
| 356 | ルリビタキ | <i>Tarsiger cyanurus</i> (Pallas, 1773) | |
| 357 | ジョウビタキ | <i>Phoenicurus aureorus</i> (Pallas, 1776) | |
| 358 | ノビタキ | <i>Saxicola torquatus</i> (Linnaeus, 1766) | |
| 359 | イナビタキ | <i>Oenanthe isabellina</i> (Temminck, 1829) | 2008.9.6 一色町 1, 他 1例 |
| 360 | サバウビタキ | <i>Oenanthe deserti</i> (Temminck, 1825) | 1980.5.11 鍋田 1, 他 1例 |
| 361 | イソヒヨドリ | <i>Monticola solitarius</i> (Linnaeus, 1758) | 繁殖 |
| 362 | エゾビタキ | <i>Muscicapa griseisticta</i> (Swinhoe, 1861) | |
| 363 | サメビタキ | <i>Muscicapa sibirica</i> Gmelin, 1789 | |
| 364 | コサメビタキ | <i>Muscicapa dauurica</i> Pallas, 1811 | 繁殖 |
| 365 | ミヤマヒタキ | <i>Muscicapa ferruginea</i> (Hodgson, 1845) | 2007.5.2 名古屋市 1 |
| 366 | マミジロキビタキ | <i>Ficedula zanthopygia</i> (Hay, 1845) | 8例記録有り |
| 367 | キビタキ | <i>Ficedula narcissina</i> (Temminck, 1836) | 繁殖 |
| 368 | ムギマキ | <i>Ficedula mugimaki</i> (Temminck, 1836) | |
| 369 | オジロビタキ | <i>Ficedula albicilla</i> (Pallas, 1811) | 2017.9.18 安城市 1, 他 1例 |
| 370 | ニシオジロビタキ | <i>Ficedula parva</i> | 日本鳥類目録改訂第7版ではオジロビタキの亜種? |
| 371 | オオルリ | <i>Cyanoptila cyanomelana</i> (Temminck, 1829) | 繁殖 |

| イフヒバリ科 | | | |
|--------|-------|--|--|
| 372 | イフヒバリ | <i>Prunella collaris</i> (Scopoli, 1769) | |
| 373 | カヤクグリ | <i>Prunella</i> | |

－ 執筆者（敬称略）－

| | |
|--------|--------|
| 小笠原 昭夫 | 寺本 育夫 |
| 新 實 豊 | 天野 弘朗 |
| 秋山 幸之朗 | 伊藤 岱二 |
| 木野 浩一 | 片山 卓也 |
| 古澤 穎一 | 太田 次雄 |
| 大羽 康利 | 小嶋 良武 |
| 清水 敏弘 | 萩野 真市 |
| 今岡 利保 | 緒方 清人 |
| 花 井 啓 | 佐藤 武男 |
| 岩 井 昇 | 加藤 正人 |
| 米 倉 静 | 小笠原 正博 |
| 高橋 伸夫 | 渡邊 幸久 |

－ 野鳥写真提供者（敬称略）－

| | |
|--------|--------|
| 浅井 利明 | 竹田 恵一郎 |
| 緒方 清人 | 服部 憲一郎 |
| 梶 川 将 | 林 正直 |
| 川田 奈穂子 | 村 上 修 |
| 杉山 時雄 | 村 松 喬 |
| 高橋 伸夫 | 森泉 正人 |
| 武 居 栄 | 矢田 和子 |

－ 編集委員 －

愛知県自然環境課
 愛知県環境調査センター 企画情報部
 野鳥生息調査 調査員 高橋 伸夫
 日本野鳥の会愛知県支部 支部長 新 實 豊
 日本野鳥の会愛知県支部 調査研究部長 秋山 幸之朗
 DTP編集 田口 奈緒子

Web ページでは、愛知県鳥類生息調査結果を公開しております。

愛知県鳥類生息調査 web ページ
<http://www.pref.aichi.jp/kankyo/sizen-ka/shizen/yasei/chouturi/index.html>

《表紙》

| | |
|---|---|
| | 2 |
| | 3 |
| 1 | 4 |
| | 5 |

《裏表紙》

| | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|
| 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 |
| 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 |
| 18 | 19 | | | 20 | 21 |
| 22 | 23 | | | 24 | 25 |
| 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 |
| 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 |

- | | | |
|------------|------------|------------|
| 1：コノハズク | 14：カケス | 27：シロチドリ |
| 2：ヒヨドリ | 15：シジュウカラ | 28：スズガモ |
| 3：マミジロ | 16：セグロセキレイ | 29：キセキレイ |
| 4：コアジサシ | 17：キバシリ | 30：ウグイス |
| 5：ハマシギ | 18：ヤマガラ | 31：アオサギ |
| 6：ミツコビカモメ | 19：カワセミ | 32：オシドリ |
| 7：ウミウ | 20：エナガ | 33：シノリガモ |
| 8：サシバ | 21：ホオジロ | 34：カワウ |
| 9：ミサゴ | 22：アオゲラ | 35：キンクロハジロ |
| 10：オオタカ | 23：チュウヒ | 36：ハクセキレイ |
| 11：チョウゲンボウ | 24：メジロ | 37：ヤマセミ |
| 12：コマドリ | 25：オオアカゲラ | |
| 13：ホトトギス | 26：カワガラス | |

愛知県鳥類生息調査（1967-2016）
50年の記録

発行年月 平成 30 年 3 月
 編 集 日本野鳥の会愛知県支部
 愛知県環境部自然環境課
 愛知県環境調査センター
 発 行 愛知県環境部自然環境課



愛知県環境部自然環境課

〒460-8501 名古屋市中区三の丸三丁目1番2号

電話 (052) 954-6230 (ダイヤルイン) FAX (052) 963-3526